



2011/10/16

seren arbazard

ファーヴェアの月ウムトナの日

例えば道に迷った人が地図を片手にウロウロしているとする。自分は相手の行きたい場所を知っている。教えてあげれば相手は予定通りに目的地に辿り着けるだろう。だが積極的に助けなかったからといって、別に悪いことをしたわけではない。

例えば大きな荷物を抱えた老女がいるとする。自分にとってその荷物は軽いし、進行方向も相手と同じだ。持ってあげれば相手は大変助かるだろう。だが積極的に助けなかったからといって、誰が自分を責められようか。

例えば間違えた電車に乗ろうとする人がいる。一声かけてあげれば相手は正しい電車に乗り、時間通りに目的地に着くことができるだろう。だが積極的に助けなかったからといって、咎を受けるいわれはない。

南神楽(kagra trikol)はこうして今日だけで3回他人を見捨てた。これは彼にとって当然の行為であり、「面倒なことに首を突っ込まない」という彼の信条に即した振る舞いであった。

自分は積極的に人を助けない。ただそれだけだ。その何が悪い。神楽はずっとそう考えてきた。だがこの思想を表立って口にすることはない。というのも、このアルバザードという世界一の大国で暮らす人間には基本的に「お節介遺伝子」が組み込まれているからだ。もともと、彼らは「お節介遺伝子」などという言葉を決して受け入れはしまい。恐らく「親切遺伝子」と自負するだろう。神楽にはそれが不快で仕方なかった。

神楽はこれといって悪い青年ではない。むしろ客観的に見れば優れた学生だ。なにせ国内で最も優秀なアルナ高校に通っているのだから。他の平均的な16歳の高校生と比べても素行は品行方正で、人様に迷惑をかけるようなことはしない。ただ積極的に人助けをしな

い内向的な性格というだけだ。

どうして困っている人に手を貸さないかと問われれば、少し答えに窮してしまう。原因がひとつではないからだ。「親切心でやったことなのにお節介だと思われたら嫌だ」、「自分の親切心がかえって迷惑になるのではないか」、「自分にとっては助力のつもりでも、相手はそれを欲していないのではないか」、「善人である自分に酔いたいだけなのではないか」など、色々な理由がある。

もっとも、神楽も全く人に手を差し伸べないというわけではない。だが何かしようとする、手を出す前にこうした邪念に襲われ、結局何もできないうちに終わってしまうのだ。そういう生活をしているうちに、積極的に人を助けられないことが信条として胸にこびりついてしまった。

学校からの帰り道、神楽はいつも以上に物憂げだった。イライラしているといってもよかった。思春期特有の漠然とした苛立ちなのか、はっきりした原因のある苛立ちなのか、それは自分でも判らなかつた。ただ自分の人生がつまらないという思いだけは強くあつた。最も優秀な学校に通い、友達もゼロではない。家庭に大きな問題もなく、若さゆえ健康の問題もない。だが漫然と繰り返される平坦な毎日が神楽には退屈だった。

——何かを変えてみたい。

ふとそう思った。人生このままではいけないという思いが急に降って湧いた。かといって何をどう変えればいいのか皆目見当もつかなかつた。

そんなときだった。目の前を歩いていた——8歳前後だろうか——小学生らしき少女が鞆から何かを落としたのに気付いた。いつもの神楽なら信条に従って無視をするところだ。だが彼はこう考えた。もしかしてこの信条のおかげで出会うべく出会いを失い、面白いイベントを取り逃がしているのではないか。

積極的に人を助けられないということは、積極的に人と関わらないということだ。その内向的な性格が人生をつまらなくさせているのではないか。落し物を拾ってあげるという極々簡単なことで、もしかして自分の人生は違うほうに転がっていくのではないか。神楽はそんな期待にも近い思いを抱くと、しゃがんで落し物に手を伸ばした。

なに、一度信条に背くくらい大した問題ではあるまい。そんな風に軽く考えていた。

落ちていたのは赤い袋に入ったお守りだった。符術(fredir)で使う絵馬(arfa)が中に入った一般的なタリスマンだ。布製の袋に願いを籠めた小さな絵馬を入れるというのはここアルバザード土着の文化ではない。南方に住む風人が持ち込んだ文化品だ。このお守りは彼らの言葉で sakula という。

「君」呼びかけると前を歩く少女が立ち止まり、こちらを振り向いた。神楽はお守りをぶらぶらさせて彼女の視界に入れる。「落としたよ」

「あ、ありがとうございます」

少女はにこりとすると素直に札を言ってそそくさと小走りで歩み寄ってきた。やや恥ずかしそうな照れ笑いを浮かべながら神楽を見てくる。表情とは裏腹に素直な感謝の言葉を聞いた神楽は、一瞬人助けも悪いものではないなと思いかけた。

思いかけた想いが完了形に至ろうというその刹那、黒い影が神楽の目の前に現れた。代わりに少女の姿が忽然と消え去った。同時にゴツという嫌な音がした。

「はあ？」とはじめは思った。そうとしか思えなかった。何があったのか理解するまでに数秒の時間を要した。突如目の前に現れた黒い影は果たして人であった。30代くらいだろうか、OLの格好をした女性だった。そして彼女の下にはお守りを落とした少女の肢体があった。

神楽はふいに空を見上げる。そこにあったのはビルの屋上。真横にそびえる建物のものである。とっさに神楽は息を呑み、眼下の女性に目を戻す。

——女性は屋上から落ちてきたのだ。

状況を理解した瞬間、全身の毛穴が閉じるのが分かった。そう、彼女は飛び降りてきたのだ。恐らくは自殺をするために。そしてたまたま通りかかった少女を下敷きにした。神楽のわずか1m手前で。

女性と少女が折り重なった不気味な山からじわっと血が流れ出した。女性の頭は割れ、手足はおかしな方向に曲がっている。一方少女は自分に何が起きたかも分からないまま目を見開いている。その小さな目や鼻や口からは線のように赤い血が流れている。わずかに

動く唇は「痛い」と言っているように見えた。

突如、群衆から女性の甲高い悲鳴が上がった。続いて男性の「大丈夫か!?!」、「どうした!?!」、「おい、救急車と警察だ!」という怒号が飛び交う。神楽はその様子を呆然と立ち尽くして見ていた。

神楽の頭の中で最初に浮かんだ言葉は悔恨でも憐憫でもなかった。

——ほら、やっぱり。

自然とその言葉が出てきた。せっかく自分を変えようとして親切心を出したらすぐコレだ。自分が彼女を呼び止めさえしなければこんなことにはならなかった。いつものように無視をしていればよかったんだ。そうすれば自分はお守りを拾わず歩みを進め、数秒後に後方で女が地面とキスする音を聞くだけで済んだのだ。

何がお守りだよ……。

自嘲気味にお守りを見つめる。そこにはよりもよって「交通安全」という白い刺繍がしてあった。

……ふざけやがって。

お守りを持つ手に力が入る。

「おい君、大丈夫か!?! 何があったんだ?」サラリーマン風の男性が神楽の肩を掴んで揺らす。「下にいる子は君の知り合いか?」

「いえ……僕は」このままでは事故の目撃者として警察の面倒な事情聴取に巻き込まれる。落し物を渡そうと彼女を呼び寄せたのは自分だ。それが罪になるとは思えないが、根掘り葉掘り警察に訊かれるのは嫌だった。神楽は手に持ったお守りをとっさに制服の胸ポケットに仕舞い込んだ。「僕は関係ありません」

「関係ないって、君……」

「とにかく、何も知りませんから」

言い放つと、逃げるようにその場を去った。しかし足取りがふらつく。その上目も見えづらい。

駅に入るとトイレに駆け込む。鏡を見ると、顔に赤茶色の斑点が付いていた。どうやら

飛び降りる瞬間に衝撃で血が舞ったらしい。確かに女性の頭は割れていたし、少女も血を流していた。いずれかのものだろう。衝突の瞬間に鮮血が飛び散り、その一部が顔に撥ねたものと思われる。視界がぼやけているのは目に血が入ったからだろう。

神楽は水を出して顔を洗うと、ハンカチでやや青ざめた顔を拭いた。鏡の中の自分を見つめる。

「僕のせいじゃない……」

掠れた声で小さく呟いた。

「僕のせいじゃない……！」

小さく、しかし宣言するような口調で彼は自分に言い聞かせた。

■世界背景

●地理

カルディア(kaldia)：地球のある世界とは異なる異世界のこと。ゼロから作られた人工世界。

アトラス(atolas)：カルディアにある太陽系の第三惑星。地球に相当する星。

アルバザード(arbazard)：惑星アトラス一の大国。地球でいう南仏に相当する位置にある。

ルティア(lutia)：アトラス第二位の強国。位置的にはカナダやアメリカに当たる。

凧(nagi)：極東にある半島の国。日本や韓国に相当する。独特の東洋文化を持つ。

カレンシア(kalensia)：アルバザード南部のカレン半島にあった国。渡来した凧人によって建てられたが中世で滅び、アルバザードに吸収された。現在でも凧人が多く住む。

アルナ(ama)：アルバザードの首都。南仏に相当。世界の中心で、様々な国の人間が集まる。

カテージュ(kateej)：アルバザード第二の都市。アルバザードの南端にある沿岸の地域。南方人が住み、独特の方言を使う。

カレン(kalen)：アルバザード南端にあるカレン半島の地域。旧カレンシア王国。イタリアに相当するが、文化的には凧人が支配していた関係で日韓に近い。

アルシア(alsia)：アルバザード北西部の都市。ルティア人が多く住む。

アルナ市(amahaim)：アルナ県の県庁所在地。まさに世界の中心。アルナ学校などがある。

リシア市(lixia)：アルナ市北西部の市。フェリシア学院などがある。

カリーズ市(kaliz)：リシア市の北に位置する市。日本でいう豊島区あたりに相当。

サンベル市(sanbel)：カリーズ市の西部に位置する市。日本でいう和光市あたりに相当。

ファイマン市(faiman)：アルナ市東部の市。日本でいう有楽町あたりに相当。

モモエ市(momoe)：ファイマン市の東部の市。日本でいう新木場あたりに相当。

蒔蘿線(faimanrein)：サンベルーモモエ間を走る私鉄の地下鉄。

幻環線(amaxelte)：アルナ市の外側を走る環状線。山手線に相当。

勇郭線(vrevrein)：アルミ ヴァ線と幻環線を繋ぐ12本の路線。

アルミ ヴァ線(armivarein)：アルナ市を走る地下鉄。12本の線から成る。

●言語

アルカ(arka)：約400年前に作られた人工言語。アルバザード語をベースにした国際補助語。現在多くの国で公用語として使われている。

アルバザード語(arbaren)：アルカのベースとなった言語。通称アルバレン。現在では農村部などでしか用いられない。

ルティア語(tiaren)：ルティアの言葉。アルバザードの公用語のひとつ。日本におけるフランス語のような地位にあり、優雅な言語という認識が強い。アルバザードの学校における必修科目である。

風霧(nagili)：風人の言葉。風人と旧カレンシアで用いられた。現在はアルバザードの公用語のひとつ。

●人物

アシェット(axet)：約400年前に世界を悪魔から救った英雄たち。

使徒(lantis)：アシェットの28人のメンバー。

セレン＝アルバザード(seren arbazard)：アシェットの第14使徒。アルカの作者。

リディア＝ルティア(ridia lutia)：アシェットの第1使徒。悪魔を倒した救世主。

メル＝ケートイア(mel keetoia)：アシェットの第7使徒。メル暦の創造者。

ミロク＝ユティア(mirok yutia)：アルバザードの現代社会を築いた独裁者。

●その他

メル暦(melpalt)：アトラスの多くの地域で採用されている暦。ひと月は28日で、一年は13月。月と日には使徒の名を用いる。なお、『忌憑』の舞台はメル407年の秋。2011年の地

球から見てやや近未来。

テームス(teems)：悪魔の母。約400年前に一旦滅ぼされた。

悪魔(deem)：テームスが産んだ悪魔たち。人数は少ないが、強大な力を持っている。一部は約400年前に滅ぼされたり封印されたりした。

魔物(adel)：テームスが振動するたびにテームスの体からこけらが剥がれ落ちる。それが魔物・モンスターとなってアトラスに降り注ぐ。約400年前に滅ぼされたことになっている。

死神(avelant)：死者の魂をあの世界(ardel)に運ぶ者たち。普段の外見はふつうの人間と区別が付かない。

アンセ(anse)：主に腕時計の形をした携帯端末。電子マネー、免許、身分証、定期券などの情報が中に入っており、国民はID代わりに利用する。

レイゼン(leizen)：スマートフォンに相当する機械。アンセの子機として機能する。『忌憑』の時代ではまだ四つ折りや電子ペーパーなどは備わっていない。

学年：日本から一段階引いて数える。前期大学なら高校、高校なら中学、中学なら小学、小学なら幼稚園。ただし本書では日本の学齢に合わせた表記にした。

ファーヴァの月リーネの日

翌日、神楽はいつもどおりの時間に家を出た。アルバザード国アルナ県サンベル市住まいなので、アルナ高があるアルナ市までは電車で30分から1時間といったところだ。

家から最寄り駅までは徒歩5分。そこから地下鉄の蒔蘿線に乗り、コノーテ＝セレン駅で下車。そこからまた脚でコノーテ＝メル通りにあるアルナ高まで行く。

徒歩で行くのが嫌だという場合は一旦蒔蘿線のカリーズ駅で幻環線に乗り換え、北コノーテ駅まで行く。そこから勇郭線でアルミヴァ線直通の電車に乗り、コノーテ＝メル駅まで南下すればよい。これだと歩かずに学校まで行くことができる。しかし16歳の若い神楽には乗り換えの方がむしろ面倒で、蒔蘿線一本で行ったほうが気楽だ。

だが今日の神楽は違った。昨日の事故があったのはコノーテ＝セレン駅を出てすぐのところだった。流石に昨日の今日であの場所を通るのは気が引けたので、今朝はカリーズ駅で幻環線に乗り換えて勇郭線経由で学校まで行った。定期券の区間ではないため、アンセに電車賃が余計に課金されてしまったのが痛いところだ。

電車の中で神楽はレイゼンを鞆から取り出し、ニュースサイトを閲覧した。「コノーテ＝セレン駅 飛び降り」で検索すると、すぐに昨日の事故が出てきた。

予想通り、あれは飛び降り自殺だったらしい。飛び降りたのはアリカ＝アンジェ(arika anje)という34歳の女性で、病院勤務をしていたらしい。仕事のミスに苦に自殺を図ったとのことだ。一方下敷きになったのはティーテル＝サヴァン(tiitel savan)という8歳の少女。

巻き込み自殺として死者は大きなバッシングを受けていた。死者に鞭打つなんて夢喰い(diaset)でもやるまいにと批判しながらも、確かに下敷きにされたほうとしてはたまらないだろうなど思った。

ふと昨日の惨劇の映像が脳内をよぎり、神楽は軽い吐き気をもよおした。手を口に当て、もう片方の手でレイゼンのウィンドウを閉じた。

忘れよう。忘れないと。そう、それしかない。

学校に着くと北門から西5号館まで進む。そのまま教室を目指して歩いていく。アルナ高校は1学年が14組で構成される。神楽が属するのは文系特進の14組で、通称セレン組

と呼ばれる。

教室のドアを開くと、自分の席に着く。鞆を机のフックにかけたところで「よお」という男の声が後方から降ってきた。

「おはよう、ネスト(nest)」

振り向くとそこには小柄でハリネズミのような髪をした友人が立っていた。制服のボタンを第二まで開けている、少しやんちゃというか元気の良い少年だ。

「なあ神楽、宿題やってきたか？」

「最低限はな」

神楽の成績は中から中の上といったところだ。これといって良いというわけでもないが、決して悪くはない。専門は語学で、ルティア語の成績は良い。ほかに風霧なども習得している。大学に入ったら語学を研究科目にしようと思っている。

ネストとしばらく談笑しているとやがて担任の教師が来て朝礼となった。当たり前だが何事も離れた場所で起きた事故の件など誰一人として言及することはなかった。これが学校の最寄り駅だったら話も違うのだろうか、と神楽は思った。

午前の授業が終わると昼休みになった。この国の昼休みは長く、2 時間もある。シエスタ付きというわけだ。

神楽はネストと連れ立って学食に行った。この学校は幼稚園から大学院までひとつのキャンパスで一貫した教育を提供している。その関係で学食はひとつではなく、カフェテリアという形で随所に点在している。みなお気に入りのカフェがあり、そこで学食を食べるというシステムだ。むろん弁当派の人間も存在するが、神楽やネストは学食派だった。

高校生は成長期ということもあり、特に男子はよく食べる。そういうわけで高校の校舎の近くにあるカフェはレストランといっても過言ではないような造りをしていることが多い。神楽の行きつけもそのタイプで、食堂のようであった。

白いドーム状の大きな学食に入ると、食券販売機の前でメニューを選ぶ。今日は蕎麦におにぎりという風食にした。いつもなら大盛りだが、昨日の今日なので流石に食欲が出ない。

蕎麦はもともと軟水の多いアルパザードでも食されていたが、おにぎりという料理は風

人がもたらしたメニューだ。元は携帯食だったらしい。おかずを核に、米を丸めて三角形に固めた食べ物だ。

ちなみにアルバザード人がもともと食べていた蕎麦は海産物の出汁で味付けた麺だったが、凧人がもたらした蕎麦は醤油という調味料で味を付けたものだ。どうもアルバザードではこちらのほうが人気が出てしまい、ワツカ(wakka)やカテゴリーなど一部の地域を除いて蕎麦といえば醤油味と決まっている。

食券のボタンを押し、アンセをかざす。自動で電子マネーが引き落とされ、代わりに食券が愛想なく吐き出される。ネストはカレーとパンを買っていた。

カウンターに食券を持っていき、学食のおばちゃんに料理と券を交換してもらう。トレイに蕎麦やらぬるま湯やらを乗せると、神楽は近くの席に座った。

「神楽よお、今年の文化祭はどうする？」

「どうって……」蕎麦を音もなく啜る。凧人は勢い良く音を立てるが、アルバザード人やルティア人はそれをしない。「まだ一ヶ月以上も先じゃないか。まだ何も決めてないよ」

「女の子、誘わないのか？」

「相手がいらないよ。ネスト、お前はどうかんだ？」

ぷるぷると手を振って笑う。「だ一めだめ。何人かに声かけたけど、フラレっばなし。そのうち記録樹立できんじゃね？」

「ギネス(imelia)にでも申請するか？ 立会人くらいならなってやってもいいぞ」

二人でへらへら笑っていると、ずっと神楽の右に一人の少女が座った。その瞬間、ネストが小さく息を吞んで神楽の横っ腹を肘でツンツンした。

「おい、柊だ。柊霞(kasmi sarbelia)」

ネストの小声を受けて反射的に隣を見ると、そこには滝のような黒髪の少女が一人ぽつんと座って蕎麦を食べていた。麺を啜るたびに髪を掻き上げて白い耳が顔になるのが艶かしい。だが表情は雪のように冷たく、その目は世界を冷やかに見据えているようだ。

「なんだよ」こちらも小声で。「そんなに有名なのか」

「当たり前だろ！」小声なのに張り裂けんばかりの声で叫ぶネスト。「ウチの学年のレン

ス・リーファだけ。その中でも一番の美人と噂だ」

レンス・リーファというのは各学年の成績優秀者上位6名を集めた集団のことだ。霞は理系特進である7組——通称メル組——を代表するレンス・リーファの一員だ。そのくらいのことはさしもの神楽も知っているが、だからといって彼女をそこまで特別視する理由など彼には思い当たらなかった。

「知ってるか、あいつのあだ名。雪の華って言うんだぜ」

「なんでまた？」と首を傾げる。

「男に告られること数十、いや、数百回。にもかかわらず一顧だにせずフリ続けているらしい。それで付いた名前がそれさ」

「お前もレコードに貢献したクチか？」

「いいやいいや」ぶんぶんと首を振る。「そんな恐れ多いことできねえよ。二秒でフラれるに決まってるからな」

「ずいぶんと自覚があるじゃないか。にしても何百人もフルって凄い話だが、男に興味がないのかな」

「話によると数学にしか興味が無いらしい。数学が友達で恋人。生粋の数学ガールだよ」

「へえ、お前とは大違いだな」とからかおうとしたとき、霞の後方から男子の声がした。

「柊……ちょっといいかな」

即座に野次馬と化した神楽たちはチラと後ろを向く。そこには他クラスと思しき知らない少年が立っていた。

霞は声と呼ばれると、表情を変えずに振り向いた。

「……何？」

「俺、5組のカルザス＝セミアン (kalzas semian) っていうんだけど、知らないよね……」

「ええ」はつきりと答える霞。5組といえば通称フルミネア組で、史学・哲学が専攻だったなど神楽は思い出した。

「その……そっちは俺のこと知らないかもしれないけど、俺はずっと1年のころから柊のこと見てて……」もじもじする少年。神楽たちの野次馬根性がマックスに達する。「それ

で良かったらその……彼氏候補として友達になってくれないかな……って」

霞はカルザス少年を一瞥すると、ふいと前を向き直った。そして少年を見ることなく言葉を投げ捨てた。

「私と貴方の和は31。貴方はいくつ？」

それは肯定でも否定でもなかったし、ましてや相手の言葉の受諾でも拒絶でもなかった。最もとはいわないまでも、あからさまに場違いな霞の返答に、カルザス少年のみならず神楽とネストも固まった。

なんだそれは……。告白に対する返事が数の問題……？

「え……あの」おどおどする少年。それもそうだろう。無理はないと神楽は同情した。「そ……そうだな」それでも答えようとする姿勢は素晴らしいと評価してあげたくなった。「16……かな。ほら、俺は16歳で君はまだ15歳。足せば31になるだろ」

この状況にもかかわらず果敢に答えようとするその態度は賞賛に値する。神楽は心の中で拍手をした。しかし霞はというとにべもない。

「残念ながら私は16歳よ」

ひとつとなのに神楽はあちゃあと思った。「好きな相手の誕生日くらい調べとけよ少年」とツツコミたくなった。

霞は最後のチャンスを与えるようにヒントを出した。

「私は21。貴方は？」

「え……あの……」おどおどする少年。すると霞は雪の華にふさわしい冷たさで宣告した。

「貴方に私と話す資格はないわ」

少年は言葉に詰まると手をぎゅっと握って小刻みに震えた。神楽とネストは心配そうに少年を見る。やがて彼は何も言わずその場を去っていった。当事者でもないのになぜかホッと息をつく神楽たち。

「おい」ネストが体をもたげて小声で言う。「噂以上に凄い女だな。俺、アタックなんてしなくて正解だったわ」

「それよりお前、今の問題解けたか？」

「はぁ？ 解けるわけないだろ。理系特進クラスの出す問題なんてさ」と吐き捨てる。し

かし神楽は唇に手を当てて「うーん」と呻いた。何か今のやり取りで引っかかることがあった。それが何だか分からないが、ネストが言うほど「凄い女」には感じられなかった。

横目でじっと霞を見ていると、彼女は早々に蕎麦を食べ終わり、席を立った。と、そのとき神楽は「うん?」と言って目を大きく開いた。立ち上がった彼女の胸元に黒い靄のようなものがかかっていたからだ。

(汚れ……か?)

二度見しようとしたが、霞はさっさとその場を去ってしまった。

「どうした神楽、そんなにじっと目で追いかけて。終に興味でも持ったのか」意外そうな顔のネスト。「やめとけやめとけ。ありや性格がキツすぎる」

「いや、そういうことじゃなくて。今終の胸元に何か見えなかったか?」

「ふむ……」腕を組む。「恐らくBカップと見たが」

「そういうことじゃなくて!」神楽は顔を赤くして井をガチャンと置いた。「てゆうかなんで制服の上からそんなことが分かるんだよっ」

「そりゃお前、健全な男子がデファクトスタンダードとして生得的に持つアビリティによってだよ」

「あいにくだが僕はそんなアビリティ持ってないぞ!」神楽は声を張り上げた。

昼食を終えると午後の授業が始まるまで1時間以上ある。歓談をしたり昼寝をしたりといった時間だ。

それが終わると午後の授業。神楽は何事もなくこの日の授業を終え、終礼が終わって散会となった。何事もなければ今日はこれで終わりだ。机のフックに引っ掛けた鞆を持ったとき、「神楽君」と可愛らしい声に呼び止められた。

見上げるとそこにはメガネをかけた同級生の少女が鞆を両手で持って立っていた。スカート丈を始め、制服の着こなしは完全に校則通りだ。

「雨宮……」

思わず苗字を呟いた。それはこのクラスの優等生、雨宮丁(hinoto yuuan)だった。生徒会所属の上にクラス委員と図書委員まで兼ねるという多忙ぶりだ。面倒なことは全て雨宮にお任せというムードがクラスに漂っているが、噂によると彼女は押し付けられた役目にも

かわらずその手腕を余すところなく発揮しているらしい。どれだけ真面目な優等生なんだと神楽は常々思ってきた。

「神楽君、今日図書委員の集まりだよね」

丁はこちらのことを名前に君付けで呼ぶ。アルバザード人の間だと一般的な呼び方だ。もっとも、アルバザードというのは移民国家だから色々な国の人がいる。丁とはそんなに親しい間柄ではないが、彼女はこちらを名前と呼んでくる。そのカラクリはこうだ。

まずこちらの苗字の南(trikol)というのはルティア語だ。神楽は生まれも育ちもアルバザードだが、苗字からするとご先祖様はルティア人だったことになる。恐らくアルバザードに渡来したころは北西部のアルシアあたりにでも住んでいたのだろう。

ルティア人がルーツということはルティア人の呼称に従うのがこの国の習わしだが、ルティア人というのもまたアルバザード人同様ファーストネームで呼び合うのが普通だ。それで丁は自動的にこちらを「神楽君」と呼ぶのだ。

逆に神楽が彼女を「丁ちゃん」でなく「雨宮」と呼ぶのは、彼女の雨宮(yuuan)という苗字が凧人の言葉——凧霧——だからだ。凧人は親しい間柄でないとファーストネームを使わない。うっかり「丁ちゃん」などと言おうものなら大変だ。アルバザードのような移民大国に住んでいると呼び方ひとつで思わぬ苦勞をすることになる。

「図書委員の集まり……」すっかり忘れていたが、それをできるだけ隠すように神楽は席を立つ。「ああ、今から行くところだよ」

「良かった」丁はにっこりすると、左手のこぶしを口元に当てる。「神楽君、忘れてるんじゃないかって心配だったの」

ご名答、と思いながら丁の後に付いて教室を出る。集会は同じ西5号館の302号室だった。

教室に着くと中には既に数人の委員が来ていた。委員長の丁が来ると会は自動的に始まった。図書委員会は各クラス1、2名。2名の場合は必ず男女のペアと決まっている。長方形の教室に格子状に置かれた机と椅子。神楽はひとけのない後ろのほうに座った。丁は議長として教壇に立った。

ふと周りを見回すと、つい先程学食で見た霞も座っていた。彼女は端っこの机で一人

人しく——そしてやる気なさげに——窓の外を見ていた。

今日の議題は月末にある催日の「本の日(leisel)」についてだ。アルバザードの祭日は休日と催日に分かれる。催日はイベントがあるだけで休みにならないので神楽は基本的に興味がない。

本の日には街の本屋が値下げを行ったり、税金を気にせず電子書籍のDLができるといったイベントがあるので、神楽としては語学書の買い時なのだ。

一方図書委員会としては溜まりに溜まった図書館の本をどう処理しようかというのが目下の課題だ。現在はレイゼンもできて電子書籍も普及の気配を見せつつある。今後紙の書籍はどんどん廃れていくことが予想される。それにあって図書館にある数えきれない本を学校としてどのように扱うかというのが問題となっていた。

それにしてもそのような大きな問題を学校側でなく生徒側が決めることになるとは、この学校の自治力はかなり強いと言わざるをえない。

真面目な委員と超真面目な委員長が話し合いをしているのを尻目に、神楽はぼっとあたりを見回していた。正直図書委員なんて楽そうだからなったにすぎない。特に語学書以外に興味などないのだ。

それにしてもアルナ高生だけあってみんな真面目な顔をしているものだ——と文系特進クラスのくせに思っていると、神楽はふと妙なことに気付いた。今立って丁と議論をしている男子の右手に何か影のようなものがかかっていた。それははっきりとした黒い影だった。見間違いなどではない。決して黒いグローブを嵌めているわけでもない。それは明らかに影と呼ぶのにふさわしいものだった。

影は最初小さなものだった。しかし男子の口調がヒートアップしていくうちに、影はどんどん大きくなっていった。

どうやら男子は本の処分に対抗という立場であった。年々増える寄贈書に関してもどんどん受け入れ、図書館を増築せよとの主張をしていた。丁は予算の都合と電子書籍化の波を考えるとそれは現実的ではないと述べ、ほかの委員にも意見を聞いていた。

確かに予算面というのは大きなファクターだ。ほかの生徒もおおむね男子の意見に賛同できかねる様子だった。しかし当該の男子は自分の主張を曲げようとはしない。それどこ

ろか彼の口調はますます熱を帯びていくばかり。

加えて彼の右手の影はもはや右腕全体を侵食しており、それは完全に見間違いや勘違いの類を超越していた。

だが神楽は不思議でならなかった。彼はこの場にいる全員の注目を集めている。にもかかわらず誰も彼の腕の異変を指摘しないのだ。いや、もっともおかしいのは彼自身が自分の腕に気付かないことだ。

神楽は不思議に思い、周囲を見回す。しかし誰一人として彼の腕に目をやる者はいなかった。やる気のない委員の霞はもちろんのこと、委員長の前すらもだ。ほかの委員たちは白熱する彼の口調に若干の緊張を感じているといった程度でしかない。

どうなっているんだと神楽が眉を顰めたとき、「そいつ」は突如現れた。

一瞬だった。本当に一瞬。そう、昨日目の前を歩いていた女の子が一瞬にして地面に飲まれたのと同じくらい一瞬。気が付いたら黒い影は鎧をまとった大きな化物の姿に変化していた。

「なっ——」思わず小さな悲鳴を上げた。

鎧の化物は顔がまるで豚のようで、手には剣を持っていた。醜悪な顔つきだ。鼻からふしゅー、ふしゅーと息を鳴らしている。

その瞬間だった。白熱していた男子が豚の化物を完全に無視して怒鳴り声を上げたのだ。彼が何と言ったのか動揺していた神楽はきちんと聞き取れなかったが、確か「ふざけるな」とかそんな類の暴言だったと思う。

ともあれ彼は叫ぶと同時に机を蹴り上げ、椅子を乱雑に投げ飛ばしたのだ。椅子は丁のほうに向かっていき、教壇にぶつかって床に落ちる。顔面蒼白になった丁が小さな悲鳴を上げる。

と同時に男子はゆらっと立ち上がり、虚ろな目で丁のほうへ歩みを進めていった。豚の醜い化け物もまた丁に近寄っていく。剣を携え、その刃を振り上げて……。

「お、おいっ！」

反射的に神楽は叫び声を上げ、立ち上がった。全員目が神楽と男子を行き来する。

男子は不自然な足取りで丁に近付く。敵愾心を感じ取った丁は真っ青な顔で立ち尽くす。優等生のかよわい女子はただただ恐怖に怯えるだけだった。

人を積極的に助けることのない神楽であったが、予想だにしない豚の化物に驚き、普段ではしないような行動にとっさに出てしまった。つまり、鞆を化物に向かって投げつけたのである。

鞆が豚の化物に当たったのか、バンという音がして化物がこちらを振り向く。おどましい顔が神楽の視界を埋め尽くし、赤い目が神楽を睨みつける。

次の瞬間、豚の化物は再び影に戻ると、男子が座っていた机に乗り移った。それと同時に丁の悲鳴が聞こえた。目を向けると男子が気を失って倒れていたのだ。

丁は何が起こったのか分からないという顔で立ち尽くしていた。皆は突然暴挙に出た男子と鞆を投げつけた神楽を交互に見ていた。誰も言葉を発する者はない。

神楽はゆっくり教壇に近付くと、鞆を拾った。

「あ、ありがとう。神楽君」おずおずと丁が切り出した。「鞆……この人を止めようとして投げたんでしょ？ 当たらなかつたけど、彼、びっくりして失神しちゃったみたいだから結果オーライだったね」

「驚いて失神？」そんな風には見えなかった。明らかにあの豚が消えたのを機に気を失ったように思えたが。

「保健室……」優等生はちゃきちゃきとフローを編み出していく。手際が良いとはこのことだ。「彼を連れていかなきゃ。神楽君、付き合ってくれないかな」

「俺も？」怪訝な顔になる。面倒事はごめんだとばかりに。

「なんだか彼、私に怒っていたみたいだし、一人で連れて行くのは気が引けるの。かといって委員長の私が動かないわけにはいかないし……」

どこまでも優等生だなと思った。保健室に連れて行くくらいならと神楽は諦めることにした。男子の肩を「おい」と揺らし、起こす。男子は「うん」とうめき声を上げて目を開く。

「俺……あれ？」

男子は先程までとは打って変わって大人しい目付きだ。とても同一人物とは思えない。まるで怒っていたときの記憶を失っているかのような顔つきだった。

丁は委員の中から暫定的に議長を選抜し、神楽と一緒に教室を出た。保健室に着くと、保健の先生に事情を話し、診てもらった。男子にとりわけ異状はないが、まだふらつき感が残っているので休ませるとのことだったので、二人は安心して部屋を出た。

「さっきはありがとうね、神楽君」302 号室へ戻りながら丁は再び礼を言う。「実を言うと私、かなり怖かったんだ。だって男子が急に怒ってこっちに向かってくるんだもの」

「そりゃそうだろうな。でも別に俺は……」神楽は丁の礼を聞いても気が気でなかった。

「なあ、それよりさ。あのときなんで誰も騒がなかったんだ？」

「なんで……って？」首を傾げる。

「あいつがキレたとき、ほら……あいつの横にさ……」

「横？」

やはり彼女には何も見えていなかったようだ。反応から察するにほかの委員にも。追求したい気持ちもあったが、神楽はそれ以上何も言わないことにした。平穩無事な学園生活を送るためには電波野郎に思われたくないというのもあるし、何より余計なことに首を突っ込みたくなかった。さっきのあれは幻か何かということにして、とっとと忘れることにした。だが丁はそんな神楽を逃さないかのような口調で問いかけた。

「もしかして神楽君、何か見えたの？」

それは疑問文ではあったものの、どちらかという確認といった感じの言い方だった。

「何が？」面倒な流れになってきたのでシラを切ることにした。「何も見えなかったよ」ところが丁はぼそつと呟く。

「さっきの彼……私には何かに取り憑かれているように見えた」

どきつとする。

「取り憑かれた？ 何言ってるんだよ、雨宮」

「忌み……」丁は神妙な面持ちで呟いた。「彼は忌みに憑かれていたように見えた」

「忌み？」

「魔物(adel)が悪霊(kanleizen)になったものことよ」人差し指を立てて説明しだす。「この世には100種の魔物がいたでしょ。約400年前に英雄アシェットがあらかた滅ぼしたことになるけど、一部は生き残り、一部は悪霊になった。そのうち悪霊のほうが忌み(yui)。忌みは人に取り憑き、悪さをさせる」

「詳しいんだな、雨宮」

「うん、ただウチが神社なだけ」

そうか、彼女は神社の娘だったのか。それでオカルトチックな発想に至ったと。優等生の仮面の下に意外にも電波な一面が隠れていたようだ。もっとも、今回はその電波が大当たりなのだから非難されるいわれはないのだが。

結局神楽は丁の追求をのりくらしとかわし、302号室へと戻った。教室に入って鞆を机のフックに掛けたところでちょうど暫定議長が結論を取りまとめ、あっさり委員会は終了してしまった。月末の本の日には図書館の処分本をバザーで売るといって話はまとまったらしい。

肩透かしを食らった神楽は鼻のため息をつく、教室を出た。帰りがけに霞と丁の顔が見えた。霞は先程の事件など何もなかったかのような顔をしており、恐らく数学関連であろう本に目を落としていた。委員会にまともに参加する気はハナからなかったようだ。一方丁は先程のことがまだ引っかかっているのか、神楽をチラチラと見てきた。

神楽は丁の視線を避けるように教室を後にした。そのまま西5号館を出たところで手に違和感を感じ、小さな舌打ちをした。鞆を教室に置きっぱなしにしてきてしまったのだ。丁の視線を気にしてすっかり鞆のことなど忘れていた。

面倒くさそうに頭を掻くと、鉛のような足取りで302号室へと戻っていく。他の委員会もはけた後なのか、階段にも廊下にも人通りはない。丁たちもとっくに去ってしまった後だ。

だからこそ神楽は油断していた。彼にとって302号室は既に人の去りきった空き部屋でしかなかった。ゆえに彼はその部屋のドアを勢い良く開けることになんらためらいも持たなかった。

——その向こうにセーラー服の上半身とシャツを脱いだ少女がいるとも知らずに。

神楽が最初に思ったのは、ドアというものはもしかしたらひとつの区切られた世界と別の世界を繋ぐものなのではないかという哲学的なものだった。それほどまでに中の空間で行われていたことは外の廊下と隔たれた出来事だったからだ。

……とは言い過ぎか、と神楽は再度考えた。この間わずか数瞬。そんな2つの思考を終えた神楽の前にいたのは既に部屋を出ていたはずの柊霞であった。

彼女は下半身こそスカートや靴下や靴を身につけていたものの、上半身は下着で覆われた部分以外が顛倒になった状態で立っていた。見よう見まいという意味の問題にかかわらず、神楽の視界に突如として白皙の少女が入ってきた。

当然年頃の男子としてはこの状況に狼狽を隠せない。すぐにでも目を伏せるべき光景であることは疑う余地がなかったし、それどころか起きたまま寝違えてでも首を横に向けるべき事態であった。だが神楽は一瞬、ほんの刹那であるが、彼女の肢体から目を外すことができなかった。

彼女の肌は雪のように白くなめらかで、身体は折れそうなほど華奢だった。だが神楽が目をそらせなかった理由はその美しさではない。そのあまりにも異様な——そして彼女のような雪の華にふさわしくない——場違いな装飾品によってであった。

彼女の身体はおびただしい数の包帯で巻かれていた。

そして同様に、数えきれないほどの絆創膏で覆われていた。

それらの装飾品は雪の彫像のように美しい彼女の肢体にはまったく似つかわしくないものだった。その上装飾品はこれでもまだ足りないのか、上腕には新しい青痣や治りかけの緑がかかった黄色い痣が生々しく浮き上がり、鎖骨の下にはまるで刃物で傷つけられたかのような治りかけの傷跡も見られた。セーラー服の上からでは一切想像することのできない痛々しい肉体から、神楽は目を移すことができなかった。

結局神楽はすぐに目をそらすどころか数秒間も彼女の肢体を凝視したのち、ようやく意識を取り戻したかのようにハツとして慌てて俯いた。

「す、すまないっ！」今更言い訳が口から洩れる。「だ、誰もいないと思ったんだ」

焦る神楽とは対照的に、霞は無表情を保ったまま、彼が来る前にしていた行為を再開した。彼女は右手にハサミを持ち、包帯を切ろうとしていた。そこで神楽が入ってきたわけだが、彼女は眉ひとつ動かさずそのまま包帯を切り、テープを出して包帯に貼りつけた。そのままシャツを着て、セーラー服を着る。スカーフをしゅるっと慣れた手つきで巻くと、テープを靴に仕舞う。

「その……僕は……。ほんと、ごめん。いや、鞆を忘れてそれを取りにこようと。まさか誰か残ってるなんて」しどろもどろになる。「ほらそれ。その鞆。でもほんと悪かった。中に誰かいないか確認くらいすべきだった」

本音を言えば、いくら散会したからといって誰かが戻ってくる可能性はゼロではないのだから、更衣室でもない場所で着替えている霞も悪い。だが今そんなことを言ったら火に油だということは言わずもがなだった。

霞は何も言わず、鞆を持つ。そして包帯を切ったハサミを手に、そのまま神楽の元へ歩み寄った。何も言葉を発さずにハサミを持って向かってくるこの恐怖。神楽は息を吸って身構えた。

霞の歩調はなめらかに見えたが、その速度は思ったより速かった。神楽が清けない防御の姿勢を取ろうかというころには彼女はとつくに彼の間合いに入っており、間髪入れずに彼の喉元に鋭利なハサミを突きつけていた。

一瞬にして空気が凍る。

神楽は無意識で顎を上げてハサミを避けようとするが、霞は先端を喉元に突きつける。ハサミの先端の感触が神楽の喉をひんやりとさせる。神楽は乾いた声で「ひ、柎……？」と命乞いするように呟いた。

「——クラスと名前」

霞は小さく、しかしハッキリとした発音で述べた。それは平叙文であったが、明らかに意図としては疑問文であった。

「え……？」

「ク ラ ス と 名 前」

戸惑う神楽に対し言葉の内容を変えることなく、より明瞭な発音で問う。

「14 組……南神楽」

霞はハサミを持つ手に小さな力を加えた。今にも顎の皮がブツツと破けてしまいそうな鋭利な圧迫感を感じる。

「どうすればいいかしら」迷っている文にも関わらず、まったく平坦な調子で言う。「南君に私の秘密を洩らさないよう『お願い』するには、どうすればいいかしら」

言葉とは裏腹に、それは明らかな脅迫だった。どうやらあられもない姿を見られたこと

に対する乙女の憤りではないらしい。彼女が言う秘密というのはその服の下にあるおびただしい数の「装飾品」のことを意味するのだろう。

だが神楽としては一切彼女の「秘密」とやらを暴露する気などなかった。もうこれっぽっちもないと言っていい。ただでさえ面倒事に首を突っ込むのが嫌いな神楽は他人の事情になど関心がないし、その上ここまで物理的かつ精神的な恐怖を植えつけられてまで暴露しようなどは少しも思わなかったし思えなかった。

「言うわけないだろ……そんなこと、誰にも」

霞は顔をぐっと寄せる。神楽の唇のほんの数cm前まで桃色の唇を寄せ、「ほんとうに？」と尋ねる。桜の香りが仄かに漂い、神楽の鼻腔をくすぐる。

「本当だ」

「証明できる？」

数学じゃあるまいし、証明などできるはずもない。だが数学ガールは数学的証明に匹敵する説得材料を欲しているようだった。

「まずお前の秘密とやらに僕は興味がない。それを人に話すメリットもない。逆に話せばこのハサミが僕の喉に近いうちに食い込むことは明白だ。それは僕にとっては極めてデメリットとなる。利なくして害あり。誰がこの状況で暴露などと思う？ 仮に暴露するとしたら、今この場を走って逃げて警察に駆け込んで事情を説明するケースしか考えられない」

相手は数学ガール。感情より理屈で語ったほうが良さそうだ。そう判断し、理路整然と一気にまくしたてた。どうやらそれは一定の効を奏したようだ。

「——で、今走って逃げようと思う？」確認するように問う。

「あいにく僕の皮膚にかかる鋭い圧力はもう限界に達している。これ以上お前が右手に力を込めるなら、喉に新しい口が出来る前にお前を突き飛ばして警察まで走り抜けるつもりだ」

そう聞くと霞は手から力を緩めた。喉にかかっていた冷たい圧力から開放される。その瞬間、緊張の糸が解けて神楽はむせ込んでしまった。手を喉に当てると、軽く血が滲んでいた。それは髭剃りの際にできる小さな傷と同じくらい小さなものだったが、神楽をぞっとさせるには十分な効果があった。

こいつ、本当に刺そうとしたな。てゆうか実際軽く刺したな……。

喉に手を当てたまま用心深く霞を見据え、一步一步鞆に近付く。鞆を机のフックから持ち上げると、「じゃあな」と言っただけで遠くのドアを開けた。とても霞のいる側のドアから出る気にはなれなかった。

しかし霞はそんな神楽の気も知らず、まるで何事もなかったかのように「さようなら」と言った。背中に寒いものが走るのを感じながら、神楽は教室から半身を出した。

だがその際一瞬立ち止まってしまった。今まで包帯やハサミに気を取られていて気付かなかったが、去り際に彼女の胸元に黒い靄が見えたからだ。確か今日の昼も学食で同じものを見た覚えがある。しかし神楽はこれ以上霞を刺激する気にはなれなかった。小さく首を振ると、彼は教室を後にした。

それにしても昨日の事故といい今日の霞といい、変な出来事に巻き込まれてばかりだ。今の霞のことですっかり忘れていたが、このままいつもの通学路を通るとどうしても昨日のビルのところを通ってしまうことになる。事故現場が駅のすぐ近くだからだ。迂回して別の入り口を使うという手もあるが、そもそもあの近辺に寄るのが嫌だった。しょうがないので今朝来たルートを使って帰ることにした。しばらくあそこには立ち寄らないようにしよう。

家に帰ると「おかえり、お兄ちゃん」という黄色い声が頭上から降り注いだ。見上げると階段の上にポニーテールの女の子がノートを抱えて立っていた。妹の南杏樹(anjur trikol)だ。6つ下で今10歳だ。エルフィーネ童女院という女子校に通っている。エルフィーネというのはアルナ高ほど優秀ではないものの育ちが良いので有名で、親の中には娘をあえてアルナ高でなくこちらに入れる者もあるほどの学校だ。

「ただいま。それ、宿題か？」

杏樹がエルフィーネのイメージに合っているのか兄として神楽はよく判っていない。典型的な大人しいお嬢様というよりはもう少しこうなんというか可愛い系のような気がするからだ。事実杏樹は歳の割に幼く見え、また性格もあどけなく感じられる。

神楽の言葉を待ってましたといわんばかりに杏樹はててと階段を下りると、「お兄ちゃん、宿題手伝ってえ」と腕を組んできた。杏樹とは6つも年が離れているせいか、喧嘩

などしたこともない。いつも神楽が面倒を見てやっけていて、半分親代わりのようなものだ。杏樹もそんな神楽に非常によく懐いている。

「いいよ。けどそんなには見てやれないぞ。僕も宿題があるんだ」微笑みながら妹の頭を撫でる。「今日はなんだ。算数か、国語か」

「算数なの。あまりのあるわり算」

「それ一昨年もやったじゃないか」

有名校なため、一般の学校より履修内容が一年ほど進んでいる。

「復習よ。桁数が大きくなって間違えることが多いの」

「複雑になると計算ミスが増えるからな。どれ、部屋に行こうか。実際解いているところを見せてみなよ」

手洗いうがいを済ませて杏樹の部屋へ行く。中はピンクを基調とした少女らしい様相だ。ふかふかのベッドにはぬいぐるみが置いてある。

杏樹は学習机に座ると、さっそくノートを開いて問題を解きだした。神楽は彼女が偶に出すミスをそのつど指摘しながら勉強を見てやっていた。

「そこ、掛け算が間違ってる。7かける8は？」

「56。あ、じゃあ引き算の答えが変わるから……」

「そうそう」

神楽はにこりとする。杏樹は足をぶらぶらさせながら鉛筆を動かしている。

「そういえばさ、お兄ちゃん。三日後の発表会なんだけど、来てくれる？」

杏樹は小さい頃からバレエをやっている。今度セイネルス＝セレン通りの公民館で発表会があるという話は以前から聞いていた。

「もちろん行くさ。お前は何の役をやるんだ？」

「エミス神だよ」少女の姿をしたわがままな女神のことだ。素直で可愛い杏樹には不向きな気もしたが、バレエは踊りを踊るだけなので見た目が重要だ。エミスのわがままな性格まで真似る必要はない。「だから髪をお団子頭に結わなくちゃなの」

「はは、その姿も可愛いだろうな」

「えへ。お兄ちゃん、ビデオ撮っておいてね」

「ああ。帰ったら一緒に観よう」

杏樹の頭をぼんぼんと撫でると、「えへへー」と言って肩をすり寄せてくる。甘いミルクのような香りがする。

「ん……？」杏樹はふと上目づかいで目を合わせてくる。

「どうした？」

「お兄ちゃん、女の人の匂いがする」すっと身体を離す杏樹。肩を微かに寄せて寂しうにする。

「……誰といたの」

「え、いや」

丁の匂いはそんなに強かっただろうか。軽くお香を焚きしめていたようだったが、そこまで香るものではなかったと思う。あるいはハサミで襲ってきたとき霞の移り香がついたのだろうか。そういえば彼女は石鹸の清潔な香りがした。それにしてもよく杏樹はそんなものに気付くものだ。

「答えられないの？」

「別に。同級生だよ」

「匂いがつくくらい近くにいたのね」頬を膨らませる。「お兄ちゃんのくせに……」

「くせになって何だよ」と苦笑。

「むー、お兄ちゃんが女の人の匂いをさせて帰ってきたことなんか無いのに」脚をばたばたと振る。「お兄ちゃんが杏樹を捨てて出ていっちゃう」

何か妙な誤解をしているようだ。

杏樹のおでこをピンと弾く。「馬鹿だな。僕がそんなにモテるわけがないだろう？」

そう、どちらかと言えばあれは近寄られたのではなく襲われたといったほうがいい。

「うん、そっか。そうだよな」

両拳をぎゅっと握る杏樹。

「いや、そこまで思い切り肯定されると流石の僕もへこむんだが……」

兄を取られたくないのは分かるが、子供の反応はなにかと素直すぎる。

「まあいいや。さ、じゃあ次はこれを解いてごらん」

そんな指導が30分ほど続いたころだろうか。少し疲れてきた神楽が足元に目をやると、そこに意外なものを発見した。

「杏樹……」

はじめは「なんだこれ？」という不思議な感覚でしかなかった。だが次の瞬間、神楽は怪訝な顔をした。

「お前、脚……どうしたんだ？」

妹の脚には黒い霧のようなものがかかっていた。それは靄にも見えたし、また同時に薄い影にも見えた。どちらとも判別の付かないような霧。今日霞に見えた靄と似て非なるもの。だが、根本的には恐らく同じであろうもの。それが杏樹の脚を小さくだが覆っていた。

はじめは単なる汚れかと思った。だがしげしげ観察するとどうやら違うということに気付いた。それはやはり黒い霧だった。今日見えた黒い汚れ。昨日までは見えなかった汚れ。

「脚？」問われた杏樹はくいつと脚を動かして右左と確認する。「なんのこと？」

「いや……」見えないのか？ 神楽は口元に手を当てた。「なんでもない……」

だが何でもないとはずがなかった。神楽の頭の中で丁の言葉が再生される。

忌み……。

まさか彼女の言及した忌みとこの黒い汚れのようなものは何らかの関連性があるのだろうか。だとしたら杏樹や霞も何らかの影響を受けているということになるのだろうか。霞のことは正直どうでもいい。あんなおそろしい女、関わりたくもない。だが妹となれば話は別だ。確かに自分は積極的に人を助けない。面倒な事には口を挟まない。だがそれはあくまで相手が他人だからだ。身内や友人ともなれば話は別だ。

「今日脚を怪我したとか、脚が痛いとかないのか」

「なんでもないんじゃないの？」

「いや、そうなんだが……なんとなく」

杏樹は白いハイソックスをぐっと押し下げ、生白い脚を見せる。「何もないよ、ほら」だが黒い霧のようなものは彼女の脛を覆ったままだ。服の上からだろうが地肌だろうが変わりはない。

「そうか、ならいい……。さ、次はこの問題解いてみて」

ふたたびノートにかじりつく杏樹。気付かれないう、妹の身体を上から下までチェックした。年齢よりも小さな背丈、ほっそりとした手足、ポニーテールを作る赤のリボン、クリーム色のシャツ、チェックのスカート、スカートを吊り下げるサスペンダー、白いハイソックス。そのどれにも霧らしきものはかかっている。

やはり自分の目はどうかしてしまったのだろうか。昨日までは見えなかったものが今日見える。いや、もしかしたら昨日もこの霧はあったのかもしれない。妹の脚なんて毎日見るものではない。単に昨日気付かなかっただけかもしれない。

いずれにせよこの奇妙なものが見えるようになったのに気付いたのは今日だ。この能力がいつ備わったのかは分からないが、順当に考えれば今日かせいぜい昨日といったところだろう。

しかし今日何か特別なことなどあったらだろうか。どちらかという昨日のほうが凄惨な事故にあったという意味では特別だった。かといって事故を目撃したことがこの妙な能力に関与しているとも思えない。

原因は分からないが、自分の目がおかしくなったのは確かだ。杏樹には自分の脚の霧が見えていない。先ほどの豚の化物が見えたのも自分だけだったようだ。どうやら自分にしか見えない何かが見えるようになったらしい。

その何かというのがもし丁のいう忌みとやらだとしたら、先刻彼女の問いかけをごまかして逃げてしまったのは失策だったことになる。現状この状況を打破する可能性があるとしたら、その鍵を握るのは雨宮丁と見て間違いない。今日ごまかしてしまっておいてなんだが、あの神社の娘に明日相談せざるをえないということになる。神楽は頭を掻いて「うん」と唸った。

ファーヴェアの月レレゾナの日

翌日、神楽は丁に声をかけられないまま一日を過ごしていた。優等生の丁が委員の仕事やらで忙殺されていて話しかけにくいというのもあるが、自分の目について話すことで曖昧にしていた面倒な事柄が対処すべき具体的な事案に変化してしまうのではないかということに対する億劫さもあった。

昼休み、昨日以上に食欲を失った神楽はサンドイッチをほんの一切れしか食べることができず、ネストに心配された。放課後遊びに繰りだそうと誘われたが、とてもそんな気分ではなかった。

ネストの申し出を断った神楽は放課後になるとようやく重い腰を上げ、丁のところに歩み寄った。

「雨宮」

名前を呼ぶと丁は意外そうな顔をして神楽を見上げた。彼から話しかけられるとは思っていなかったみたいだ。彼女は一瞬驚いたような表情を見せたが、すぐ色をとりなして優等生らしい微笑を見せた。

「なあに、神楽君」

「ちょっと昨日のことで話がある。時間、いいかな」

丁は気前よく、ややもすると少し嬉しそうに「いいよ」と返した。「教室で話せること？人気のないところのほうがいい？」

「そうだな、できれば後者で」

「談話室、行こうか。今なら空いてると思うし」

しかし神楽は彼女の提案を打ち消す。「いや、できれば302にしないか」

丁は一瞬目を左上に寄せ、「ああ、昨日の図書委員会の？」と言った。「うん、いいよ。あそこなら今誰もいないと思うし」

「悪いな」と言って神楽は鞆を持ち直した。

302号室の扉を開けるのは若干の勇気が必要だった。昨日の豚の化物はあの男子の身体を離れた後、机に乗り移った。あのまま状況が変わってないとするなら化物はまだ机に潜

伏していることになる。

ゴクリと唾を飲み込むと、神楽はゆっくりとドアを開けた。中は昨日と変わらない長方形の部屋。机と椅子が格子状に整然と並んでいる。

そして黒い影は神楽の予想通り、昨日の位置に潜んでいた。霞の胸元に見えた霧や杏樹の脚に見えた霧とも異なる、明らかに昏い影だった。何も知らなければ何かか机の前に置いてあって夕日を遮っているようにしか見えない。

「神楽君？」入り口のところで緊張した面持ちのまま机を凝視している彼を丁は心配そうに見てきた。

「いや、なんでもない……。というか、後で説明する」

なるべく影から遠い入り口のところで立ち話をする。もしあの化物がふたたび現れてもすぐ逃げられるようにだ。

「こんなこと言ったら電波な奴って思われるかもしれないが、実は昨日あたりから変なものが見えるようになったんだ」

「変なもの？」

「それは霧だったり霧だったり影だったりするんだが、必ず黒くて、なんというか雲のような感じなんだ。例えば昨日暴れた男子には影が見えた」

丁は真剣な表情で神楽の言葉に耳を傾けていた。

「最初は目が霞んでいるだけかと思った。でも何度見ても見間違いじゃなかった。そして昨日の男子の暴挙……。なあ雨宮、お前言ってたよな。忌みとかなんとか。もしかしてそれと何か関係あるのか」

不安そうな神楽と打って変わって丁は冷静な顔つきだ。そのまま彼女は何度か小さく頷くと、「それは恐らく忌みね」と答えた。「なぜか分からないけど神楽君には忌みが影の形で見えるってことじゃないかしら。忌みが影として見えるっていうのはよくある話よ。もっとも、私には見えないけど。ところで昨日は私の言うことに耳を貸さなかったよね。どうして今日になって相談してきたの？」

もっともだ。しかし優等生の丁はあくまで詰問口調でなく静かに問うてきた。

「実は……昨日帰ったら杏樹——妹の脚に霧のようなものが見えたんだ。影でも霧でもないんだが、いずれにせよ似たようなものだと思う。僕は正直言って面倒事に巻き込まれる

のは嫌なんだ。でも妹のこととなると放っておくわけにもいかないし……」

「そう」あっさりと肯定する丁。こちらの言葉を疑う素振りは一切見せない。「じゃあ私から質問なんだけど、神楽君が昨日鞆を投げつけたのって、もしかしてあの男子相手じゃなかったりする？」

的を射た質問だった。神楽は「ああ」と肯う。「男子の腕には黒い影がついていた。不思議と誰も見えないようだった。男子が怒鳴ると同時に影は化物に変化した。僕が鞆を投げつけると化物は黒い影になって……」当該の机を指さす。「あの机に乗り移った」

影はこちらの言葉をまるで聞いているかのように胎動を繰り返す。それが神楽には恐ろしくてならなかった。別の部屋で打ち明ければよかったかと思いはじめたころ、丁は机に近付くと、「ここ？」と言って手で机を撫でた。

「お、おいつ！ 危ないって」思わず小さな叫びを上げる。「いつまた化物になるか分からないんだから」

丁は机から手を離す。「私には見えないけれど、ここに影があるのね？ ところでその化物っていうのはどういう姿をしていたの？」

豚の顔をしていて鎧を着込んで剣を持った化物だったという内容を伝えたと、丁は顎に手を当てて考えた。

「神楽君、魔物には詳しい？」

「いや……僕は文系だけど専門は語学だから。神話とかは正直あまり。でも語源学を通じて多少の知識はある」

「この世には 100 種の魔物がいた。そのうちの第四十六天、痺豚のニクロイ(nikloi)。その容姿が今の説明からだが一番しっくりくる」

「ニクロイ……？」

「魔法学において 11 種の属性があることは知ってるよね？」

「ああ、火とか水とかだろ」

「そう。闇、水、風、土、火、雷、光、聖、邪、利、害の 11 種。魔物の属性はすべてこれらに分類される」

「魔物の属性は 11 種……」

「そして1属性ごとに9匹ずつの魔物がいる。水星(炎天)から冥王星(氷天)までの9種類。水星の魔物が一番弱く、冥王星の魔物が一番強い。1属性ごとに9階分の序列があるってということになるの」

「1属性あたり9種の魔物がいる。属性は全部で11種だから、9かける11で99匹」

「そして最後の一匹が無属性のヴェイガン(veigan)という魔物。これで100種」確認するように丁は述べる。「魔物は星座の名前としても使われるから、いくつかは日常的にも聞いたことがあるでしょう？」

「ああ、この世には100天の星座が存在するからな。いくつかは馴染み深い。で、ニクロイっていうのは……」

「ニクロイは雷の炎天。水星の魔物だから、序列的には最も弱いわ」

「つまり雷の魔物の中で一番の雑魚ってことか。だから鞆を投げつけただけでひるんだのかな」

「ううん」首を小さく揺らすと綺麗なこげ茶色の髪が舞う。そういえば丁は神社の娘のわりには黒髪ストレートではない。どこかで混血がなされたのだろう。彼女の髪は肩までの長さで、前髪の横の部分も左右とも髪留めで留めている。そのため2本の細い髪の束が鎖骨まで垂れ下がっている。「確かにニクロイは雷の魔物の中では一番弱いけど、忌みにおいて階級は大した意味を持たないの。階級が上だからといって祓うのが難しいとは限らないし、またその逆もないわ」

「祓う……？ 忌みは祓うことができるのか」

「ええ」当たり前だとでも言いたげな表情で首肯する。「忌みの祓い方は魔物の退治方法とはまったく別物よ。階級による強さの違いが明瞭ではないから、こちらに高い戦闘能力が要求されない。これはメリット。だけど逆に言えば忌みごとに祓い方が決まっているから、その対処の仕方を知らなければ適切に処理することはできない」

「魔物との戦闘は力技で、忌みとの戦いは知能戦ということだな」

ちょうどいい例えだったのだろう、丁は感心したような表情で「そうだね」と応えた。

「ニクロイにはニクロイ独特の祓い方があるの」

「お前はそれを知ってるのか？」

「まあね」

なんとなく神楽の目には影が怯えたように震えて見えた。

「詳しいんだな、雨宮」

「ううん、ただウチが神社だけ」

「なあ、その影とやらが忌みだとしたら、ウチの妹にも忌みが取り憑いてるってことになるのか？」

それが一番の心配の種だった。

「妹さんに見えたのは霧って言っていたよね。だったらまだ大丈夫だと思う。影は忌み。霧は影になる前の忌み。要は忌みの雛のようなものだから」

「影になる前に対処すれば昨日の男子みたいな発作は起こさないってことだな」

「そうなるね」

ほっと一安心した。丁に相談して良かったと安堵した。と同時に霞のことが思い出される。

「じゃあ……霧はなんなんだ？」

「霧は影の痕。忌みに影響を受けた人は霧がかかる。その人自身に忌みが憑いているわけじゃなくて、その人の周囲の人物が忌みに憑かれているということよ」

となると霞の周囲の誰かに忌みが憑いているということか。神楽は霧と霧と影の違いを頭の中で何度か反芻しながら頷いた。

そのとき、部屋の外から男子の声がした。

「アリス、この部屋空いてるんじゃない？」

声とともにハリネズミのようなツンツン頭をした少年が入ってきた。手にはドラムのスティック。続いて後ろからボブカットの少女と金髪の少女が入ってくる。

「だめだよシヴァ、もう先客がいたみたい」

ボブカットはキーボードとおぼしき大きな鞆を抱えながらハリネズミに告げた。

「あれ、この教室って今誰か使用申請出してたっけ、ミーナ？」

ハリネズミが袋に入ったベースを抱えた金髪の少女に問いかける。

「知らないわよ。いずれにせよ人がいるんだから他を当たってみよう」

「あ、てゆうか雨宮さんじゃない、彼女？」こそっと小さな声でボブカットが言う。「ほら、14組のレンス・リーファの。でしょ、かすみん？」

ボブカットは一番後ろにいた黒髪ストレートの少女に声をかける。どことなく霞に似た凧人の少女だ。「かすみん」と呼ばれていることからして、どうやら彼女も「霞」というらしい。

そもそも kasumi というのは凧霧で kasumi といい、アガパンサスという花を意味する。女子の名前としてはそこまで珍しいものではない。だから校内に何人が霞がいること自体は不思議でないが、黒髪ストレートという点や透き通るような冷たい雰囲気的美少女という点で終霞を彷彿とさせる。もともと、こちらの「かすみん」とやらはぼ一つとした表情をしており、その点で終霞とは異なっているが。

「レンス・リーファ？」ハリネズミが意外そうな声を上げる。「特進クラスはケーブ(laasa)とスカート(lufi)だろ。なんでセーラー服着てんだよ」こちらはあまり隠そうという意図のない声量だった。

「ちょっと！」小声で金髪の少女がハリネズミの脇腹に肘鉄を食らわす。「最近特進でも私たちと同じ服を着る子が多いのよ」

ご明察。丁のように生徒会をやっている人間は自分を特別視させたい場合はケーブを着るが、親近感を湧かせたい場合はふつうのセーラー服を着る。一方神楽のようなレンス・リーファでもないただの特進の生徒はケーブを着ることもあれば、あまり目立ちたくないという理由でふつうの制服を着ることもある。神楽の場合は後者だ。もともと、男子なのでセーラー服でなく詰襟だが。

「あの……よかったら外しましょうか？」

親切な声で丁が声をかける。

「ここ使ってないんですか？」ハリネズミが気さくに問いかけてくる。

「特には、11組の芸術科の方々ですよ？ 練習ですか」

「ええ」ひるみながら金髪が答える。「部室が今埋まっちゃってて、別のところをちょっと探してたんです」

すると後ろに控えていた黒髪の少女が金髪の袖をくいくいと引っ張る。「みーにゃん、行こう。他の部屋も空いてる。ここは止めておこう」

どうやら気を利かせてくれたようだ。神楽は内心ほっとする。

黒髪の少女に言われるまま、彼らは部屋を後にした。去り際に黒髪の少女は神楽を見つめると、小さな声で「じゃあ、がんばって」と言った。

「え……？」と声が洩れた瞬間、彼女はパタンとドアを閉めた。神楽は彼女の言葉の真意が分からぬまま、困惑した表情で丁を眺めた。

「ふう、何はともあれ行ってきてよかったね。彼らに忌みが取り憑いたら厄介なことになるところだったよ」安心した表情の丁。「さて、それじゃあ忌みを祓いましょうか」

「え？」意外そうな顔をする神楽。「それは僕たちの仕事なのか？」自分としては単に妹が心配なだけだ。ここの影が忌みだということが分かったらそれで十分だ。それを退治しようなどとは思わない。退治する意思があるとしたらせいぜい杏樹の忌みくらいなものだ。

「神楽君、だめだよそういうの。自分に関係ないから面倒事は避けようって思ってるでしょ？ でもここに忌みを置いておいたら誰かが取り憑かれてしまう」

うん、だからどうした。だとしてもそれは僕のせいじゃない——と思うが、言えば丁は眉をひそめるだろう。だがメリットもないのにリスクテイクだけする気にはなれなかった。すると丁はそんな神楽の思考を見透かしたかのように続ける。

「妹さんの忌みの雛に対処するには忌みに関する経験を積んでおいたほうがいいと思うけどなあ。いきなりぶっつけ本番で妹さんの忌みと戦えるの？」

「それは……」言われてみればその通りだった。「……分かったよ。僕は何をすればいいんだ」大きなため息とともにやれやれと両腕を開いた。

丁は机の近くに神楽を呼び寄せると、「触って」と言った。

「影にか……？」

「そう、忌みに」

「痛くないか？」

「かもしれない」

「……イヤなんだが」

「じゃあ私が触ろうか？ 見えもしない私が触れるとは思えないけど」

「いや、さすがの僕でも女の子にやらせようとは思わない。……分かったよ」

息を呑むと、濡れた手で電源タップに指を突っ込むようなおどおどした手つきで影に触れる。

その瞬間、影がふわっと大きく拡散したかと思うと、目の前に昨日見た豚の化物が現れた。

「でっ、出た！ 出たぞ！ 出ただろ！？」

しかしきょんとする丁。どうやら彼女には何も見えていないらしい。昨日と同じだ。

「こいつがニクロイか。で、雨宮、このあとどうするんだ！？」

神楽が丁に目を向けた瞬間、ニクロイが帯電した剣を神楽に振り下ろした。

「あぶねえ！」

とっさに一歩後ずさると、剣は隣の机に衝突し、バァンという大きな音を立てた。机は勢い余って倒れ、椅子もふたつばかり吹き飛んでいった。同時にジジツという電気の音がする。

それを見た丁が目を丸くする。それはそうだろう。彼女からすればいきなり机と椅子が吹き飛んだように見えたのだから。

「か、神楽君、大丈夫！？」

ニクロイが見えない丁は神楽に近寄っていいのかも判断できず、おろおろとする。

「nikloi……痺豚。痺れる(nikl)と豚(owi)の混成語か。なるほど、この帯電した剣がその名の由来ってわけだ。豚がいつちよまえに人間の姿をしやがって」精一杯の虚勢を張る神楽。

「雨宮、忌みは具現化した。それでこいつを祓うにはどうすればいいんだ？」

冷静さを取り戻した丁は説明を始める。「ニクロイの忌みは発作的な怒り。それを鎮めれば忌みは消え去るわ」

ニクロイが再び剣を振り上げる。だがその速度は大したことがない。神楽は軽やかなステップで二撃目もかわす。もともと階級が最下位な魔物だけあって戦闘能力はそこまで高くないようだ。

「怒りを鎮める方法は？」

「まず忌みと同期する必要がある。精神を同期させ、貴方自身が冷静になる。そうすることでニクロイも沈静化する。沈静化すれば怒りが力の源になっているニクロイは消滅する」

三撃目が飛んでくる。今度は突進だ。もう一度かわすと机が二列一気になぎ倒され、丁が悲鳴を上げる。さっきの音楽部っばい連中が騒ぎを聞きつけて戻ってこないかが心配になった。

「同期の方法は？」

「影を踏むこと。影を踏めば精神が同期される」

神楽は化物の足元を見る。しかし誰にも見えない豚は教室の蛍光灯にすら無視されているようで、存在はしっかりあるのに影はどこにも見当たらなかった。

「残念だがこいつに影はないっ！」ニクロイの剣を避けながら叫ぶ。

すると丁は何も無い空間で孤独なダンスを踊り続ける神楽を諭すように告げた。「でも、『神楽君』は影を持ってるよね？」

その言葉にハツとした。「そうか——！」

——相手の影が踏めないのなら、相手に自分の影を踏ませればいい。

ニクロイが再び剣を振り上げる。神楽は教室の蛍光灯を見上げると、自分の影の位置を確認する。化物の剣が振り下ろされると同時に身を屈めてクラウチングスタートのポーズを取ると、兎のように前に跳んで斬撃をかわした。

着地した地点で神楽の影はニクロイに覆いかぶさっていた。その瞬間、胸のうちにズンと黒い重力が響くのを感じた。恐らくこの感覚が丁のいう同期というやつなのだろう。

「雨宮、うまくいった！」

その言葉を聞かぬや、丁は手で印を組む。「そのまま同期を維持して！ 神楽君はできるだけ平静さを保って私のまじないに耳を傾けて」

「了解！」——とは言うものの、ニクロイは突進や斬撃を繰り返してくる。距離が近くなった分、かわすのが難しくなってきた。一方丁は何やら呪文めいた文言を唱え始めた。

敵の攻撃をかわしながら冷静になれとは丁もまた無茶なことを言う。しかし今の神楽にはそれしかできることがなかった。できるだけ平静を装い、丁の言葉に耳を傾ける。一定で独特のリズムを持った呪文は自然と耳に残る抑揚で、神楽は徐々に彼女のまじないに意識を奪われていった。

それがかえって仇になったのかもしれない。意識が丁に行きすぎて、ニクロイの動きに対応しきれなかった。化物が右手で剣を振る。神楽はそれをよける。しかしその攻撃はフェイントで、よけた先にはニクロイの左手が待っていた。

「まずい！」と思った瞬間、もう神楽はニクロイに腕を掴まれていた。醜悪な顔を歪ませ笑う化物。突如身の毛がよだつを感じた。ニクロイは巨軀を活かし、神楽を安々と持ち上げた。と同時に両腕で神楽を抱きかかえると、そのまま強く抱きしめた。

「ぐあああ！」思わず息が悲鳴となって洩れる。化物の腕力は相当なものだった。肋骨がへし折れるのではないかというほどの圧迫感が神楽の胸を襲う。

丁は眉を寄せて苦々しい顔で空中に浮かんだ神楽を見つめる。だがその口は呪文を止めない。そんな丁を見て逆に今こそ冷静になって化物を沈静化しなければならないと感じた。

「いいか、よく聞け……豚の、化物。なんの未練があつて悪霊になったか知らないが、ここはお前の居場所じゃない」

発作的な怒りなど長続きはしない。爆発してしまえば怒りは霧散する。こいつはもう十分暴れただろう。今ここで自分がパニックになったら逆効果だ。神楽は血を吐きそうになりながらも強烈なサバ折りに耐えた。

ニクロイの力が徐々に弱くなる。丁の呪文と自分の沈静化が功を奏してきたようだ。だがこちらの意識も落ちる寸前だ。

負けて……たまるか！

薄れ行く意識の中で掠れた声を漏らす。

「あの世へ帰れ……ニクロイ……！」

その瞬間、ふっと胸が軽くなったかと思うと、化物の表情が緩んだ。それとともに化物の身体は白い光を発して霧散していった。

神楽は支えを失い、膝から床に落ちる。無様な姿で地面に転がると、ニクロイが光の霧となって消えて行くのを見送った。

「……消えた」ポツリと呟く。それを聞いて丁が念仏を止める。

「倒したの……？」

「ああ……今、光になって消えていった。影はもうない」

「そう」ほっと胸を撫で下ろす。「よかった、無事祓えたみたいね」

その言葉を聞いた瞬間、神楽はどっと疲れて地面に寝転んだ。

冗談じゃない。忌みを祓うのがこんなに危険だなんて。これのどこが知能戦だ。二度とこんな思いはしたくない。

はあと大きなため息をつく。

「おつかれさま」スカートの端を押さえながらしゃがみ、上から神楽を覗き込む。「よく頑張ったね」

「肋骨が折れるかと思った。なににせよ、雨宮のおかげだよ。サンキューな」

どうにか忌みは祓えたが、思ったより大変だった。妹の霧が忌みになったらと思うとぞっとする。

「はい」丁は白い小さな手を伸ばす。神楽は手を取ると、地面に座り込んだ。

「机、ぐちゃぐちゃだな。直さない」と

「手伝うよ」言うが早いかさっさと片付けを始める優等生。「ところで神楽君、忌みについての理解は深まった？」

「忌みに関わるのは思ったよりリスクだということが分かった」腕を開いて肩をすくめる。

「神楽君が手に入れた忌みが見える能力については何か分かった？」

「いや、それが全然。祓うので精一杯だった」苦々しげに呟く。

丁は神妙な面持ちで拳を顎に当てる。「正直、神楽君の能力を識るには忌みという実例を経験していくしかないと思う」

「それについては僕も同感だ」直した机に座り込む。

「でもそれには毎回こういうリスクが伴う」上目遣いで神楽を見つめる。「忌みから逃げるというのも手かもしれないね、安全性を考えると」

「その代わり妹の身に何が起こるか分からんし、一生見たくもないものが見える羽目になるだろ。それは勘弁願いたい」

「強いんだね、神楽君」丁は尊敬の眼差しを向けた。「思っていたより、勇敢なんだ？」

「そんなことないさ。どれも自分や身の回りの人間のため。しよせんは我利にすぎない」

「でも神楽君は強いと思う」花のように微笑む。神楽は顔を赤らめると丁から目を逸らし

た。

「結局のところあれか、もっと他の症例も見えないことには僕の能力は分析のしようがないということだな。それに忌みを祓う経験はいざ妹に何か起こってしまったときに有用だし……」自分を説得するようにひとりごちた。

「ほかの症例」という自分で吐いた言葉に対し、自然と霞のことを思い出した。彼女には霧がかかっていた。身の回りの人間に忌みが憑いている可能性が高い。「ほかの症例」、
「ほかの症例」……。

だが――。

同時に喉元に想起される冷たいハサミの感触。そして霞の冷たいまなざし。

彼女は言った――「南君に私の秘密を洩らさないよう『お願い』するには、どうすればいいかしら」

恐らく彼女の秘密と霧は因果関係がゼロではなかろう。丁に霞の話をするれば、最終的には彼女の秘密について触れざるを得ない。そうなった場合何が起るかは昨日既に宣告を受けている。ある意味あの少女は忌みより恐ろしい。神楽は思わず身震いした。

「あら、これは何かしら」ふと訝しげな声を上げる。丁の目線の先にはニクロイが消滅した床があった。目を凝らして見ると、床には灰色い刻印が焼き付けられていた。

「5……って書いてあるな。ニクロイの魔物としての番号じゃないか？」

「それはないわ。ニクロイは第四十六天だもの」

「じゃあもともと書いてあったんじゃないか。今回の騒動とは関係なく」

「学校側がつけたものかしら」半信半疑な様子だ。

「恐らくな。ここ西5号館だし」対照的に投げやりな神楽。正直もう何も考えたくないほど疲れている。

結局数字についてはうやむやなまま、神楽は丁を連れ立って西5号館を後にした。建物を出ると外は既に真っ暗だった。

「神楽君、家はどこ？」

「サンバル市。蒔蘿線ユーザーだよ」

「奇遇ね。私もよ。じゃあコノーテ＝セレン駅？ 途中まで一緒に帰ろっか」

「いや……」一昨日の事件が脳裏をよぎる。「今日は幻環線で帰るよ。北コノーテに用があるんだ」

「ふう……ん」なんとなく釈然としない返事。普段からごまかし慣れている神楽としてはそんなに簡単にバレる嘘をついた覚えはないのだが、彼女は思ったより鋭いのだろうか。

結局丁とは北門を過ぎたところで別れた。霞のことは最後まで言い出せなかった。

家に帰ると手を洗う前に杏樹のもとへ行き、脚を見つめた。そこには案の定黒い霧が覆っていたけれど、幸いなことにまだ影にはなっていなかった。一旦の安堵を見せると、神楽は風呂に入った。

ファーヴェアの月ジールの日

次の日の放課後、神楽は緊張した表情で14組を訪れた。尋ね人は柊霞だ。

14組も終礼が終わっており、既に教室内の人はまばらだった。もしかしたら霞はもう帰ってしまったかもしれないと思って中を見回すと、窓辺の席で本を読んでいる彼女を発見した。

もう学校は終わっているというのに、彼女はまるで休み時間の暇つぶしでもしているかのような様子で本を読み続けていた。もしかしたら学校が終わったことにすら気付いていないのではないかと思わせる様相だ。

霞は一人でいた。物理的な意味だけではない。なんというか、霞の周りの空間だけが切り離されているように見えた。彼女はただ静かに本を読んでいるだけだったけれども、他者を拒絶するような空気を醸し出していた。

そんな気配を察してか、周りの人間は誰一人として彼女に話しかけなかった。部外者の神楽はより一層話しかけづらい圧力を感じた。

ここに来たのはほかでもない、霞の胸元に相変わらず見える靄について調べるためだ。否、厳密に言えば、靄について丁寧に相談する許可を得るためだ。だがその過程で彼女の秘密を暴露してしまうのは避けられないことであり、それを彼女が了承するとは到底考えづらかった。だが、杏樹のためにも今自分が必要としているのは忌みに関するできるだけたくさんデータのデータなのだ。

意を決し、中へ入る。霞の席の前に立つ。——が、彼女はこちらに気付かない。いや、気付いている上で無視をしているのかもしれない。彼女なら十分に考えられることだ。

「柊……」名前を端的に呼んだ。しかし彼女は顔を上げない。よほど熱中しているのか、あるいは無視をしているのか。だがいくらなんでもここまで堂々と無視するというのは考えにくい。

「柊、ちょっといいか」

「よくないわ」

無視だった。

神楽はこめかみに指を当てる。「それは今本が面白いところだから忙しいという意味か。

あるいは僕と会話する意思がないという意味か」

「強選言ね」べらりとページをめくる。「二者択一と言ってもいい」表紙に書いてある線形代数という訳の分からない単語に文系の神楽は気圧される。「すなわち、AかBかという問い」文系クラスでも一応数学は扱うが、線形代数なんて高校でそもそもやるものだろうか。流石レンス・リーファだけあって大学の授業を先取りしているのだろうか。「けど選言には弱選言というものもある」霞は書籍から目を離さず言葉を紡ぐ。「すなわちAかBか、あるいはその両方か」読む速度が恐ろしく早いのか、わずかの数言の間に次のページをめくる。「今の問いに対しては、弱選言で尋ねてくれると非常に答えやすかったわね」

「それはつまり」こめかみをコツコツと叩く。「忙しい上に僕と話す気もないということか」

「あら」意外そうな声を出す表情は一切変えない。「最大級の婉曲表現を用いたのに露骨な言い回しに戻すなんて、南君はずいぶんと無粋なようね」

「その婉曲表現とやらも数学か？」

「論理学よ。数学でもあるけれど」と、ようやく目を上げる。

「一昨日のことで話がある」端的に用件を告げた。「時間は取らせない」

霞は黙って立ち上がると、鞆を持って教室の外へ出た。同意と見てよいのだろうか。

廊下にはちらほらと人がいる。霞の秘密については言及しづらい状況だ。神楽は黙って彼女の後を付いていく。

西5号館を出ると、霞はけやき通りに向かって歩みを進めた。その先にあるのは部活の部室が集まったカルチェルという棟。高校と大学が共同で使ういわゆる部活棟だ。

「終って部活やったのか？」どこにも属していない神楽は物珍しそうに問う「何部なんだ？」やはり数学部なのかと頭の片隅で思う。

しかし霞は神楽などそこに存在しないかのような態度でカルチェルに向かう。

「なあ」

神楽の呼びかけに一切応じない霞。そのままけやき通りを過ぎてカルチェルに入り、階段を上ってとある一室の前に行く。部屋のプレートを見ると予想通り「数学部」と書いて

あった。

霞がドアを開けると中は真っ暗だった。部員が何名いるのかわからないが、少なくとも今は誰も来ていないようだ。

「ここなら誰もいないし、話してくれてもいいだろ。こないだの件について話があるんだ」

必死の呼びかけもむなしく、霞は席に座ると線形代数に目を戻した。あまりの無礼さに流石の神楽も業を煮やし、「聞いているのか、柊」と声を荒らげた。するとまるでうるさい蠅を追い払うかのように霞は手を振った。

「貴方に私と話す資格はないわ」

ピシヤリと言い放たれた。これほどまで傍若無人な振る舞いを受けたのは生まれてこの方初めてだ。思わず肩がわなわなと震えるが、ここで怒ったら相手の思うつぼだ。

神楽は暴言を受けても立ったままだった。しばらくすると霞は面倒くさそうにこちらを見上げ、もう一度同じ台詞を吐いた。

「貴方に私と話す資格は——」

「10だ！」

かぶせるように神楽は声を張り上げた。刹那、きよんとする霞。

「一昨日の学食。お前に告白したカルザス＝セミアン君」霞を見下ろし、ハッキリとした口調で述べる。「お前と彼の和は31。お前は21。なら彼は10だ」

霞は一瞬目を閉じた後、からかうように言った。

「ふう」

「——っ！ ため息を口で表現するな！」

「ただの引き算くらい、この学校の生徒なら幼稚園児でもできるわ」

「引き算じゃない。お前は柊霞(kasmi sarbelia)。sarbeliaは二十四節気で21番目。大雪だ。そして彼の苗字セミアン(semian)は夏至。二十四節気では10番目だ。ゆえに二人の和は31」

言い切った瞬間、微かにだが霞が頬を緩ませたように見えた。錯覚だろうか。錯覚だろうか。

「それ以外の解答の可能性は？」

「ない。彼はお前にとって初見の人間だった。彼が名乗ったのは自分のクラスと名前だけ。それしか情報がない状態で二人の和が31になる可能性は他にない」

ぱたん、と霞は線形代数を閉じた。ゆっくりと椅子から立ち上がる。

「私と話す最低限の資格はあるよね、南君」

表情は少しも変わっていないのに、なぜかそれでも彼女が少し微笑んだように見えたのは気のせいだろうか。気のせいだ。

「それで用件とは？ あいにくレンス・リーファの美少女は名もない特進クラスの生徒と違って多忙なの」

「その発言にはふたつの物言があるな。まず自分でレンス・リーファだって鼻にかけるな。あと自分で美少女って言うな」

「しょうがないじゃない」肩を小さくすくめる。「下々の者がそうやって私を祭り上げるんだから」

「そういうところだけ素直に受け入れるんじゃないっ！」

「純粋なのよ」

「純粋な悪だろうか」

「それで、下々の者が私に何の用？」

「下々で決定なのか！？」

ああ、誰かお札を持ってきてくれ。こいつの額に「高慢ちき」と書いて貼ってやるから。

「用件っていうのはお前自身の身体についてだよ」頭を掻きつつ霞の胸元の靄に目をやる。どうも彼女と話す調子が狂う。

霞は神楽の視線の先を目で追うと、嫌悪感を顕わに胸元を腕で隠した。

「……最低」

まるでゴミ箱の腐ったキャベツを見るような目だ。

「まだ何も言ってないだろうが！」

「それで誰もいない部屋に連れ込んだのね……？」

一歩どころか三步たじろぐ。

「お前が勝手にここに入ったんだろ！ とにかく僕はお前の胸に関心などないっ」

「あら」腕を解く。「それはそれで残念だわ」

「残念なのかよ！」

「てっきり B カップであることを実地検証されるのかとばかり」

B なのか……。ネストの予想が思い起こされる。あいつ、神だな……。

「あいにくセクハラで停学になるつもりはない。それに自分からサイズを暴露するな」

「ヘンね……」人差し指を頬に当て、首を傾げる。「健全な男子がデファクトスタンダードとして生得的に持つアビリティによって既に自明になったものだとばかり」

「ちょっと待て、そのアビリティどこかで激しく聞いた覚えがあるぞ！」

うさそうに首を振る霞。「あまり大声出さないでくれる？ 唾も飛ぶし。飛沫感染は怖いでしょう？」

「一体僕から何が感染するというのだ？？ というか僕は何のキャリアなんだ！？」

いつのまにか病人になっていた。

「ともかく、今までの発言からお前が自分の胸元の霧に気付いていないのは十分察しがついたよ」

「胸の霧……？」露骨に訝る。「妙な動画の見すぎで、現実の女性にまで自主規制が見えるようになってしまったのね。可哀想な南君」

「どんな動画を頭に思い浮かべてるんだ、お前は」

妙な動画を見ていないとは主張しないでおく。

「ところで、終は忌みって言葉を聞いたことがあるか？」

首を傾げる。それは NO の代返として十分だった。神楽は丁から受けた説明をそっくりそのまま霞に伝えた。

「——それで」半信半疑な表情の霞が席に着く。「南君にはなぜかその忌みが見え、しかも私の胸元に霧とやらが見えると」

「ああ」

「忌みに取り憑かれた人間の関係者が霧を得る。だから私の周りの人間が忌みに憑かれている、と」

「そうだ」

「どとして」長い黒髪に手櫛を入れる。まるで他人事のように。「それがなんだというの」

神楽の返答は率直なものだった。「僕はその忌みがお前の秘密に関係していると思って

いる」

霞の耳がピクッと動く。秘密について言及したのはなかば賭けだった。この話題が霞を逆上させる可能性があったからだ。神楽は一瞬身構えそうになりつつも、真剣な顔で霞と対峙する。

「私にはそう思えない」髪を掻き上げる。

「柊、いくつか質問していいか」

「イヤよ」

「……」だが構わず続ける神楽。「まずお前は運動部所属じゃないよな」

「ええ」

あっさりと肯いやがった。ならばはじめから返答を拒否するな。

「格闘技を習ったりは？」

「してないわ。運動は苦手よ。儂い美少女だから」

「自分で言うな」

「事実よ」

「なら、なおさらだっ」

「はあ……」

「言葉でため息をつくな！」バリバリと頭を掻く。

神楽は——こちらはわざとらしい言葉でなく純粹に——ため息をついた。そして一拍置いて霞に告げた。

「——柊。お前、家で虐待されてるだろ」

しん、と空気が静まった。

霞は一瞬目を伏せる。

「……なぜそう思うの」

「あの傷や痣は尋常じゃない。激しい運動をしていればまだ可能性もゼロじゃないと思ったが、そのケースも消えた」

「……」

「学校でいじめにあっている可能性も考えた。だがお前には友達はおろか表立って敵愾心

を持つ人間すらいない」まるで空気のような存在だからな、と付け足そうとして止めた。

「ウチは国内最高の進学校だし、陰湿ないじめはあるかも分かんが、少なくとも進路に響くような表立ったいじめはありえない。まして相手はレンス・リーファ。そんな相手にちよっかい出せばほかのレンス・リーファが黙っていない。干されるのはちよっかい出したほうだ」

霞は神楽の首あたりをじっと見てくる。無表情のまま。

「お前——」

神楽は核心めいた言葉を発した。

「——父親に虐待されてるだろ」

霞は顔色ひとつ変えず、眉ひとつ動かさず、その言葉を受け止めた。

「部活でも習い事でも学校でもなければ家庭しかない。念のため聞いておくがアルバイトは？」

静かに首を振る。それはそうだろう、アルナ高の人間は勉強で忙しい。霞は小さく唇を開く。

「部活でいじめられているという可能性は考えないのかしら」

「部活は自発的な活動だ。そこまで傷を負わされて誰が通い続けるものかよ。それと、カレシにやられてるって線もありえるが、お前が男と付き合いわずにフリまくってるのは噂で聞いているし、実際一昨日この目で見た」

ひとつひとつ可能性を消していく神楽に、霞はひとつひとつ他の可能性を挙げていく。

「なぜお父さんと断定したの」

「16歳の大きな娘」ましてお前のように躊躇なくハサミを男子相手に振りかざすような恐ろしい女——と心の中で補足して、「そんな大きな子供に母親があそこまでの怪我を負わせられるとは考えがたい。お前がまだ小学生ならともかくな」

「兄弟という線は？」

「いるのか？」

「……いないけど」

あらゆる可能性を潰された霞は下を向いて黙り込んだ。神楽は自分の考えが正しいことを確信した。彼女の無表情の下にはどんな思いが隠れているのだろう。言い当てられたこ

とを歓迎しているのか困っているのか。あるいはそれ以外の気持ちか。彼女の能面のような表情からは一切の情報が読み取れない。

「要するにこういうことだ。お前の父親には忌みが憑いている。忌みの内容は『虐待』ないし『家庭内暴力』。お前はその影響を受け、胸に靄を抱えている」

「そんな荒唐無稽な話……」きつと目を上げる。「誰が信じると思うの」

「じゃあ僕のメリットはなんだ？」

突然の質問に霞は首を傾げる。

「僕は散々お前に脅された。ただでさえお前の事情に僕は興味がない。その上あんなやり方で口止めをされたんだ。誰がわざわざお前と関わろうと思う？ そのメリットは？」

「……ないわね。だからこそ不可解なのよ、貴方の行動は」

「その不可解の理由が忌み、だ」

小さく首を振る。「仮に忌みというのが本当にあるとして、なぜ貴方が忌みについて調べる必要があるの？」

「僕の妹が忌みに襲われそうになっている」

明瞭な声で述べると、霞は少しだけ目を大きく開けた。

「だけど忌みについてはまだ謎が多い。このままだと妹に何かあったとき対処できない。だから僕は忌みに関するあらゆるデータを集めている。そんなときたまたま靄を抱えていたのがお前だった。だからあれだけ口止めされたにもかかわらず、首を突っ込んだ」

「……一応筋は通っているようね」本を鞆に仕舞う。「——で、南君はその話を私にして、いったい何がしたいの？」

「率直に言うぞ。お前の父親に会いたい」

「……」数瞬の間。「……会ってどうするの」

「忌みを祓う」

「祓う……」反芻された言葉が数学部の部室に響く。

「そうすればお前の父親は忌みから解放され、虐待はなくなる」

一瞬、霞が苦々しい顔をして俯いた。

「お前の家の問題は忌みのせいだと思う。虐待が起こったのはいつごろだ？」

不快な質問だったのだろうか、霞は沈黙を保った。

「じゃあ言い方を変えよう。お前の『秘密』であるそのおびただし包帯やら絆創膏やは、いつごろから身につけるようになった？」

「……先月よ」

「じゃあ恐らくお前の父親が忌みに憑かれたのはそのころだ。先月何か特別なことがあったか？」

「母が……」ためらうような言い方。何か迷っているような素振りだ。「母が亡くなったわ」

意外だった。霞の母親ともなればまだ若いはずだ。

「私が小さいころから入退院を繰り返していたのだけど、先月亡くなったわ」

「そうか……。父親は気弱になったところを忌みにつけこまれたのかもしれないな。それで娘を虐待するようになったんだな」

霞は2,3秒黙ったのち髪を掻き上げ、「そうね……」と短く答えた。

「それにしても南君は風変わりだわ」突如思いついたような物言い。「いくら妹さんのことがあるとはいえ、よりもよって私みたいな雪の華に声をかけるなんて」

こいつ、自分のあだ名を知ってやがる……。しかも若干良い意味で使ってやがる。

「忌みなんてあちこち探せば他の誰かにも憑いているでしょう？ あれだけの脅迫をされてなお私を助けようだなんて、案外お人好しのね」

「今脅迫と認めたな、お前」

「あら失礼」口に手のひらを当てる。「つい本音が」

「訂正しろよ！ 肯定するな！ それに僕はお人好しじゃない」

「十分お人好しよ。私のような冷たい女、誰も怖がって近寄らないというのに」

神楽は耳を掻いた。

「それなんだがな。僕は一昨日学食でお前を見たとき、ネスト——友人が言うほど冷たい女だとは思わなかった」

「すると霞は意外そうな顔を返した」

「地の文を口に出すんじゃない！」

くすりと笑う霞。からかわれているようだ。

「もし南君がそう感じたのだとしたら、貴方の目は節穴ね。私は告白してきた男子に対して受け入れも拒絶もせず、ただ数の問題を返したのよ。非常識にもほどがあるわ」

非常識という自覚はあるのか……。

「どうかな。確かにお前はあのととき数の問題を出した。だがそれはよく考えれば数学の問題じゃない。むしろ二十四節気という、5組の文系哲学科なら知っていてもおかしくない知識を問う内容だった」ぴっと人差し指で霞の胸元を指す。「お前は数の問題に見せかけ、文系の問題を出した。つまり相手に答えられる可能性を与えた。本当に冷たい女なら、一切相手にする気がないのなら、最初からその線形代数とやらの問題でも出せばいい」

霞は顎を数cm後ろに引く。

「だから僕はあのとときネストの言葉に違和感を感じた。終、お前は口で言うほど冷たい女じゃない」

「買いかぶりすぎだわ」そういう霞の顔は心なしか嬉しそうだった。

部室に微かだが暖かい空気が流れる。

「ところで終に相談があるんだが」話題を変えると霞はもとの無表情に戻った。「忌みを祓う際に同席してほしいやつがいるんだ」

「……誰？」

「そもそも僕に忌みのことを教えてくれたのは雨宮なんだ。知ってるだろ、同じレンス・リーファ同士」

友達のいない霞も流石に丁のことは知っていたようで、というか覚えていたようで、「ええ」と答えた。「だけど彼女が同席するのはイヤよ」

「え」

「南君の話は40%ほど信用している。突飛だけれど筋は通っているし、妹さんの事情でもない限り私と関わろうだなんて考えないでしょうから。忌みとやらを祓うのにお父さんと会いたいというのなら、試してみてもいいと思ってる。だけど、むやみやたらとギャラリーを増やすのはごめんこうむるわ」

「むやみじゃない。雨宮はこういった現象のプロフェッショナルだ」

「でも、肝心の忌みが彼女には見えないのでしょうか？ 彼女は知識を与えるだけ。なら今回は外野で参謀に回ってくれば十分よ」

それはまあ確かにそうだった。何の忌みが霞の父親についているのか、そしてその対処法は何か。それらを丁から聞いておけば、必ずしも丁は現場にいる必要がなかった。なによりここまでかたくなに霞が拒絶している以上、丁を連れて行くのは不可能だろう。

「分かった。じゃあ代わりにひとつ許可がほしい。雨宮にこの件を相談したい。その過程でお前の秘密にも言及せざるをえない。だが僕は口止めされている。何が言いたいかわかるな？」

「特例を作れ、というのでしょうか？ いいわ。今回に限っては、喋るのを許してあげる」それから霞はふと気付いた顔になる。「……もしかしてその許可を取るために話しかけてきたの？」

「まあな。約束だったし」一方的かつ強制的に結ばれた契約だったが。

「そう……」霞は少しだけ好意的な表情を神楽に向けた。「きちんと約束が守れるのね、南君は」

それから神楽は丁に電話をかけ、時間を割いてもらえるよう頼んだ。霞は丁に会う気はないというので、部室で待っててもらうことにした。

丁は14組の教室で神楽を待つと応じてくれた。教室まで走っていくと、中では丁が一人で作業をしながら待っていた。何の作業かという、今月末の「本の日」でやる図書館の催し物の準備だ。

「悪かったな、雨宮」椅子を引っ張って座る。

「平気。どのみち残って作業してたところだったし」あくまで優等生発言を崩さない。「それで話して？」少し上ずった声で尋ねる。

「柊のことなんだけど」

「柊さん……」霞は微かに顔色を落とした。仲が悪いのだろうか。だがすぐに表情をとりなした。「そっか、うん……。で、彼女がどうかしたの？」

「いやな……」言いづらそうに説明を始めた。

「——百剣鬼のガルフレイ」

神楽の説明を最後まで大人しく聞いた丁は、小さく息を吸うと静かに魔物の名を口にした。

「第七十一天の魔族。聖の風天よ。魔物の階級としては比較的高度なほう。ただ悪霊なので物理的な戦闘をするわけではないから、階級の強さは心配しなくても大丈夫」

「galfrei……。文字通り gal（百）と frei（剣）の複合語か」

「百本の腕があり、百本の剣をふるう鬼よ。顔は4つ付いていて、どの方向にも向いている。顔と手はどの方向にも対応しているの、脚の向きを見てスキを突くしかないわ」

「それってことわざのガルフレイの微笑み(asex e galfrei)に出てくるあのガルフレイか？」

「そう、八方美人っていう意味のことわざね。4面に顔が付いているところから来たの」

「それが終の父親に憑いているのか」

「恐らくは。ガルフレイの忌みは『虐待』や『家庭内暴力』だから」

「よりもよって百本も腕の生えた魔物が虐待の象徴かよ……。子供の身にもなれってんだ。八方美人が聞いてあきれれる」

「暴力を振るうような人ほど概して世間体はいいものよ」

「僕には縁遠い話だな」

自分は親に殴られずに育ってきたし、子供のころからケンカなどしたこともない。人から殴られたことがないので、そもそも人を殴るという発想がない。そういう意味では霞は自分と反対なのかもしれない。彼女は父親に傷つけられた。だからこちらをハサミで襲うことに躊躇いがなかったのだろう。彼女の白魚のような肢体に刻まれた痛々しい傷が思い出される。

「暴力を受けた人間は他人に暴力を振るうことを躊躇わない……」丁に聞こえないように呟いた。悪いのは霞ではないような気がしてきた。

「それで、ガルフレイを祓うにはどうすればいい？」

「まず終さんのお父さんに影が憑いているかを確認すること。お父さんが彼女を虐待する際にガルフレイが具現化するはずだから、そこを押さえる」

「ふむ。また影を踏ませるのか？」

「今回は同期する必要はないわ。ガルフレイの弱点は足の向き。後ろから攻撃をしかけるのが常套手段なの」

「つまり踵が見えたらゴーということだな。で、どう攻撃すればいい？」

「家庭内暴力を振るうような人間は得てして外面が良く、弱いものに強い傾向があるわ。自分の身に予想外のことが起こったらすぐそちらに気が行ってしまう」

「こちらの図書は処分品につき値下げします」と書かれたブラカードに装飾を施しながら丁は説明を続ける。

「そういう人間はたいてい根っここの部分では不安症で気が弱いだよ。その上自己保身欲求が強い。だからちょっと背筋の凍る思いをさせてやればすぐに熱が冷める。概して彼らは暴力を振るう自分に嫌悪感を感じているから、怒りの発作が収まれば今度は鬱周期に入る」

なんだか聞いていて霞の父親自身も哀れに思えてきた。

「要するにヒートアップしてる時に冷や水をかけてあげれば、あとは巡り巡って鬱に入るってことね。そうすれば自動的に忌みは消えるわ」

「冷や水とは？」

「文字通り水よ。清めた塩を混ぜた水をかけてあげればいい。予期せぬ位置からね」

「詳しいんだな、雨宮」

「ううん、ただウチが神社だけ」

だがそんな塩などないぞと思った矢先、丁は鞆の中から綺麗な小袋を取り出すと「はいこれ」と机に置いた。

「……用意がいいな」感心を通り越して驚きを隠せない。

「清めの塩はリップスティックくらい常備品だから」

「女子高生にとってか、あるいは神社の娘にとってか？」

「前者だったら驚きだよな」くすくす笑う。

丁に丁重に礼を言うと、神楽は教室を後にした。霞の要求で立ち会いは控えてほしいとの申し出にも嫌な顔ひとつせず「何かあったら電話ちょうだい」と返してくれた。本当にいいやつだ。

カルチエルの数学部に着くと、「おまたせ」と言ってドアを開けた。

すると中では霞が上半身裸で包帯を巻きなおしていた。今回は下着さえ身に着けていない。

「うおっ！」

慌てて神楽は後ろ向け後ろをする。幸か不幸か、いや、男子としては不幸なんだろうが、彼女はドアに背を向けていた。だから上半身裸だったとはいえ、ぎりぎりセーフだった。

「ごめん！ ノックすれば良かった！」

それにしても鍵くらいかけろよ。

「大丈夫よ。今日は部活は休みだから、誰も来ないわ。単に私は図書館代わりに来ただけだから。もう秘密を知っている南君しか来ることはないのだから平気よ」

こいつの頭には秘密のことしかないのか……！？

前回下着姿を見たときもそうだったが、霞は純粹無垢というか幼稚というか、女子高生らしからぬところがある。

「……もう振り向いていいか？」

「そもそも向こうを向けと言った覚えはないけれど？」

「服を着たかって聞いているんだ！」

「ああ」ようやく気付いたかのような声。「16歳の純情な童貞には刺激が強すぎる光景だったかしらね」そして今更ながら衣擦れの音。

「童貞は余計だっ」

こいつ、わざとやってやがったな……。

「より刺激の少ないという意味においてなら、もう振り向いても『大丈夫』よ」

周りくどい霞の言葉を信じて振り向くと、彼女はセーラー服を着込んで長い髪に手榴弾を入れていた。ほっと一息つく。「雨宮から対処法を聞いてきた。お前の家は？」

「ネブラ＝セレンよ」

「お嬢様じゃないか」

神楽たちが通うこのアルナ高はそもそもアルナ県アルナ市にあるため、その名が冠されている。アルナ市というのは直径12.5kmの円形都市で、年輪のように28本の環状道路が走っている。28本の環状道路は約400年前に悪魔を倒したアシェットのメンバー、すなわ

ち使徒ランティスの名で呼ばれる。例えば一番内側の道路は第1使徒リディアの名を取ってリディア通り。14番目の道路は第14使徒セレンの名を取ってセレン通りというように。

円形都市アルナは9個のエリアに分かれている。環状道路は28本なので、14番目のセレン通りがちょうど前半と後半の境目になる。そこでセレン通りより内側を中央アルナという。そして中央アルナの北は北アルナ、北西は北西アルナというように、中央アルナを囲んで8つのエリアが存在する。合計で9個のエリアが存在することになる。

言うまでもなく中央アルナが最も都心で、国の中心、否、世界の中心になっている。中央アルナのまさに中央にはカルテという大きな公園があり、ファルシアン宮殿という観光名所がある。かつてアルバザードを統べていたアルバ王家が住んでいた城だ。

カルテ公園からは東西南北12の方位にまっすぐ道が伸びている。時計と同じ仕組みだ。例えば北の方向には12時の方向に道が伸びている。これらの道はアルミヴァの12神の名を使って表される。例えば12時の方向は12番目の神コノーテの名を取ってコノーテ通りと呼ばれている。

つまりアルナ市の住所は環状線のランティス通りと放射状に伸びるアルミヴァ通りの組み合わせで表現できる。上から見ると雪の結晶のような街だ。

霞の住所はネブラ＝セレン。ネブラ通りのセレン通り住まいという意味だ。ネブラは11時の方向だから北西だ。セレンというのは先ほど見たとおり14番目で、中央アルナの端っこだ。つまり彼女は世界の中心である中央アルナ住まいということになる。彼女がいかに富裕層であるかというのは住所だけで想像できる。

彼女の通学ルートはネブラ＝セレン駅からコノーテ＝セレン駅までまず移動。次にそこからコノーテ＝メル駅に南下という単純なものだそう。そもそも大した距離でないので徒歩や自転車でも十分通学可能な範囲だ。だがそこは「儂い美少女」なので、あくまで身体は使わないらしい。

コノーテ＝セレン駅と聞いて神楽はドキッとした。こないだの飛び降り自殺の現場だ。適当な言い訳を付けてネブラ＝メル駅まで歩き、そこからネブラ＝セレン駅まで電車で行かないかということにした。

北門を出てネブラ＝メル駅まで徒歩で向かう。霞は鞆を片手にぶら下げ、しずしずと歩

く。こうして見ていると深窓の令嬢に見えるのだが、口を開くとロクでもないことばかり言うやつだ。

「悪いな、歩かせちまって」

「別に構わないわ。『深窓の令嬢』も少しは運動しないと自慢の体型を維持できないから」

こいつ、こちらの心が読めるのかっ——！？

「読めないわよ」

読めてるッ！！

神楽は空咳を決め込む。「それにしても一昨日の段階ではお前とこうして一緒に下校するなんて思いもよらなかったよ」

「私もよ、南君。意外で仕方がないわ」

「なあその南君って呼び方だが、止めてくれないか」と困った顔。「僕の家はルティア系なんだ。凧人じゃないんだから苗字で呼ばれると非常に疎遠な感じがする」

「じゃあ南君と呼ぶのが適切ね」

「……」

激しい疎外感に加え、風当たりも冷たかった。

「名前ってのは人のアイデンティティなんだから、尊重してもらわないと困る。僕の苗字の trikol がルティア語で南だってことくらい小中学生でも知ってるだろ。僕がルティア系であることは明白じゃないか」

「trikol は本当にルティア語なのかしら」

まるで「1 足す 1 は本当に 2 なのかしら」とでも言うかのようにとぼける霞。

「語源的かつ歴史的に説明してやろうか、数学ガールさん？ triko はルティア語でどういう意味だ」

「背中ね」

「ルティア人は方角を決める際、北を向いたときの身体部位の位置で命名したんだ。北を指す gwal は腹を意味する gwain から来ている。北が腹だから自動的に南は背中になる」

これについては霞は本当に知らなかったようで、「へえ」と少し興味ありげな顔をした。

「アルバザード人や凧人の感覚とはだいぶ違うのね」

「アルバザード語の場合、というかアルカもそうだが、アルシエルという四季の女神を使って方位を命名するからな。北は冬の女神 xier を取って xiar、南は夏の女神 flea を取って fleu というように」

「私たちの言葉の風霧だと南は hagili っていうんだけど、これにも由来があるのかしら」
流石アルナ高生というべきか、霞は意欲的に質問してきた。

「ああ。hagili は太陽を意味する hagali と、見るという動作を意味する動詞の ilu からできた単語だ。つまり原義は『太陽を見る』となる。

ルティア人は北を向いて南を背中とした。一方凧人は南を向いて『太陽が見える方向』とした。加えてアルバザード人は四季の女神を用いて南を命名した。同じ概念なのに三者三様。まったく面白いと思わないか？」

「そうね」一瞬肯定したのち、「……同時にひどく非合理的だわ。数学なら1という概念はアルバザードでもルティアでも凧国でも同様に1で済むのに」と懐疑的な表情を見せた。

「非合理的なのは同意する。でも言語学や語学は数学じゃない。まして語源学の愉しみは民族ごとに物の見方が異なっている点にある。あるひとつの概念を色んな角度で命名する。それが言語の持つ面白さだ」

「私にはただの無駄に見えるわ」

「一見無駄なようで実は無駄じゃない。人間はある概念に対し、直接言語的にアクセスできない。例えばアルバザード人は南という概念を命名する際に夏という概念を用いた。アルバザード人の頭の中では南と夏は直感的に近い。一方ルティア人や凧人の間にその感覚はない」

「南という概念を単に南と認識することはできないということ？」

「そう。『南という概念をどういう角度で見るか』という『視点』は民族ごと、言語ごとに異なる。同じ物でも見る角度が違えば別の形に見えるだろう」

「ピラミッドは前から見れば三角形だけど、上から見れば正方形というような？」

実に数学ガールらしい反応に神楽は気をよくする。

「好例だな。同じ物でも角度によって見え方が違うように、同じ概念でも見方によって見え方が違う。アルバザード人の南とルティア人の南は異なる見え方をしているんだ」

「つまり……」顎に手を置く。「人間は概念を概念のまま認識できないということ？ 世

界を世界のまま認識できないの?」

「ご名答」パンと手を叩く。「言語を使って世界を認識する以上、人類は世界をありのまま理解することができない。言い換えれば言語は思考や物の見方に影響を与えるということだ」

「それは言語学?」

「ああ。約400年前にアルカの作者セレン＝アルバザードが提唱したのが最古だ。しかしその後数百年も無視され続けてきた。ここ百年以内になってようやく見なおされてきた理論だ」

霞は理解したというように小さく頷く。

「僕の trikol という南姓もただの音の集まりじゃない。その背景には民族の物の見方といった文化的背景が隠れている。僕が hagili という苗字なら風人らしく南君と呼んでくれて構わない。だが trikol である以上、南君は感心しないな。なにセルティア人は特段疎遠な相手でもないかぎりファーストネームを使うのが一般的だからね」

「よく分かったわ、南君」

「……」

なんかもう全てがダメだった。

ネブラ＝メル駅に到着する。ここからは地下鉄アルミヴァ線でネブラ＝セレン駅まで直行だ。地下への階段を下り、改札のアーチをくぐってホームへ進む。

「まったく、そんなだからお前は学校で一人なんじゃないか」珍しく皮肉で反撃する。

「私は孤独が好きナだけ」髪を掻き上げる霞。このとき神楽はあることに気付いたが、黙っておくことにした。

「孤独……ねえ」

「何よ」若干不快そうな顔。「自ら孤独に身を投じているだけ。妙な勘ぐりは止めてほしいわね。まして同情や憐れみの類なら……」胸ポケットからハサミをジャキンと出す。「南君には考えを改めてもらうよう『お願い』する必要が出てくるわね」

「お前は武装兵か！ 身近なところに武器を隠し持つんじゃないっ！」ハサミを持つ手をぐいと押す。仕方ない。適当にごまかそう。「そうそう、孤独っていうのにもまた語源が

あるんだよ」

「それくらい私でも知っているわ。孤独(reino)は re in non (私を見て) から来ているんでしょ？」と得意げな顔。

「いや、それは民間語源にすぎない。惜しいところまでは来ているがな。reino は reian (寂しい) が変化してできた語だ。そして reian の語源が re i an。古典で『私を見て』という意味だ」

「自ら孤独を選んだ私には縁遠い語源ね」

「じゃあ新しく造語したらどうだ？ 霞語では den in yuna (私を見るな) をベースに deniyu で『孤独』を意味するとか」

すると霞は「それはいいかもね」とくすつと笑った。

電車が来る。中は帰宅ラッシュで混雑している。

「語学や言語学も結構面白いものだろ？ 色々な視点を与えてくれる。数学にはない視点だ」

「そんなことないわ」即座に否定する。「数学、とりわけ数秘術の分野になってしまうけど、数学にも多視点的解釈や文学的解釈は可能よ」

「ぜひご高説に預かりたいね。数学で孤独を表現できるのか？ 例えば1はひとつしかないからポツンとしていて孤独とか、そういうことなら理解できるぜ」

「孤独という意味においては7がそうね」

「7？」眉を上げる。

「一桁の素数の中で最も100までの倍数が少ない扱づらい数よ」

「100までの一桁の数で倍数が少ないのは9じゃないか？」

「南君は小学生からやり直したほうがいいわね」呆れた顔でため息をつく。「素数と言ったでしょう。9は3が約数だから素数じゃない。7は1と7以外で割ることができませんよ？ だから素数なのよ」

それくらい知っている。ただ素数という条件を聞き漏らしただけだ。てゆうか小学生で素数なんかやるか。——あ、ウチの学校ならやるな……。

「あとこれは南君的な文系解釈になるけど、7は14の半分でしょう？ 400年前に世界を

救った28人の英雄集団アシェットは、もともと14人のアルシェと14人のソーンというふたつの団体からできていた。14にとって7とは『ふたつに分裂した』状態を意味する。つまり7は『団体の分裂』、『団体の崩壊』を意味する。そこから数秘術的に7は孤独を意味する」

立て板に水な霞の講義に感心せざるをえない。

「ついでに言えばアシェットの第7使徒メルが私同様嫌われ者で孤独だったから、7が孤独という解釈もあるわね」

「英雄に謝れと言いたい。お前と同列に扱われたらさぞメルも迷惑だろうよ」

「そして私の出席番号は幸運なことに7」霞は鞆を左手に持ち替え、髪を掻き上げる。「まさに孤独を愛する私のために誂えられたような番号ね」

神楽は心中でほくそ笑んだ。霞の癖をひとつ見つけたからだ。彼女は嘘をつくときに髪を掻き上げる。孤独を愛するなんてただの強がりだ。

ネブラ＝セレン駅に到着する。階段を上って駅を出ると、およそ5分で霞の家に着く。

アルナ市は9個のエリアに分けることができるとは既に述べたとおりだが、東西南北4つのエリアに区切ることもできる。北区は官公庁が集まっており、南区は商業区。東西が住宅街だが、東区は一戸建てが多い超富裕層のエリアで、西区は集合住宅が多いより庶民的な街だ。

霞のマンションは西区寄りの北区なので、親は官公庁勤めのお役人なのかもしれない。

マンションの正面玄関に入ると、中扉を静脈認証で開ける。そのままエレベーターで8階に上がる。出て右折をし、2番目の扉の前で霞は立ち止まる。鞆から鍵を取り出すと、鉄の扉を開く。

「入って」淡々とした声で招き入れる。曲がりなりにも男を部屋に上げるというのにずいぶん平然としたものだ。

中はざっと見たところ手狭な2DKだった。両親は部屋を一緒にしていたようだ。風人らしいなと思った。

ダイニングの左手奥が霞の部屋で、ふすまが入り口になっていた。ルティア系の神楽には風風の部屋はやや珍しく映る。

すつとふすまを開けると、「どうぞ」と中へ案内された。女の子の部屋に入るのは久しぶりだろうか。少なくとも思春期以降は初めてだ。急にドキドキしてくる。

しかし中は予想に反して地味だった。小学生の杏樹の部屋のほうがよほど女の子らしい。まず床は畳。カーペットもなく簡素な机が置いてある。本棚にはところ狭しと数学関連の本が敷き詰められており、タンスすら見当たらない。ファンシーな小物などいわんやだ。服は押入れの中に仕舞っているようだ。

「今お茶を淹れるわ」

「ああ、ありがとう……」

勉強机の椅子以外、椅子が見当たらない。畳の上にそのまま座れということらしい。部屋をぼっと眺めていると、霞が緑茶をお盆に乗せて持ってきた。

ああそうか、凧人だからお茶といえば緑のやつか……。

「アルバザード人やルティア人は緑茶にも砂糖を入れると聞いたけど」

「それは中世の一部の人間だ」苦笑する。「都会の現代人はそこまで無理解じゃない」湯のみを受け取ると、くいと飲む。だがあまりの熱さに思わず「熱っ!」と叫んでしまう。そうだ、凧人はぬるま湯を飲むという感覚がアルバザード人より薄いのだった。まったく、よくまあ飲めもしない温度で飲み物を作る気になるよな。

「あら」ふふと笑う。「やはりぬるめにしてお砂糖も混ぜてあげればよかったかしら」余裕な顔でふーふーと湯のみに吐息をかける。

「訂正しよう。現代でも緑茶に砂糖を入れる都会人がいるかもしれない」

それから10分ほどしてお茶も飲みやすくなったころ、霞はすつくと立ち上がると「そろそろお父さんが帰ってくるわ」と言った。「私は夕飯の支度をするから、南君はここにいてちょうだい」

「ここにか?」

「お父さんは私の部屋に入らない。ふすまを少し開けて、居間で食事をしているのを見ていてちょうだい」

「分かった……」やや緊張した声で頷く。「もし親父さんに僕のことがバレたらどうする?」

「ちゃんと同じ学年の変質者よって紹介するから安心して」

「友達ってことにしとけよ！」

「私の場合」両方の手のひらを合わせる。「そのほうが説得力あるでしょう？」

それはそうだった。こいつに友達がいたら奇跡だ。結婚詐欺ならぬ友達詐欺を疑うべきだ。

「だが僕が変質者という点には納得がいかない！」

「違ったの!？」

「純粹に驚くな!!」

「押入れには私の下着が入っているから漁らないように」という不要な警告を残し、霞は居間へと出ていった。

冷蔵庫を開ける音やまな板で何かを刻む音が聞こえてくる。母親がいないだけあって、家事はこなせるようだ。案外女の子らしい面があるんだなど感心していると、玄関ドアがギィといった。

父親が帰ってきたようだ。隙間から覗く。

「おかえりなさい、お父さん」

居間に入ってきたのは痩せぎすの男性だった。スーツを着て、黒い鞆を持っている。霞はすっと歩み寄ると、鞆を預かって上着を脱がせてやった。

「疲れたでしょ。今日はお鍋よ」

意外だった。霞は学校で見せるような冷徹な表情を見せなかった。むしろほがらかな笑顔を見せていた。学校での普段の態度は孤独な少女を演じるための精一杯の演技なのか。いや……あるいはこちらの顔のほうが演技なのかもしれない。

「そうか」父親は端的に答えると、洗面所に手を洗いに行った。

それからすぐ夕飯になったが、特に問題らしい問題は見受けられなかった。霞は意外なほど明るく振舞っており、会話も霞のほうからしていた。父親も相槌を打ち、ときには笑っていた。これだけ見ているとまったく問題のない家庭に見える。

父親は基本的にそんなにおしゃべりではないようだ。その上ぼそぼそと喋るので、なんと言っているのか聞き取りにくい。霞は聞き取れているのだろうか。そんなことを考えて

いると、父親が何か言葉を発した。

「——で……なのか？」

え？ と神楽は思った。何を言ったのか聞き取れない。霞も同じなのか、一瞬躊躇ってから「うん」と答えた。すると父親は不機嫌そうな顔になった。

「霞、今言ったことちゃんと聞こえたんだろうな」

「え……もちろんよ」髪を掻き上げる。ああ嘘だと神楽は瞬時に思った。

父親も娘の癖を知っているのか、「じゃあお父さんが何と言ったか言ってみなさい」と詰問する。

「それは……」答えに窮する。まったくもっていつもの霞らしくない。それどころか作り笑いまで浮かべて「ど忘れしちゃった」と返した。

父親は聞こえよがしに舌打ちをすると、不機嫌そうな顔をした。お前の発音が不明瞭なせいだと神楽は心の中で罵った。

「ところで霞、お前今日学校で何かあったか？」ねぶるように聞きながら鍋を箸でつつく。

「別に……」また髪を掻き上げる。案外分かりやすい女なのかもしれない。「何もなかったわ」

「そうか」と言うと父親は席を立つ。そして玄関に行き、何かを手に取り戻ってくる。「じゃあこれは何だ？」

眼の前に突き出されたのは一本の髪の毛。神楽のものだ。神楽は肩まで来る少しぼさぼさの黒髪で、男子にしては長めだ。父親は黒髪だが短髪なので、明らかに彼のものではない。

霞は目を丸くして髪を見つめる。「それは……髪の毛じゃないかしら」

「誰のだと聞いている」父親の声が荒ぶる。

「私のじゃない……と思う」

「そうだな。じゃあ誰のものだ？」ネチネチと嫌な質問の仕方だ。顔をしかめたとき、神楽は妙なことに気付いた。髪の毛を握る父親の右拳に黒い影が見えたからだ。その瞬間、ハッと息を呑む。

——忌みだ……！

やはり予想は的中していた。父親は忌みに取り憑かれていた。だが影はまだ具現化して

いない。

「霞、誰のものだと聞いている」

「それは……」髪を掻き上げる。「……知らない」

その瞬間、父親は机をドンと叩いた。皿が跳ねてガチャンと音を立てる。

「嘘をつくんじゃない！」

突然の怒号。「ひっ」と言って霞が肩をすくめる。その様子は怯えた子猫のようで、レンス・リーファの、ましてや雪の華のそれではなかった。

「男だろ」父親はゆらあつと霞に歩み寄る。「お父さんが働いている間に、男の子を連れ込んだんだろ」

「私……何もやましいことはしてないわ」

それは確かに。今回は髪を掻き上げなかった。

「いけないな、霞。お父さんはお前をそんな風に育てた覚えはないぞ」

父親は霞の肩をぐっと握ると、右手で髪を掴んで引っ張った。

「きゃ！」か弱い悲鳴を上げる。

「これはお仕置きが必要だな」

すると霞は恐怖に顔を歪める。「やだ……やめて、お父さん。私、いい子にしてたよ」

「なんだその顔は！」表情が気に食わなかったのか、父親は霞の左腕をドンと殴った。「まだ何もしていないのに怯えた顔しやがって。まるで俺が悪者みたいじゃないか」

「痛いっ！」

「お前はお父さんを悪者にしたいのか!？」

娘の腹部に裸拳を入れる。「うっ」と言って霞はその場にうずくまった。

「何倒れ込んでいる！ 白々しい演技は止めろ！」

霞の反応が火に油を注いだようで、父親の怒りは昂ぶっていく。それとともに右手の影も大きくなっていく。

「ちがうよ……！ 本当に痛いの……」涙を浮かべる霞。両手でお腹を押さえている。「分かったから。私が悪かったから、もう止めて、お父さん。私、いい子にするから」

「じゃあ俺の信用を勝ち取ってみせろ」

無茶苦茶なことを言う。何をどうしろというのだ。だが霞は「はい」としか答えない。
「さっき学校の友だちが来てたの。お茶を出して話をしただけよ」

「友達だ？」髪を掴んでぐいと顔を上げる。「男友達だろ。お前は顔が綺麗なんだ。虫けらどもがいくらでも集ってくる。すべて一顧だにするなどと言ってあるだろう？ お父さんの言うことが聞けないのか？」

虐待の事実がバレないよう、顔や露出している部分は一切殴らない父親。その卑怯なやり口に神楽は怒りを覚えた。

「ちゃんと……守ってるよ。お父さんの言いつけ通り、男の子は全員ふってる」

父親は「ふん」と言うと霞の髪を離れた。

「なあ霞、前にレンス・リーファを外れたときのこと覚えているよな？」

「はい」

「友達なんぞを作って遊び呆けた結果、成績が落ちたんだ。それでお父さんに叱られて、それから何て言われた？」

「下々の者と付き合うなど。やつらの低俗さは感染するから近寄るなど」

部室でのやり取りが神楽の脳内で再生される。あれはこいつに刷り込まれた言葉だったのだ。

「だから私、一生懸命勉強したよ。高校でレンス・リーファに戻った。開発省勤務の立派な役人のお父さんの娘として恥じないように」

父親の腕にしがみつき、必死に訴える。

「なのにもた下賤な人間を連れ込んで遊び呆けていたのか！」耳をぐいと引っ張る。「そんなことしてまたレンス・リーファを外れたらどうする！ お前はお父さんの娘だろ？ 成績優秀、眉目秀麗でなくてこの優れた俺の子といえるか！」

「はい！ ごめんなさい！」小刻みに頷く霞。

神楽は理解した。この男にとって娘は自分を飾る道具なのだと。ふさわしくなければ容赦なく殴り、矯正する。自分の思うがままに。そうしてできたのが「レンス・リーファの美少女、終霞」なのだ。

父親は戸棚から果物ナイフを出すと、冷ややかに告げた。

「服を脱ぎなさい」

心中で神楽は「はあ!？」と絶叫した。

「はい……」

しかし霞は間を空けずに従った。セーラー服の上を脱ぎ、シャツも脱ぐ。

父親は——というかこんなやつもう父親じゃない——男は霞に近寄ると、鎖骨にナイフの刃を当てた。

「お前があまりに綺麗だから男が蠅のように集るんだ。悪いのはお前だ。というかお前、学校では男に色目を使っているんじゃないのか？」

「——! そんなこと——ないよっ!」

必死の訴えもむなしく男は右手に力を籠める。ずっと赤い切り口ができ、霞の柔肌が切り裂かれる。

「い……たい……。痛いよ、お父さん……止めて……!」

なんなんだこの光景は。

神楽は目を覆った。と同時に色々なことを理解した。霞が学校で他人を寄せ付けぬ空気を醸し出している理由。男を何十人とフツてきた理由。機械のように冷徹な表情を保持している理由。躊躇なく他人をハサミで襲える精神性。

——そして「むやみにギャラリーを増やしたくなかった」理由。

霞は知られなくなかったのだ。自分の惨めな境遇を。自分の哀れな正体を。

ならそれを知ってしまった自分にできることは何だ。霞はここまでプライドを犠牲にしてこの光景を見せてくれた。ここまで惨状を吐露してくれた霞に自分がしてやれることは何だ。

決まってる。

——あの男の忌みを祓うことだ。

神楽はズボンのポケットから小瓶を出した。中には水が入っている。丁にもらった清めの塩を溶かしてある。

男は霞の首を締めた。見える部分には決して傷をつけない。傷めつけるだけ。

「か……は」苦しそうに呻く霞。「やめ……て。死ん……じゃう……よ、おとう……さん」

右手の影が左手にも及ぶ。

「お前のせいだ。俺は悪くない。お前が悪いんだ。母さんが死んで俺の人生は詰んだ」

その刹那、男の拳から黒い鎧を着込んだ化物が現れた。

——出たッ！

神楽の心臓が激しく鼓動する。霞には見えていないのか、父親の目を凝視している。

その化け物は上半身が人間で下半身が馬だった。

あれが魔族ガルフレイ……？ 確か丁の説明では腕が百本生えた魔物だという話だが……

しかし迷っている暇はない。相手は背中を向けている。今がチャンスだ。

「終！」

神楽は叫ぶと同時にふすまを開けると、小瓶の液体を化物と男めがけてぶっかけた。

バシャッと音がして二人の頭が濡れる。

……。

……しかし何も起きない。

「え……？」

化物は依然としてそこにいる。男はこちらを見向きもしない。

どういふことだ！？

「や、止めるんだ！」神楽は男を睨みつける。しかし男は霞の首から手を離そうとしない。

男は完全に冷静さを失っており、真っ赤な顔で霞を見下ろしていた。

「母さんがいなくなって俺の人生はめっちゃくちゃだ。お前が……お前が代わりに死ねばよかったのに……！」

霞の瞳から涙が溢れる。部外者の神楽ですら耳を覆いたくなる言葉だった。男はより一層強く霞の首を絞める。

「お母さんは……もういない……よ。でも……私が……いる……。お父さんのそばに……いるよ」息も絶え絶えに懸命に訴える。「私は……いなくならない……お母さんとは違う……。お父さんの前から……いなくならない」

「お前に何ができる！ お前じゃ母さんの代わりはできない！」首から手を離すと、腕を掴んで強く握る。小さな悲鳴を上げる霞。

「でき……るよ」コホコホと咳き込む。「私、お母さんの代わりになるよ。結婚もしない。家から出ていかない。ずっとお父さんという。だから……」

そして霞は信じられないことを口にした。

「……だから私のことを可愛がって。これまでどおり教育はしているから」

きょう……いく？

神楽はきよんとした。

「私のことを大切に。可愛がってくれたら教育は我慢する。私が悪い子なのがいけないんだから」

——まさか彼女はこの虐待のことを教育と定義しているのか？

——まさか彼女はこの虐待を教育と称して受け入れているのか？

ハツとする。

そういえば今まで一度も霞は父親に「虐待」されていると口に出して認めてこなかった。

神楽は呆然としながらなかば無意識でレイゼンを取り出すと、丁に電話をかけた。

ワンコールで即座に丁が出る。スタンバイしてしてくれたのだろう。

「神楽君？ どうしたの、大丈夫！？」真剣な声だ。何かイレギュラーがあったのかと察しているようだ。

「雨宮……。違った……。違ったんだ……。」

忌みはガルフレイじゃなかった」

「どういこと！？」

「出てきたのは上半身が鎧武者で下半身が馬の魔物。

清めた水はなんら効果がなかった……。」

そんなことより……終の中では、この家庭の定義では、これは虐待なんかじゃなかったんだ……」

「どういこと、神楽君！？」

放心状態の神楽に対し、慌てた口調の丁。

ようやく発作が醒めてきてこちらに気付いたのか、化物が神楽を睨みつけてくる。

「雨宮……。化物はガルフレイじゃなかった。作戦は失敗だ。」

——この家には虐待がなかった。あるのは教育だったんだ……」

「神楽君！？」

とにかく冷静に戻って。今の話を聞いた限り、その魔物はガルフレイじゃない。その正体は——」

その刹那、化物が右腕を大きく薙いだ。神楽は横つ腹を強く打たれ、ふすまに向かって吹き飛んでいった。レイゼンが転がり落ち、通話状態が切断される。

しまったと思うが早いか、化物はレイゼンの前に立ちふさがる。

化物は男の口を借り、「なんだ小僧、貴様は……」と低い唸り声を上げる。

「柀、大丈夫か！？」脱がせられたセーラー服を鷲掴みにすると、霞に駆け寄って手渡す。彼女はバツが悪そうに俯き、セーラー服を着ながら返事の代わりに小さく頷いた。「すまん、予想が間違っていたようだ。忌みはガルフレイじゃなかった」

「……南君には何が見えているの？」消え入るような声で問う。「私にはお父さんしか見えない……。影も化物も」

「下半身が馬の鎧武者だ。心当たりは？」男の前で仁王立ちになりながら、背中中の霞に声をかける。

「私、神話は詳しくなくて……」

馬の化物は大剣を携えていた。男が「貴様が娘をたぶらかしたのか」と言うと、それに呼応するかのように化物が剣を振るう。

神楽はすんでのところで剣をかわすと、剣は床に刺さって亀裂を生じさせた。

「うそ……」いきなり目の前の床に裂け目ができたのを見て、霞は目に見えない何かが存在していることを知った。

「とにかく雨宮に連絡を！」

神楽は這うようにレイゼンに近寄るが、化物は人間並みの知能を持っているのか——あるいは男の意思なのか——レイゼンの前に回りこんで剣を振り上げる。

だめだ、あいつレイゼンに触れさせないつもりだ！

神楽は歯噛みした。

するとふいに肩に白い手が乗せられた。振り向くと、霞が立ち上がって小さく首を振つ

ていた。

「もういいの、南君」

「柎……？」

「嘘ついてごめんなさい」

「嘘だって……？」

「お父さんに虐待の忌みなんかか憑いていないことははじめから知っていたわ。確かに私の秘密である包帯や絆創膏は一ヶ月前からできたものだけど、それは教育の程度がひどくなっただけだから。教育自体はウチにはもともとあったから。ただ、程度の問題だったの」

「教育……」

「ええ」

「ちがう」神楽は首を強く振った。「ちがうぞ、柎。こんなの教育じゃない。ただの虐待だ。お前は自分が虐待されている事実を認めたくないだけだろ？」

「いいの」ふるふると頭を動かすと、髪がさらさらと舞う。「私が南君にしてほしかったのは、お父さんに本当に忌みが憑いているかどうかの確認」

「どういうことだ？」

霞はゆっくりと男に近づく。

「柎、やめろ！ 危険だ！」

「忌みが憑いていることさえ確認できれば、その内容くらい娘の私には分かる」

化物が霞の頭上で剣を振り上げる。

「危ない！」

叫んで霞を突き飛ばそうと駆け出す。だがどう考えても間に合わない。

万事休すかと思った瞬間、霞は見えない剣をかわずともなく、男にそっと抱きついた。その瞬間、化物の剣が霞の頭上わずか数cmのところまで停止する。

「え——」

意外な光景に目を丸くすると、霞はさらに腕を男の背に回してぎゅっと抱きついた。

「私に神話の知識なんかない。でも分かる。お父さんに憑いている忌みは——」

男が呆然と霞を見つめる。

「——孤独」

霞は男の胸に顔を埋めた。

「お母さんが死んじゃって一番つらかったのはお父さんなんだよね……。」

寂しかったんだよね……。」

でもお願い、お父さん。お願いだから人生詰んだなんて諦めないで。

私がいるから。私、お父さんのそばにいるから……。」

霞の涙が男のワイシャツを濡らすと、男の後方で剣を持っていた化物は白い霧に姿を変え、霧散していった。

「消え……た？」 呆然と呟く神楽。化物はすっかりいなくなり、部屋には3人が残った。それと同時にぼやけていた男の焦点が定まる。

「霞……？」 男は呆けた声を出した後、ハツとした顔になった。「なんだ……お前、泣いているのか」

まるで今起こっていたことを覚えていないかのような口調だった。実際そうなのかもしれない。あの暴挙は忌みによるものだったのかもしれない。たとえ普段から教育と称して行き過ぎた折檻を行う父親であっても、ここ一ヶ月の目に余る乱暴はあくまで忌みのせいだったのかもしれない。

「どうした霞」男は優しく彼女の頭を撫でると、戸惑った顔で問う。「学校で何かあったのか」

「うん」霞はふるふると首を振り、手で目をごしごしすると、笑顔を見せた。「なんでもない。お父さん、おかえりなさい。今日もお仕事お疲れ様でした」

「あ、ああ……それならいいが。……うん？」 男の膝ががくつと折れる。急に立ちくらみを起こしたのか、そのまま気絶してしまった。どうやらニクロイのときの男子と同じ状態のようだ。正直このまま意識があつたら自己紹介だなんだと色々面倒なところだった。

霞は部屋から毛布を取ってくると、床に寝転んだ父親にかけてやった。神楽は転がったレイゼンを拾う。ふとそのとき床に3という灰色の刻印がしてあるのに気付き、首を捻った。もともとあつたものだろうか。

「間一髪だったな、終」

「そうなの？」

「お前の頭上わずかのところまで化物の剣が振り下ろされていたんだぜ？」

「そう……」あまり気にしてもいない様子だ。

「それにしてもよく忌みを祓えたな」

「自分でも分からないわ。どうしてその化物は消え去ったのかしら」

「多分、お前の取った行動が父親の孤独を拭い去ったからだと思う」

「私……」霞は自分の手のひらを見る。「お父さんに必要としてもらえたってことかな」

「だと思うよ。お前の存在が孤独を打ち消したってことだろ。親父さんにとってお前は必要な存在なんだよ」

「そう……」霞は今までに見せたことのない笑顔を浮かべた。「よかった……」

「僕としても一件落着して安心したよ」

「南君……」霞は神楽に向き直ると、居住まいを正し、深々と頭を下げた。凧人の感謝の印だ。「ありがとう。貴方のおかげでお父さんの忌みを知ることができたわ」

「よせよ。結局祓ったのはお前じゃないか」

「ううん、南君のおかげよ」

神楽はぼりぼりと頭を搔いた。「じゃあせめてその南君っての止めてくれよ。気まずくてしかたない」

すると霞は満面の笑みを浮かべて言った。

「却下で」

「……」

このまま自分も床に倒れこんでやろうかと思った。

霞は拳を口元に当ててくすくす笑うと、「これからもよろしくね、南君」と言った。

父親がいつ起きるか分からないので、神楽と霞は一旦家を出て、集合住宅が共有する公園に降りていった。あれだけの悶着があつて今更あの父親と普通に話せるようになるとは思えなかった。たとえ向こうがこちらのことを覚えていなかったとしてもだ。

ブランコに腰掛けてレイゼンに目をやる。通話が途切れた後、何度か丁から着信があつたようだ。心配してくれたのだろう。丁に電話をかけると、ワンコールで出た。

「神楽君！？ 大丈夫だった！？」声はやや焦っている。

「ああ、心配かけてすまない。僕も柊も無事だ。忌みも祓えた。

「え!？」ひどく驚いた声。「逃げたんじゃないの？ 倒せちゃったの？」

てっきり対処法が分からなくて逃げ出したものだと思っていたらしい。最初は何度かこちらに電話をかけたが、一向に出ないのでこちらが逃走中だと思って電話を控えていたそう。

「ああ、柊が祓った。父親の忌みが孤独だと見破ったんだ」

「すごい……」放心したような声が耳に届く。「じゃあもうさっき言いかけた言葉は必要ないね」

「いや、後学のために聞いておくよ。あれはいったい何だったんだ？」

「その化物は魔族リヴェルム。第七天で、闇の否天よ。忌みは孤独。対処法は、忌みに憑かれた人間の孤独を取り去ってあげること」

「7の悪魔……」ぼつりと呟く。突如霞との会話が思い起こされる。彼女は言った。7は孤独を象徴する数だと。せめてあの馬の化物リヴェルムが7番だということを知っていたら、もっと早く忌みの内容を想像できていたかもしれない。

「それより神楽君、怪我してない？ リヴェルムは剣を持った魔物よ。切られたりとか……」

「大丈夫。基本的に忌み祓いは知能戦だからな。どうにか僕でも避けられる程度の攻撃だった」

「そう、よかった」電話口の声がやたら安心したような口調になる。「神楽君のことだから、柊さんを守って怪我をするんじゃないかって心配だったの」

なんだかその言い方は霞より神楽の身を案じているように聞こえた。

「僕はそんなお人好しじゃないさ」とは言うものの、若干先ほどそのような行動を取ろうとしていた自分が怖い。

丁に礼を言い、電話を切る。

「さて、と。これからどうするんだ、柊？」

「もうお父さんも目を覚ますだろうし、お鍋の続きを食べるわ。本当はお礼に南君にも食べて行ってほしいのだけれど」

「それは気まずくて死ぬから止めておくよ」

これから霞はどう暮らしていくのだろうか。むしろそのことが気になって仕方なかった。確かに今回父親の忌みは祓った。だがそれは虐待ではなく孤独の忌みだ。霞はこれからもことあるごとに教育と称した虐待を受けるだろう。今回のような怪我はさせられないとしても、多少の折檻は残るはずだ。それは忌みではなく彼自身の元々の性格なのだ。治しようがない。だが霞はそれを受け入れてしまっている。

チラと霞を見るが、そんなこと意にも介していないような表情をしていた。今までは虐待があっても母親が間に入っていてくれていたかもしれない。今後はそれがなくなる。そうしたら虐待はエスカレートしないだろうか。それが不安でもある。だが部外者の自分が過度に心配しても仕方のないことでもあった。

「なあ、柊のお袋さんなんだが……」なんとなく話題に出してみる。「何の病気だったんだ？」

「肝臓や胆嚢に問題があつてね。でも最後は病気じゃなかったのよ」ブランコを漕いで遠い目をする。「医療過誤……って分かる？」

「ああ」

「看護師による医療ミスね。注射の中身が間違っていた。単純な人的ミスね。小さいながらニュースにもなったわよ」

全然知らなかった。

「そうか……」

神楽は苦い顔で沈黙した。

「ねえ、私、貴方にどうお礼をすればいいかしら」

気まずい雰囲気を変えようとしたのか、霞がずっと近寄ってくる。その距離わずか十数cm。桜の香りの吐息が届く近さだ。

「やっぱり健全な男子高校生だから——」

目を右上に動かす霞。白く細長い人差し指を唇に当てる。神楽はその艶かしいさまに思わず生唾を飲んだ。

「——やっぱり女の子のを食べたいでしょう？」

なんですと？

「……そうよね」

無意識に自己申告があったBカップに目が行く。そのまま目線はどんどん下がり、スカートに隠れた部分に釘付けになる。嚙下障害かというくらい、唾をゴクリと飲む音が自分の耳に響く。

神楽の頭に「女体」「食べる」という2単語が湧いて出る。もはやそのふたつの単語で脳が完全に満たされていた。

「ひ、柊？」

「じゃあ明日のお昼に——」

昼休み……。確かに2時間もあれば……。

再度唾を飲む。急に口の中が緊張で乾いてきた。

「——教室で会いましょう」

教室で！？ なんて大胆な。

「中身は何かいい？」

学校なので外見はセーラー服と決まっているから、中身というと下着のことか。それを未経験者の自分に選べと？ デザインを選べというのか、あるいは色を選べというのか。

「そ……そうだな、やはり白とか……水色なんかも」

「水色なんて何かあったかしら……？」首を傾げる霞。「白はお米ってことでいいのかしら。それとも牛乳？」

「は？」

「え？」

一瞬空気が止まった。

「何の話だ、柊？」

「何の話、南君？」

「いやだから……。……あれ？」

「お礼のお弁当。中身何かいいって……」

「あ……あー」

あー。

はいはい。

ですよー。

神楽は胸の中で大きく頷いた。

ファーヴェアの月リナの日

セイネルス＝セレン通りの公民館は決して大きくはないが、バレエや合唱などの公演によく使われるらしい。ここでは数ヶ月に一度定期的にバレエの公演が行われており、今日は妹の杏樹がお披露目することになっている。

杏樹は神楽より先に家を出て楽屋に入った。神楽は他の観客同様、正面玄関から入場した。ホールに入ると中は照明が落とされており、薄暗くなっていた。チケットに記された座席を探すと、席に着く。

ふわあと大きなあくびが出る。昨日は霞の家から帰った後夕飯を食べたので、就寝時間が後ろ倒しになってしまった。そのせいで少し眠い。

うとうとしていると開演を知らせるベルが鳴った。照明がさらに一段落とされ、舞台が明るくなる。舞台袖から数人の少女が踊りでてくる。杏樹はエミス神の格好をして現れた。お団子に結った髪が愛らしい。神楽はレイゼンのビデオ機能を使って動画を撮影しだした。

ほっそりした身体と枝のような手足が少女に似つかわしい。ただ、神楽は知っている。バレエというのは見た目ほど優雅ではないことを。杏樹はいつも足、特につま先が痛いと言っている。つま先の力だけで立たなければならないので足に負担がかかるのだ。ひどいときはつま先から血が滲むこともある。幼い性格の杏樹だが、バレエだけは痛い思いをしても頑張っている。だからこそ神楽は精一杯応援してあげたかった。

演技も中盤に差し掛かったころ、雰囲気か怪しくなってきた。先ほどから杏樹の動きが鈍く、何かを気にしているような素振りだった。何か……自分の脚をちらちら見ながら演技をしているのだ。そのせいで動きやリズムに乱れが生じている。

一旦一幕終わるといところでそれは起きた。

「きゃあああ！」という少女の甲高い悲鳴が聞こえたのだ。

一瞬誰が叫んだのか判らなかつた。だがすぐにそれが杏樹のものだと分かった。彼女は脚を押さえてうずくまっていたからだ。

観客がどよめき出す。それとともに幕が降りる。

……なんだ、今の。

手と背中に冷や汗が伝う。

脚を怪我した？ いや、それであそこまで叫ぶか？ 杏樹はバレエの怪我に関しては人並み以上に我慢強い。演目の途中であんな醜態を晒すはずがない。

まさか……。

神楽は青ざめた顔で席を立った。休憩時間の間にトイレに行こうとする客をかき分け、楽屋へ急ぐ。係員に場所を聞くと、「関係者以外入れませんよ」という言葉を無視して楽屋に向かった。

実際杏樹が楽屋にいるかどうかは分からなかった。まだ劇の途中だし、舞台袖で控えているかもしれない。だがあの様子は異常だった。楽屋で休んでいる可能性のほうが高い。

関係者以外立ち入り禁止と書かれた紙を無視して楽屋に入ると、女の子の小さな悲鳴が聞こえた。中では出番を終えた少女が着替えをしていた。だが神楽は動じることなく首を大きく動かして部屋の中を調べた。杏樹の姿はない。

「杏樹！ いるか!？」

大きな声を出すと、カーテンで仕切られた小部屋の中から「お兄ちゃん……?」という声が聞こえた。

驚きで固まっている少女を無視して神楽がカーテンを開けると、中では杏樹がベッドに腰掛けていた。彼女はカーテン向こうの少女の目線に気付くと、「お兄ちゃん、カーテン閉めて!」とすぐに小さな声で叫んだ。

「どうしたんだ、さっきのあれは」言いながらカーテンを閉め、ベッドの前にしゃがみこむ。「脚を押さえてうずくまってたじゃないか」

恐る恐る妹の脚に目をやる。客席からは遠すぎて脚に霧が見えなかったが、まさか影に発展しているなんてことはないだろうな……。

「お兄ちゃん、コレ何!？」

神楽が目やる前に杏樹はチュチュをまくって白い脚を顕わにした。するとそこにあったのは影なんかではなかった。そこにあったのは大きな目玉だった。妹の脚に目玉がはりついていた。ギョロっとした一つ目。眼球は血走っており、キョロキョロと上下左右に動く。

「な……」

「しかもこれ、ひとつじゃないの。ほら、こっちにも」

よく見ると目玉はひとつではなかった。いくつもいくつも、ギョロギョロした目玉がはりついていた。右足にも、左足にも。

「ちょっと脱いで、杏樹」

「うん」

衣装を脱ぎ、シャツも脱がせる。

「あの……」やや恥ずかしそうに上目づかいをする。「スポーツブラも脱いだほうがいい？」

「目玉があるなら脱ぐんだ」

杏樹は指でくいつとスポーツブラを引っ張り中を上から確認すると、「ここは大丈夫みたい」と答えた。

「じゃあそのまま」言いながら神楽は妹の腕やおなかを見る。腕、肩、腹、それらすべてに目玉が浮かび上がっていた。思わず鳥肌が立つ。ぞぞぞっとするこの感覚。全身がじんましんで覆われるより不気味だ。

「背中も見せるんだ」

振り返る杏樹。背中にも目玉がギョロギョロしていた。観察しているとまだ何も無い白い肌に黒い裂け目が入った。かと思うと裂け目はカッと開き、新たな目玉となった。なるほど、このようにして目玉ができあがっていったのか。

「杏樹、痛いかな？」

「ううん……痛くはない」小さく首を振る。神楽はほっと一安心した。

「最初に気付いたのは？」

「叫ぶ寸前だよ。脚に何かあるなあって思ってチラチラ見てたら、いきなりギョロっと目玉に睨まれたの」

「それで思わず叫んだのか」

「幕が降りて舞台袖に行つて脚を見てみたらこんなになっていて……。先生やみんなに言えないから具合が悪くなったことにして急遽他の子に代役をお願いしたの」

「じゃあ誰もこの目玉については知らないんだな」ほっとした。良い判断だ。

「ねえお兄ちゃん、私どうなっちゃつたの！？ 杏樹、こんな身体いやだよお……」えぐ

えぐと泣き出す。

妹の背中をとんとんとさすってやる。「大丈夫だ。お兄ちゃんがどうにかしてみるから」

ポケットからレイゼンを取り出し、丁に電話をかけた。3コールほどして彼女が出る。

「神楽君、どうしたの？」

「いきなりで悪いな。実は妹のバレエを見にきたんだが、途中でトラブルが起こった」

「トラブル？」

「妹に忌みが発生した。体中が気持ちの悪い目玉で覆われている。それで妹が叫んで公演を途中で降りた」

「目玉……。え、それ妹さんにも見えるの？」

「ああ、本人にも見えてるようだ。今までの物とタイプが異なるらしい。もちろん僕にも見える」

丁は電話口でゆっくりと細く息を吐いた。慎重に言葉を選んでいるようだった。

「ねえ……妹さんって嫌々バレエをやらされてたの？」

「いや？ 本人の意味だぞ。小さい頃に始めたんだ」

「……きっかけは？」

「え？」杏樹をチラと見る。彼女は不安そうな顔で歯をカチカチいわせている。「確か僕の前でテレビの真似して踊ってたんだ。それを僕が可愛いって褒めたらバレエが気に入って、それから習いだしたんだ。でも別に僕が強要したとかはないよ」

「うーん」釈然としない丁の声。

「なんだよ、雨宮。わけがわからないよ。それよりこの忌みは何の魔物なんだ？」

「うん……」言いづらそうな声。「魔物の種類としては邪眼魁のヴェミだと思うんだけど」

「ヴェミ？」

「第七十六天で邪の空天。巨大な眼に羽が付いた魔物よ。眼で睨まれると身動きが取れなくなるの」

つまりは vem (恐怖) と ins (目) の混成語か。そいつの目が妹に取り憑いているようだ。

「詳しいんだな、雨宮」

「ううん、ただウチが神社だけ」

「で、そいつの忌みを祓うにはどうすればいい？」

「それなんだけど、妹さんにヴェミが憑いたっていうのが意外なのよね。その子、内向的なほう？」

「いや、僕が言うのもなんだけど、明るくて素直ないい子だよ。何か関係あるのか？」

「うーん」とやはり歯切れの悪い調子だ。「ヴェミの忌みは『自意識過剰』なの。人から見られることを過度に意識したり、自分は人からどのように見えているか過剰に意識したり、そういう子がかかるとの忌みなのだよ」

「自意識過剰……」それは明らかに杏樹の印象からは程遠いものだった。

「人って見られたくないって思うときほど他人の視線が気になるものよね。ヴェミはそういう人の弱い気持ちにつけこんで取り憑く。そして目玉になって犠牲者を見つめる。取り憑かれたほうは見られることでますます緊張する。ヴェミはそれを利用して数を増やす。最初は体の一部に出るんだけど、最終的にはじんましのように全身に及ぶの」

「まさに今がその状況だ」

「だから人に見られたくないっていう意識を持った内向的な子なのかなって思ったの。あるいは嫌々バレエをやらされてて見られたくないっていう線も考えた」丁はため息をつく。

「でもそのどちらでもないのよね」

「ああ……。他に原因になりそうなものはないのか」

「そうね……もしかしたら観客の中に彼女の自意識を高めるような人物がいたのかもしれない」

「どんなやつだ、それ」

「多分……彼女の好きな男の子とかじゃないかな。好きな人の前で失敗したくないっていう気持ちは自意識を高めるから」

その台詞に神楽は一瞬苛立ちを覚えた。そんなもの、まだ幼い妹にいてたまるか。だがその可能性がある以上、確認せねばならない。

「ちょっと待っててくれ、雨宮」レイゼンをベッドに置き、妹の手を取る。「杏樹、正直に答えるんだ。お前、好きな男がいるのか？」

「え？」急な質問に顔を赤らめる。そのまま何も答えない。ああいるんだなと思ったら、頭をハンマーで殴られたような気分になった。

「……今日そいつはここに来てたのか？」

無言のまま小さく頷く。

「そいつはどこにいる？」

「それは……」言いづらそうにする。

「お前は今日緊張してたんじゃないか？ いや、今日だけじゃない」霧のことを思い出す。

「何日も前から不安だったんじゃないか？ もし失敗したらどうしようって」

こくと頷く。

「そいつが見にくるから余計緊張したんだな？」

「……うん」

「わかった……」

妹の成長を素直に喜べない神楽は鬱気味な様子でレイゼンを手に取った。

「雨宮、原因が分かった。やはり今日好きな子が来てたらしい。そいつに失態を見られたくないという思いが自意識を高めていたようだ。で、ヴェミを祓うにはどうすればいい？」

「自意識を高めていた相手が『緊張しなくても大丈夫だよ』って安心させてあげれば、自然とヴェミは消えるわ。ただ問題はその相手を探してこなきゃってことだね」

「そうか……」レイゼンをベッドに戻す。「杏樹、恥ずかしいかもしれないけど、お前を助けるにはお前の好きな子が必要だ。そいつを探してくるから名前か席を教えてくださいませんか」

「えっ！」と青ざめた顔をする。「それは……無理だよ」

「早くしないとこの目玉が体中を覆うことになってしまうんだ」

しかし杏樹は下を向いて赤い顔のまま何も答えない。神楽は胃が痛くなるのを感じて腹を押さえた。ふたたびレイゼンを手に取る。

「駄目だ、雨宮。恥ずかしがって教えてくれない。他に祓う方法はないのか？」

そうこうしている間にますますヴェミの目は増えていく。神楽は苛立ちを隠せない。すると電話の向こうで丁がふと妙なことを言った。

「あの……もしかして、ヴェミの目は増えているの？」

「え？ あ、ああそうだよ。今もどんどん増えてる」

「そんなはずは……」不信感を募らせる丁。「だって、もう舞台にはいないんでしょう？

それに目玉は既に全身に及んでいる。ならこれ以上ヴェミの目が増えることはないはずだ
けど……」

「だが実際現在進行形で目玉は増えていってるんだ！」

すると丁は数秒間沈黙した。神楽が声をかけようと思った瞬間、彼女は低いトーンで言葉
を発した。

「ヴェミの目玉が増えているとしたら、彼女の自意識を高める人が今現在彼女を見ている
からよ……」

神楽は丁の台詞の意図が分からなかった。思わずカーテンで仕切られた小部屋の中を見
回す。もちろん誰も見ていない。ここには自分と妹ほか、誰もいない。

「いや、雨宮。ここには僕と妹しかいない」

「だから——」言いくそうに続ける。「——神楽君がいるんでしょう？」

「は？」

——え、まさか、僕？

自分が杏樹の自意識を高めている？

杏樹は僕に失敗するところを見られたくなくてヴェミに取り憑かれた……？

「え、なんで……」

次の瞬間、神楽はあることに気付いた。

自意識を高めている人間が彼女の好きな相手——。

一瞬、ざっと身を引く。杏樹はこちらの異変に気付いたのか、顔をさらに赤くして下を
向いた。

「お前——」

言葉を発しようとした瞬間、レイゼンから声が聞こえる。

「もしもし神楽君？ 慌てずに聞いて。ヴェミの目玉に手を当ててちょうだい。そして『大
丈夫だ、安心して』と言いながら優しく撫でてあげて」

言われたまま神楽は杏樹の腕に手を当て、言葉を真似る。その瞬間、ぼうつと小さな光
が出た。手を離してみると今そこにあったヴェミの目が消えていた。

「雨宮……目玉が消えたぞ」

「そう……」複雑な声の丁。「じゃあそれを全身にやってあげて」

「わかった……。ありがとうな。じゃあ一旦電話を切るぞ」

「待って」

「ん？」

「あの、ね……」言いよどみながら喋る。「そういう気持ちって、小さいころは珍しいことじゃないと思う」

「……」

「神楽君の家は年が離れているから、憧れを持たれることってあると思う。まだ思春期前の小さな女の子だし、身近な男性にそういう風を感じてしまうことはありえるわ」

「そうなのか……」

「特に神楽君は優しいしね。良いお兄ちゃんだから余計なんじゃないかな」

「やめてくれ」

「とにかく、傷つけるようなことしちゃダメだよ？ まだちっちゃくても本人としては真剣な気持ちなんだから」

「ん……」と言って神楽は電話を切った。

「杏樹……ひとつひとつ目玉を消していくからな」

「……うん」彼女は真っ赤な顔のまま答えた。

結局神楽はそのまま余計なことは何ひとつ言わず、小一時間かけてすべての目玉を消していった。杏樹もまた黙ってその仕草を見ていた。

最後の目玉を消し終わると、神楽は額の汗を拭った。

「ふう」と言ってレイゼンを取る。電話をかけるとすぐ丁が出た。「雨宮か。助かったよ、ヴェミを祓うことができた」

「そう、良かった」安心したような声。

眼下に目を落とすと、床に18と書かれた灰色の刻印がしてあることに気付いた。

「なあ雨宮、ヴェミを消したら床に18っていう数字が現れたんだが、確かニコロイを倒したときも5っていう数字が出たよな」

「数字？」

「ああ。昨日柊の家でも見たんだ。確か3だったと思う。これ、何なんだろうな」

「忌みとは特に関係ないと思うけど。忌みを退治して数字が出てくるなんて聞いたことないもの。それに、その数は魔族の番号でもないし……」

「そう、か……」

しかしまったく無意味とは思えない。なんとなく気になる数字だった。

電話を切ると、杏樹がそっと手を握ってきた。

「ありがとう……お兄ちゃん。杏樹、もう大丈夫だよ」

「ああ……」なんとなく気まずくて妹の顔を正視できない。年頃前の女の子の気持ちというのがよく分からない。

「お前、三日前に勉強見てやったとき、僕に来れるかって聞いたけど、本当は来てほしくなかったんじゃないか？」

「ううん」首を振る。「そんなことないよ。というより、お兄ちゃんに見てほしかった。とても緊張したけど、私がバレエを頑張ってるのはお兄ちゃんに可愛いつて言われたのが嬉しかったからだもん」

「そうか……。うん、今日も可愛かったぞ、杏樹」そう言って頭を優しく撫でる。「途中までになっちゃったけど、家に帰ったら一緒にビデオを見ようか」

神楽が優しく微笑みかけると、杏樹は嬉しそうに「うん！」と頷いた。

ファークアの月エクトネの日

「神楽君、忌憑っていう字、書ける？」（表紙絵左上の文字参照）

杏樹の一件があった翌日、神楽は蒔蘿線のラゾーディン駅から徒歩5分ほどのところにある神社にいた。雨宮丁の実家だ。今日は学校が休みで、丁は巫女(yukali)の服装をしている。家の手伝いだそうだ。

凧人の宗教である丁信仰(hinata)において、巫女は神剣を胎内に取める役割を持った処女とされ、神主(yuua)を手助けする者とされている。雨宮丁のファーストネームはこの hinata という信仰が語源になったもので、そもそも神とか精霊といった意味を持つ。

「忌憑を京極でどう書くかって話か、雨宮？」

京極(mana)というのは凧人独自の表意文字のことだ。角張った文字で、恐ろしく画数が多い。文字種も多く、何万字もあるという。凧人でさえその総数を把握できていないそうだ。

一般的な凧人は数千の京極を覚え、使いこなすという。たった25文字しか使わないアルカの幻字(hacm)に比べてなんと複雑なことだろう。霞が聞いたら非合理的の一言で一刀両断することうけあいだ。しかし神楽はそう思わない。

京極には凧人の世界観が詰まっており、彼らの物の見方や思想哲学が籠められている。言語を運用するという観点において合理的でないことは認めるが、それでも非常に興味深い存在だ。むしろ神楽にしてみればそのような複雑な文字を何千と使いこなしている凧人は尊敬に値する。

「忌憑は2文字でできているよな。忌という文字は左右に分かれる。まず左側が『巳』という字。これは雨宮、お前のファーストネームの丁という字だ。読みはそのまま hinoto」
「うん」と満足そうに頷く。

「続いて忌という字の右側だが、これは上下に分かれる。上半分は『于』という字。これは心という意味だ。そして下半分は『心』という字。これは悪という意味だ。上下合わさって『悪い心』になる」

「つまり左半分が神で、右半分が悪い心ということだね」

「それらが合わさって『悪い心の神』、すなわち『悪霊』ないし『忌み』になる」神楽は

顎に手を当てる。「悪霊は風霧で kanleizen だが、忌みは yui というよな？ 同じ文字でふたつの読み方があるのか？」

「そうよ。京極は複雑でしょう？ もともと kanleizen も yui も近い存在だからね。原理的には同じことだから」

「ふむ」と頷く。やはり京極は奥が深い。「そして忌憑の憑の字だが、この字も左右に分かれる。左側は先ほど出てきた『于』で、意味は心。右側は『乃』で、これは馬という字だよな？」

「そうだね」

「このままだと『心の馬』という意味になる。憑依という意味になるとは思えないのだが」

丁は神楽の疑問を楽しそうに聞きながら、境内の落ち葉を箒で掃く。

「神楽君、京極で『乗る』ってどう書く？」

「馬を意味する『乃』の上に、行動するを意味する『匕』を書く。『馬する』と書いて『乗る』という意味だ」

「そう。忌憑の憑は左が『于』で右が『乃』だけど、この『乃』は馬でなく『乗る』という意味なの。『匕』が略されているのね」

「つまり『心に乗る』と書いて憑という字になるのか」大きく頷いた。「ということは、忌憑という京極には『悪い心の神が人の心に乗る』という意味があるんだな」

ちりとりで落ち葉を集めると、「よくできました」といってにこりとする。

「なるほど。凡人にとって忌みというのは人の心に乗っかってくるものなのか」

「そう。乗られたほうは心に重荷を抱える。柊さんのお父さんや神楽君の妹さんみたいにね」

「ふむ、そう考えるとまさに『乗る』という言語感覚は適切だな」

京極の造詣の深さに神楽は改めて驚かされた。

「馬という意味では柊の親父さんなんかまさにそうだったな」上半身が鎧武者で下半身が馬の化物りヴェルムを思い出す。「彼は文字通り馬に乗られていたよ」

「そうね」くすくす笑う。無事終わった話だからこうして笑い話にできるのだ。

神楽は箒で地面を掃く丁を眺める。

白い装束と朱の袴を穿いた巫女の少女はとてモクラスの首席に見えない。どちらかというと8組の異能科にいそうな雰囲気だ。8組というのはラルドゥラ組といい、占い師だ魔法使いだといったどこまでが本当か分からないような連中が在籍している特殊なクラスだ。

それにしても雨宮の巫女姿は新鮮だな……。凧人の文化自体が面白いというのもあるが、——などと思っていると、丁は「ん……？」と言って腕を罰点に交差させ、警戒したような表情を見せる。

「だめだよ、神楽君？　へんなところ見ちゃ」

「へ？」

気付いたら視線の先には丁の小振りな胸があった。装束を観察していただけなのだが、妙な嫌疑をかけられてしまった。下半身を観察していなかったのがせめてもの救いだ。

「今時Aカップはないだろって顔だね？」

「してねえよ！　どんな顔だよ！」

「やっぱり凧人は胸の小さいのが多いなっていう率直な心の声が聞こえた気がする」

「どんな誑心術だ！？」

「あ、じゃあやっぱりそうは思っていたんだ？」

「思っていない！　そもそもAカップだと分かるわけないだろ。自己申告するなよ！」

「え」意外そうな顔。開いた口を手で押さえる。「健全な男子がデファクトスタンダードとして生得的に持つアビリティによって明らかなのだとばかり」

「——お前もかっ！！」

どこまで有名なアビリティなんだよ、それ。妙なアビリティを学年中に広める忌みとか憑いてるんじゃないのか、ウチの学校。だとしたら感染源はネストで間違いないな。

「ところで今日は何の用だったんだっけ？」

「あ、そうだ」ポンと手を叩く。「まずは杏樹の札を改めて。それとひとつ相談が」

「目のことでしょうか？」察したような口調。

まさにそのとおりだった。杏樹の忌みは取れたが、自分の目の謎が解決したわけではない。このままではいつまた影を見ってしまうか分からない。こんな不気味な能力からは早く解放されたいのだ。

「神楽君は4日前から影が見えるようになったって言ってたけど、そういう風になった心当たりはあるの？」

「心当たり……か。しいていうなら5日前かな」レイゼンを取り出すと、休み明けの学校帰りに見た飛び降り自殺の記事を表示させる。「この事件、知ってるか」

画面を食い入るように凝視する丁。「うん……知ってる」と小さく答える。「私のウチ、ラゾーディンでしょ。蒔蘿線ユーザーだからコノーテ＝セレン駅は毎日使うよ。ひどい事件だったね」心底つらそうな顔をする。「巻き込まれた女の子が可哀想だった」その台詞はどこまでが本音でどこからが優等生の仮面によるものなのか判断できなかった。

「実はあのとき、僕は現場にいたんだ」

「え……」ちょっと驚いた顔になる。

「下敷きになった女の子は僕の目の前を歩いていた。彼女が落し物をしたので拾って呼び寄せた。そしたら上から女が降ってきたんだ」

「それで……」真面目な顔で——まあいつも真面目なんだが——箸の手を止める。「神楽君はどうしたの？」

「僕は動揺して……その場を去った。周りの人が救急車とかを呼んだみたいだったし、特にできそうなこともなかったし……」なんともバツが悪い。

「……」丁は神楽が黙って立ち去ったことについては追及しなかった。「そのとき何か異変は？」

「別に何も……。飛び跳ねた血が目に入ったからトイレで顔を洗った。そのまま家に帰ったよ」

「目に血が？」訝る丁。空を見ながら何かを考える。「ねえ、もしかしてその血って、飛び降りた人のものかな」

「あるいは下敷きになった子のだろうな」

「仮にだけど、飛び降りた人が忌みに憑かれていたとしたら、その血が目に入ることで神楽君の目に異状が起こったってことはない？」

「忌み？ 彼女が？」それは想定外の推論だった。「……分からない。でも確かにあの事件以降、僕には変なものが見えるようになった気がする。そして目に何かあったといえれば確かに飛び跳ねた血くらいしか思いつかない」

「血……」 丁は口元に手を当てた。

「血が目に入ること何らかの能力を獲得することってあるのか？」

「かもしれない。東洋医学(lukletia)において血は魔法の力(vir)と関連性があるから」

「ルティア語で血は la san で魔力は la vir で女性は la yulis ですべて女性名詞だが、これらの間に関連性はあるのだろうか」

「もともと魔導師は女性に多い。更に女性には生理があり、経血を流す。それらの点から東洋医学では三者はすべて関連性があるといえるわ」

「つまり血が入ることは魔法の力が入ることに繋がると？」

「東洋医学を魔法学(dolmiyu)に結びつければ、そういう帰結も得られると思うわ」

「でも東洋医学はルティア人の編みだしたものだし、魔法学はアルバザード人の生み出したものだ。凧人として——丁信仰の観点ではどうなんだ？」

「丁信仰でも血には魔力が宿るとされているから矛盾はないわ。飛び降りた女性、あるいは下敷きになった少女の血が目に入ること、神楽君が何らかの能力を手に入れた可能性はゼロではないということになるわね」

「詳しいんだな、雨宮」

「ううん、ただウチが神社だけ」

「じゃあ彼女の血……というかあの事件が、僕の能力と関係するかもしれないっていうことだな」

ただ問題はそれをどうやって確かめるかだ。すると丁はこちらの悩みを察したように呟いた。

「数の刻印……」

「え……？」 ふっと顔を上げる。

「魔物を倒すと床に現れる数の刻印。もし彼女に忌みが憑いていた場合、自殺したことで忌みは宿り主を失って消滅する。今までのパターンから言えば数の刻印がしてあるんじゃないかしら」

「なるほど……」 感心したように頷く。「つまり事故現場に行ったら刻印があるか調べれば、

彼女が忌みに憑かれていたかが分かるってことだな」

「あるいは下敷きになった少女がね。まあ、こっちは確率が低いと思うけど。順当に考えれば女性が忌みに憑かれて自殺したはずだから」

ではその刻印を確認しにいこうという話になり、神楽たちは現場に向かうことにした。境内を掃き終えた丁は着替えもせず、巫女の格好のまま神社を出た。どうやらこれは彼女の私服でもあるようだ。神社の巫女に誇りを持っているのだろう。そうでなければもっと普通の女の子らしい服に着替えて出かけるはずだ。

「その服着ると学校にいるときよりずっと神社の娘らしいな」

「そう？」 裾を上げて自分をしげしげ見つめる。

「セーラー服で忌みとか言われたときには正直面食らったが、その格好で言われると説得力がある」

「ふふ、そうかもね」

ラゾーディン駅から蒔蘿線でコノーテ＝セレン駅に向かう。30分もしないうちに現場に着く。できればここには戻ってきたくなかった神楽としては複雑な心境だ。緊張のせいか、軽く冷や汗が出る。

現場がどこだったかはもちろん覚えているが、仮に忘れていたとしてもまったく問題がなかった。なぜなら現場には献花がなされていたからだ。

花を見つけた丁は「ここね……」と言って近付いていった。ニコロイのときもそうだったが、案外彼女は思い切りが強い。あっさりと近付いていく。

神楽が遠巻きに見ていると、丁は「あったよ」と言って手で呼び寄せてきた。小走りで近付くと、ちょうど女性が落下した部分に17という数が刻まれていた。

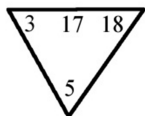
——やはりあの女性は忌みに憑かれて自殺を図ったのだ。

ぶるっと震える。今までの忌みはどうか対処できてきた。だが対処できなければこうして最悪死人が出ることもあるのだ。もし丁がいなかったら、昨日杏樹はどうなっていた？

丁は死者への弔いに手合わせをした(santen)。

「忌みが祓われた際に数の刻印ができることはどうやら確からしいようだ」

神楽はレイゼンを取り出すと、タッチパネルを使ってメモ帳に指で数を書き込んでいった。コノーテ＝メル通りのアルナ高には図書委員の 5。そこから北上した現在地でもあるコノーテ＝セレン通りには飛び降りの 17。その東のセイネルス＝セレン通りには杏樹の 18。逆に西のネブラ＝セレン通りには霞の 3。



「アルナ高、柊の家、杏樹の公民館でちょうど三角形を作るようだ」

「この地点は柊さんの家と妹さんの公民館という 2 頂点を作る辺の上にあるわけね」

「ということは柊の家とアルナ高の間、および公民館とアルナ高の間にもことと同じように刻印があるということになるな」何かしらの法則性が見え、鼻息を荒くする神楽。

「……まあこれの全貌が三角形だったらね」対照的に丁は自信なさげな様子だ。「こういうことは柊さんのほうが詳しいんじゃないかしら」

言われてみればそうだった。だが彼女に連絡したところで協力してくれるかどうかは怪しい。それでも一応電話をかけてみることにした。丁と違って彼女は何コールしても出なかった。2, 3 回電話をかけても出ない。相変わらず無視なのかと思ったころ、ようやく電話が通じた。

「柊か？」

「あら、こんにちは、南君」いつもどおりの無表情な口調だ……が、心なしか声が弾んでいるようにも聞こえる。

「悪いな。なかなか出なかったところを見るに、忙しかったのか？」

「いいえ。私のレイゼンが電話機能を果たすのは買ったとき以来だから、単に気付くのが遅れただけよ」

「そ、そうか」

やや気圧されながらも神楽は事情を説明した。すると霞はあつけなく「いいわよ。家のすぐ近くだし、今から歩いて行くわ」と了承した。

「すまん、助かる」

「ところで南君は……」ふいに戸惑うような声。「休日の女の子がすべき格好について、

どのように考えているのかしら」

「は？」素っ頓狂な声を上げる。「さあ……別に……なんでもいいんじゃないか」

「ならこの秋空の下、水着でもいいということになるわね」不機嫌そうな声。

「いや……失言だった。普段着でいいんじゃないか。でも多少奇抜な格好でも問題ないと思うぞ」霞の性格を考えると「普通」が常人離れしていることは容易に想像が付いたため、補足しておく。「実際雨宮も巫女姿だし」

「雨宮さん……？」急に声のトーンが落ちる。冷たい感じがした。「今一人じゃないの？」

「ああ、雨宮と一緒にだ」

「……15分程度で現地に行くわ」という声があった瞬間、一方的に電話が切られた。

「なんだよ……。なんか不機嫌じゃなかったか？ まあいつものことか」

霞を待つ間、ふたりは三角形を見ながらああでもないこうでもない議論していた。やがて「おまたせ」と言って現れたのはセーラー服姿の霞だった。

「あれ？ 結局制服にしたのか。てゆうかお前にとっての普段着ってそれかよ」

一瞬丁に目をやってから神楽を睨む。「別に貴方には関係ないでしょう」恐ろしく冷ややかな声だった。

「第一、南君だって制服じゃないの」

「僕は午前中図書委員の用事があったからな」

「……それで、私に見せたいものって？」

レイゼンに書きこまれた三角形を見せる。霞はじっとそれを見ると、すぐに「はあ……」とため息をついた。

「残念な頭の南君にはこれが三角形に見えたのね」

「だって頂点が3つあるから……」おじけづくが、態勢を立て直す。「じゃあお前はこれがなんだか分かるのかよ」

霞はスッとレイゼンを突き出すと、一番上の辺をなぞる。「この辺の3つの数の和は？」

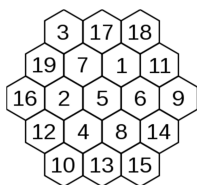
「3と17と18で……38かな」

「南君にはこれが三角形に見えたのかもしれないけど、私には大きな六角形に見えるわ」

「六角形だって？」

「この5という数は六角形の中心」

そう言うと霞はさらさらと数を書き入れていった。ひとつひとつの数を六角形の中に入れて書く。それらを19個組み合わせてひとつの大きな六角形にした。



「これは……」

「魔六角陣——ペンシルヴァニアよ」

「ペンシルヴァニア？」聞いたことのない名前だった。

「この横・右斜め・左斜めの隣り合った一列の数の和、いくつになる？」

「え……？ 右斜めは3, 19, 16で38。左斜めは18, 11, 9で38。あ……全部38になってる」

「そう。ペンシルヴァニアの特徴は、横・右斜め・左斜めの隣り合った一列の数の和が常に38になるというところよ」

「なるほど……これは六角形だったのか。だが終、お前なんでこれだけの少ない条件でこれがそのペンシルヴァニアってやつだって気付いたんだ？」

「ペンシルヴァニアは大きさが1と3のものしか存在しない。1の場合、中央に1と書いてそれでおしまい。となると3のほうしか残ってない。一辺につき3つの数がある六角形のことね。その一辺の和が38になればペンシルヴァニアを疑うのは当然よ」

「なぜ38だとペンシルヴァニアになるんだ？ 一辺あたり3つの数が来る大きさ3の六角形ならなんでもいいんじゃないか？」

「大きさ3のペンシルヴァニアはたったひとつしか存在しないのよ。鏡像と対称を除けばね。その上、南君の出してきた数は上辺が3, 17, 18だった。この時点で鏡像も対称もなくなり、ただの一通りに限定される」

「なる……ほど」よく分からないが頷いておく。

「しかも南君が三角形の頂点のひとつと勘違いした5という数だけど、これはペンシルヴァニアの中央よ。鏡像でも対称でもペンシルヴァニアの中央は必ず5になる。それもあってすぐに気付いたの」

「凄いな……流石理系特進のレンス・リーファ。数学ガールと呼ばれるだけのことはある。
恐ろしく頭の回転が早いな」

「頭の回転じゃないわ。単に『一辺が3つの数でできていて、その和が38』、『数の組み合わせが3, 17, 18』、『中央が5』という点からペンシルヴァニアを引き出しただけ。どっちかっていうと知識の問題よ」

「それでも尊敬に値するよ」

素直に褒めると霞は表情をややほころばせた。

「詳しいんだな、佟」

「ううん、ただ私が優秀なだけ」

「——お前に雨宮の爪の垢を煎じて飲ませてやりたいよ！」

褒めたことを即座に後悔した神楽であった。

「ところで」沈黙を保っていた丁が口を開く。「ペンシルヴァニアがどう忌みと関連しているのかしら……」

「ペンシルヴァニアは」丁から微妙に視線を外しながら話した。「もともと古代スカルディア王国にあったバルマーユという都市に作られた街の名よ。アルバザードから見てだいたい東南の地域ね」

「街の名、か」

「そもそもペンシルというのが小さな邑のことなんだけど、それを19個集めて六角形にしたものがこのペンシルヴァニアという街なの。都市といってもいい大きさね」それからチラと丁を見る。が、あくまで声は神楽に投げかける。「魔法の力を回復するためのアレット(alet)という泉は知ってるわね？」

「ああ」

「その泉を各ペンシルに決められた個数置いていく。このペンシルヴァニアの表通りにね。例えば北西の隅には3個というように」

「なんのために？」

「ペンシルヴァニアはもともと防衛都市だったの。戦闘で傷ついた前線の兵士が魔法の力を回復する際、どの前線から退去しても常に同じだけの回復量を保てるよう、横・右斜め・

左斜めどの辺を通っても通る泉の数が同じようにしたの」

ペンシルヴァニアの外周は 12 個の六角形から成る。この外側に前線基地を置けば、12 方位あらゆる方向からの攻撃に対処できる。傷ついた兵士は横・右斜め・左斜めを真っ直ぐに通って回復の泉に入る。どこからスタートしようと泉の数は 38 で固定されているから、泉を無駄遣いすることなく、回復量も常に一定に保てる。そして回復ルートを通ったのち、反対側の前線基地に移動することができる。つまり前線を退いて回復してすぐまた別の前線に出れるという仕組みだ。まったくもって無駄のない戦術だ。

「恐ろしく合理的だな……」あまりの巧さに感心して、口が半開きになる。「そのスカルディア国のバルマーユ人ってのは頭が良かったんだな」

霞は渋い顔をする。「あいにく、それを考案したのは人類ではないわ」その声に丁は耳をピクッと動かす。霞は一拍置いて静かに唇を動かした。

「——ペンシルヴァニアを考案したのは数の悪魔パン」

沈黙が訪れた。

「悪魔……？」

それは魔物より高位な存在。この世にわずか数十しかいない強大な力を持った存在。一部は約 400 年前に滅ぼされ、一部は封印された。

「パンってアシェットに滅ぼされたんじゃないかったのか？」

「私も神話は詳しくないのだけど、数の悪魔だから多少数学つながりで聞き及んでいるわ。パンはアシェットのメルとの知恵比べに敗北し、ここアルナに封印されたそうよ」

神楽は唾を呑む。

「アルナの……どこに？」

すると霞は微かに指を震わせながらレイゼンを指さした。

「このペンシルヴァニアの中心部。5 が刻印された『アルナ高』に……」

「ウチの学校が知恵比べの舞台だった……。そこがペンシルヴァニアの中心地」

嫌な予感がするとともに神楽の頭から血の気が引く。霞は神楽の不安を具現化するように言葉を紡ぐ。

「この一連の忌み騒動の裏で糸を引いているのはパンなんじゃないかしら」

黙りこむ一同。神楽は重い口を開く。

「なんのために」

霞は数瞬沈黙してから意を決したように答えた。

「——封印を破るために。恐らくこの刻印にはパンの魔力が籠められている」微かに彼女の声は震えていた。「パンは封印の中から自分の魔力を分散して外に放った——忌みに乗せてね」

「じゃあもしペンシルヴァニアが完成したら……」

「パンは封印を破るだけの魔力を獲得し、メルの封印を破って外に出てくる。悪魔の復活ね。私たちは知らない間に片棒を担がされていたんじゃないかしら」

悪魔が復活する？ 400年の沈黙を破って？ それがどれだけ大事件か、神楽には計り知れなかった。

「そんなこと……ありえるのか？」

黙っていた丁がようやく口を開く。「本来忌みというのはそんなに頻繁に起こるものではないの。ここのところ神楽君の身の回り、ひいてはこの街にはあまりに多くの忌みが起こりすぎている。だけど、誰かが裏で暗躍し、忌みを意図的に引き起こしているのだとしたら、この一連の騒動も理解できるわ」

神楽は眼下の17という数字に目をやる。

「ペンシルヴァニアってどういう順序で描かれていったんだろうか。北側から順に南側へか？」

「南君、少しは考えなさいな。北から順にだったらアルナ高の5か妹さんの18より先なはずがないでしょう」

そうかと頷いた。霞は唇に指を這わせて熟考する。

「私が思うに、悪魔パンは数字順に忌みを発生させているんじゃないかしら」

そう言われて神楽は時系列を思い出してみた。

「終の親父さんが3、図書委員の男子が5、飛び降りが17、杏樹が18……。間がずいぶん空いているが、この順番に忌みが感染したってことか？」

「恐らく。……もっとも、私には飛び降りとやらか何のことかさっぱり分からないけど」

「あすまん。妹の話は昨日の夜電話でしたとおりだが、実はこの場所で5日前に飛び降りがあったんだよ」

レイゼンに事件の記事を表示させると、霞に見せる。最初は横目でチラと見ていただけだったが、やがて目を見開いて画面に顔を近付けていった。

「どうした、終？」

「この飛び降りた病院勤務の女性。アリカ=アンジェっていうの？」

「……らしいな。忌みに憑かれて落とされたのか自分の意思で落ちたのか、それはハッキリしないけど」

霞は数秒間呆けたままつたっていたが、やがて表情を取り戻した。

「彼女が落ちたのは自責の念によるものよ。忌みに突き落とされたわけじゃない」

「どうして分かるんだ？」

彼女は消え入るような声で静かに呟いた。

「お母さんを死なせてしまった看護師の話をしたでしょう？ ……それが彼女よ」

それから神楽と丁はしばらく何も言えず、ただ黙って17の刻印を見ていた。霞は髪を掻き上げると「気にしなくていいわ」と言い、「整理しましょう」と続けた。

「まずお父さんが取り憑かれたのはお母さんが死んだときだから、1ヶ月前のことよ。忌みの番号は3。パンの計画が始まってまもなくということになるわね」

「その次はアルナ高の図書委員の5か。これはお父さんの後に憑かれたってことだな」

「でも神楽君、実際彼が暴発したのは4日前のことだから、忌みに憑かれてからだいぶ日があるわ」

「そうだな。なのでどうやらこの番号は忌みが発生した順番でなく、忌みに憑かれた順番っていう予想で問題ないようだ」

「そこから私たちの知らない間にこの街の様々な人間が忌みに感染した」順を追って説明する霞。「次に私たちが把握している番号はだいぶ飛んで、飛び降りた看護師の17。どうやら彼女は自責の念に苛まれ続けて弱っていったところを忌みに憑かれたようね。そして憑かれてまもなく飛び降りた」

「それが5日前なのね。一方、神楽君の妹さんが憑かれたのは……」

「4日前だ。僕が学校から帰ってきたら脚に霧が憑いていた」

「看護師と神楽君の妹さんが憑かれた時刻はわりと近いよね。そしてふたりの番号は17と18だから、やっぱりこの数字は憑かれた順番ってことでいいと思う」

三人は確認しあって頷いた。そこで神楽はあることに気付く。

「なあ終。ペンシルヴァニアって何番が最後の数だっけ？」

「19よ」即答する。「——つまり、取り憑かれるのはあと一人ということね」

「えっ……」焦る神楽。「それって言い換えればあと一人でペンシルヴァニアは完成し、悪魔パンが復活するってことじゃないか」

「そうなるわね」あくまで冷静な霞。よっぽどこいつのほうが悪魔然としている。

「じゃあこんなところにいる場合じゃないわね」霞が描いたペンシルヴァニアに目を落とす。19が来るのはここからほど近くにあるフェンゼル＝セレンだ。「早くここに行って19が存在するか確認しなきゃ。まだ19が刻まれていないなら、神楽君の能力を使って影を持った人がこの場所に入らないよう説得する必要があるわ」

「説得？」

「うん。パンは刻印を特定の位置に置くために忌みを用いている。逆にいえば影に憑かれた人物であっても所定の場所に入らない限りは忌みが具現化することはない。妹さんはあの公民館に行かなければヴェミに襲われずに済んだんじゃないかしら」

「じゃああの図書委員の男子は？」

「図書委員会は毎月1回でしょう。西5号館の302に行く人物なら誰でもいい。その中から一番気が弱っていた人間をパンは狙ったんじゃないかしら」

「なるほど。じゃあ彼はパンの計画通り302に行き、暴発したというわけか」2,3度頷く。

「ならとりあえずフェンゼル＝セレンに行くのは賛成だ」

そのまま徒歩でフェンゼル＝セレンまで行く。大人しく従っていた霞だったが、街区に入った辺りでぼつりと洩らした。

「フェンゼル＝セレンが封印を解く最後の場所だとしても、この一帯は広いわよ。すべての屋外や屋内の地面を見てまわるのは不可能だわ。19なんて小さな刻印をこの広い街で探

そうなんて現実的じゃないんじゃないかしら」

「それは……」頭を搔く。「そうなんだが……」かといって他にやりようがない。

「確かに19を探すのは絶望的だし、そもそも19があつたらもうパンが復活していることになるからどうにもならないよね。影を持った人を探すほうが現実的だと思う。どう、神楽君。影の憑いた人は見える？」

「いや、それなんだが通行人が多すぎるし、フェンゼル＝セレンの一角を一望できる場所から観察するんでもなければ難しいと思う」

丁はあたりのビルをきょろきょろ見回すと、「あその高いビルの屋上はどうか」と指をさした。

「それはいいけど、通行人に影が憑いているかなんて望遠鏡でもなきや見れないぜ」

「あるわよ」霞はすっと制服のポケットからオペラグラスを取り出した。

「ハサミといい包帯といい、お前のポケットはどうなってるんだよ!？」

「用意が良いと言ってちょうだい」

「お前はドラえもん(malisdén)かっ!？」

ビルの屋上へこっそり忍び込んだ3人は、青い空の下で道行く人々を見下ろしていた。神楽はオペラグラスを使い、フェンゼル＝セレン一帯の人々を観察していく。このビルから見える部分がフェンゼル＝セレンの全てではないし、建物の影に隠れた部分までは見えない。ましてそもそも影を持った人物が今日この地域を通るかも分からない。

「なあ」目が疲れてきた神楽はうんざりした声を上げる。「いっそのこと召喚省に通報しないか」

召喚省はかつて魔法などといった超常現象を監督していた省庁だ。現在でも一部の人間は魔法が使えると噂されている。

「神楽君にしか忌みを見ることができないのに？」

「う……」

しかし丁の反論にあえなく潰されてしまう。ため息をついて霞を見ると、彼女は青い顔で肘をさすっている。

「柎、寒いのか？ 制服だけじゃ流石にもう厳しい季節だろ。ましてビルの上じゃ風も強

いし」

「大丈夫よ。それに寒い格好ということにかけては雨宮さんのほうが辛いはずよ」

確かに巫女の上着と袴だけでは寒かろう。

だが霞の顔色は二次関数的に悪くなっていく。腕をさすり、脚が震え、歯が震えだす。

「おい、ちょっと大丈夫か!? インフルエンザとかにかかっているんじゃないのか?」

「ヘンね……突然寒気が。風邪の兆候なんてなかったのに」

神楽は晩秋だということにからっ風に晒されている生足に目を落とす。そんな格好しているからだと思ったとき、ふと妙なことに気付いた。

影が……霞の影が、なんだろう……短いのだ。

太陽の角度の問題? いや、時間はもう夕方だ。むしろ影が伸びる時刻。

神楽は自分と丁の影も見比べる。こちらは斜めから差し込む夕日に合わせて長く伸びている。一方霞の影はというと……。

徐々に、徐々に、短くなっていた。

短いところの話ではなかった。

霞が体を震わせるにつれ、影はどんどん短くなっていった。

「柊……お前の影……短くなってないか?」

掠れた声で呟く。霞と丁は影に目をやると、ハツとして口を開けた。

「なにこれ……」 呆然と呟く丁。

「雨宮、お前にも見えるんだな?」

「見えるわ……影が……短くなっていった」

そして影が短くなるとともに霞の身体は暗くなっていった。

「柊の身体が……」

「影に……飲まれている?」

そのときだった。ついに寒さに耐えかねた霞が漆を折り、地面にしゃがみこんだ。そのまま肩を抱え、「うう……」と呻く。

「柊!」 思わず肩を掴んで揺らす。

「さ……寒い」

それが霞の最後の言葉だった。

影はついになくなり、霞の身体は完全に黒の闇と化した。神楽は彼女の肩を抱いたまま
呟いた。

「忌みだ……」

「そんな……」信じられないという顔をする丁。

「なんてこった。最後の一人は柊だったんだ」

首をぶんぶん振る。

「うかつだった。忌みが憑いてるのは柊の親父さんだけだと思ってた。

でもそうじゃなかった。忌みは二匹いた。

——柊にも憑いていたんだ」

考えてみれば当然のことだった。そう——

「母親をなくして気が弱っていたのはなにも親父さんだけじゃなかったんだ。

当たり前のことじゃないか。柊自身、こいつはそんな素振り全然見せないけど、心の中
では思い切り傷ついていたんだ」丁を真正面から見据える。「——絶望していたんだ！」

「そんな……。でも神楽君、彼女に影なんて見えなかったんでしょう!？」

「見えなかった。柊に忌みなんか憑いてなかった」

そもそも彼女は19番の忌みを抱えているはず。もうそれしか番号が残っていないからだ。
となると杏樹よりも後に憑いたとしか考えられない。

「妹に忌みが憑いたのは4日前。そこから今日までの間に柊に忌みが憑いた」

いつ? どうやって? そもそもなぜ自分に影が見えなかった?

「考えられるとしたら親父さんの忌みを祓ったときだ……。父親の心配で気が張っていた
が問題が解決して気が緩み、母の死を悲しむ余裕が出た。そこを忌みにつけこまれたんじ
ゃないか」

だとしてもなぜ自分の目に影が映らなかったのだろう。

「柊さんの胸の霏が影だったって可能性は?」

「ない。あれはお前から習ったとおり、親父さんの忌みの影響によるものだ。なぜなら親
父さんの忌みが消えると同時になくなったからだ。それ以外あいつの身体に影なんか——」

その瞬間、神楽はハツとして口を押さえた。冷や汗が全身から吹き出る。

「——あった。唯一僕に気付かれずに感染する方法が」

真っ暗な闇と化した霞の足元に目をやる。

「なぜ僕らはさっきの現象を見てすぐに気付かなかったんだ……。決まってる。影が憑いてるのに僕が気付かない唯一の場所」

屋上の床を指さす。本来そこにあるべき霞の影を目掛けて。

「——柎自身の影だ」

丁が目を満月のように見開く。

「影は文字通り柎の影に憑いていたんだ。影が影に憑いていた。だから僕は気付かなかった。気付くわけがなかったんだ！」

思わず地面をダンと踏みつける。丁はなんとか自分を落ち着かせ、状況を整理する。

「だとしたら、彼女に憑いている忌みの正体は明白になるわ」

「コレはいったいなんなんだ、雨宮？」

「彼女に憑いているのは眼影のインヴェム。第一天の魔族で、闇の炎天よ」

ins (目) と vemo (影) で invem。皮肉なことに最後の魔物が一番目の魔族だった。

「インヴェムは人の影を渡り歩く闇の魔物。影を乗っ取られた人は、突如後ろから自分の影に襲われる。まさにこの状況ね」

「倒すにはどうすればいい？」

「影に食われたことを見抜くには、影に眼があるかどうかチェックする。インヴェムは人の影を乗っ取ると、ギョロっと目を開き、人を襲う機会を伺う。インヴェムが襲いかかる前に剣で地面に串刺しにし、身動き取れない状態にしてから、光の魔法で照射すると簡単に倒せる」

教科書を読み上げるような丁の言葉。

「問題だな。まず光の魔法なんか使えない。その上インヴェムは既に影の形をしていない。影自体が本体である柎の身体を乗っ取ってしまったからだ」

丁は「ん……」と言って苦い顔をする。

「まさか……」ぎよっとする神楽。丁は申し訳なさそうに言う。

「ごめんなさい……。身体を乗っ取られてしまった以上、魔法を使って力づくでインヴェムを祓うしかないわ」

「魔法……」

「例えば光の魔法を彼女に照射する方法。インヴェムは光を嫌うから、こうすれば彼女の身体から離れて影に戻る。その後は先ほど述べた倒し方で倒せる」

「だが僕らにそんなもの使えない。今から召喚省に通報して助けてもらえないか!？」

「まず話を信じてもらうのに時間がかかるし、到着するまでに彼女は闇に飲まれきってしまうわ」

「飲まれきったら……」声が乾く。「……柊はどうなるんだ？」

丁は黙って下を向いた。愕然とした。

「どうにか……できないのか。こいつは性格は悪いが、根は………根も腐ってるけど……それでもこないだ僕に見せた笑顔は本心だったと思う。助けたいんだ、雨宮！」

「私だって助けたいよ！」涙を浮かべる丁。「でも、魔法のアイテムもないし、魔法使いもないし、私は巫女だけどただの神社の娘ってだけで魔力なんてないし……」

「くっ……」拳に力が入る。何も出来ないっていうのか。「こんなことなら柊をこんなところに連れてくるんじゃなかった——！」

ますます闇に飲まれて暗くなっていく霞を神楽はぎゅっと抱きしめた。その身体は熱を失っており、氷のように冷たくなっていた。

「なに本物の雪の華になってんだよ、柊！ いつもみたいに憎まれ口聞けよ！」

神楽が力を籠めて霞を抱くと、胸の部分がぼうっと光って明るくなった。

「ん……？」

なんだこれ？

今何か胸が光ったような……。

霞のではない。自分の胸だ。——胸ポケット？

不可解な顔で自分のポケットを漁る。するとそこには赤い袋に入った「交通安全」と書かれたお守りがあった。

「これは……」

あの事故の日、少女が落としたものだ。サラリーマン風の男に声をかけられ、面倒事に巻き込まれるのはごめんとばかりに逃げた際、胸のポケットに仕舞っておいたものだ。

お守りは淡い光を放っていた。恐る恐る霞に近付けると、闇がぶるっと震えだした。

「神楽君……それってもしかして……符術 (fredir)で使う絵馬 (arfa)……」

「魔法の符……なのか？」

固唾を飲んで頷く丁。「ゆっくり彼女の胸に当ててみて」

言われたとおりにする。

「柀、すまん」

セーラー服の中に手を入れると、下着を手でまさぐってお守りを冷え切った胸に直接当てた。

するとその瞬間、金属音のような高い周波数の音がして、影が胸元に集まってきた。これがインヴェムの悲鳴なのだろう。その様子はまるで掃除機で黒い灰を吸うかのようだった。

闇が褪せられるとともに霞の身体が明るくなり、熱が戻ってくる。すべての影がお守りに吸い込まれると、霞はゆっくりと目を開ける。

「……」

「柀、大丈夫か？」

霞は神楽の真剣な表情をじっと見据え、ぼつりと呟いた。

「私の胸に手を突っ込んでいる南君こそ、頭大丈夫かしら？」

相変わらずだった。

「ははっ」胸元からお守りを引き出す。「またその憎まれ口が聞けてよかったよ。こいつのおかげだな」

赤い袋を開け、お守りの中を取り出す。中に入っていたのは黒ずんだ板だった。丁が覗き込んでくる。

「それ、元は木の色をした板だったんだと思う。お守りの所有者を守るよう、魔法がかけられていたようね。インヴェムの闇を吸い取って黒くなったんだわ」

「所有者を守る魔法……？」

首を捻った。ならどうして本来の持ち主だった女の子は飛び降りの下敷きに遭って亡くなったんだ。そしてふと気付く。そうか、そのお守りを落としたからこそ彼女は一時的にご利益を失っていたんだ。あのとき自分がお守りを拾わなかったら、女は自分の頭上に降ってきたかもしれない。このお守りは所有者を守ってくれていたのだ。そして最後は霞が所有者となり、その忌みを祓って役目を終えたというわけだ。

「神楽君！」丁が口を抑えて小さな悲鳴を上げる。「床に刻印が！」

そこには19という数が刻まれていた。予想通りの数だ。

「まずいな……」瞬時に青ざめる。「ペンシルヴァニアが完成してしまった。これで悪魔パンが復活してしまう」

霞はまだめまいが残るのか、床にへたり込んだまま辺りを見回す。「でも、特に悪魔が復活したという感じはしないわね。私の目には見えないというだけのことかしら」

「悪魔は忌みと違って可視だから、復活していれば神楽君以外にも見ることができると思う」

「だとしたら復活は別の場所で行われるということか」

別の場所……。

「ねえ南君、順当に考えてパンが復活するのだとしたら、封印されていたアルナ高ではないかしら」

確かにそうだ。ここはペンシルヴァニアの完成地でしかない。

「行ってみるか？」

神楽の言葉に二人はゆっくり頷く。

「正直僕は行きたくない。面倒事はごめんだ。でも自分たちが封印を解いてしまったのだとしたら、流石に責任を感じる。

みんな、レイゼンを出してくれ。移動しながらできることはしておこう。

雨宮は召喚省に通告してくれ。パンが復活した、あるいはするかもしれないと。

終はパンについて調べてくれ。封印された経緯くらいウィキペディア(felpe)に載ってると思う」

電車でアルナ高まで移動する傍らレイゼンを使って通告や調査をした。アルナ高に着いたころ、丁が疲れた顔で首を振った。

「ダメだわ。代表の番号に電話したけど、出るのはただの窓口。事情を言ったけど『一般の方ですか？』って聞かれて上についでもらえない」

子供の悪戯だと思われるようだ。「やっぱりな」と舌打ちをした。

「こうなったらレンス・リーファのツテを使うしかないかしら」

「あるのか？」

「OB の先輩にアルシェ＝アルテームスさんっていう男性がいるんだけど、魔法研究所に所属しているから、事情を言えば召喚省に口を利いてくれるかもしれない」

「じゃあその人に連絡を。柊はパンについて何か分かったか？」

北門をくぐる。

「約400年前にアセットのメルと知恵比べをして敗れ、封印されたとあるわね。こままでは私の記憶通り」

「封印された場所は？」

「現在の西5号館よ」

「5の刻印があった場所だな。雨宮、アルシェさんという人に連絡は取れそうか？」

石畳を歩き、西5号館へと向かう。

「私は直接話したことがないの。挨拶程度。ひとつ上の先輩たちと仲が良い人だから。柊さんは？」

丁は「あるわけないか」という顔を隠せず霞を見る。ご多分にもれず「残念ながら私は人付き合いのよいほうではないから……」と答えた。

「一個上の先輩か」

「レイン＝ユティア先輩とか、アリア＝イネアート先輩とか、神楽君聞いたことある？」

「名前くらいは。有名だよな。特に前者は一度もレンス・リーファから外れたことがないっていう生粋の化物だろ。入学式の首席の挨拶を恥ずかしいからっていうだけの理由で辞退したっていう伝説の持ち主だろ？」

西5号館に入り、階段を上る。

「神楽君も人付き合いのよいほうじゃないけど、そのわりに知ってるんだね」

「レンス・リーファは有名だからな。他学年でも多少は。で、連絡取れるのか？」

「レイン先輩もあまり人付き合いがよいほうじゃないから連絡先までは……」

するとレイゼンを見ながら歩いていた霞が「レンス・リーファの連絡網に書いてあるんじゃないかしら」と呟いた。そのままポチポチとタッチパネルをいじると、「……これ」と言って丁に見せる。

「ああ、そうか」と言って丁は表示された連絡網の番号をレイゼンのメモ帳に書き写す。その番号を電話帳に登録すると、「じゃあかけるね」と言う。

「ちょっと待った」302号室に到着する。「先に中を見ておこう。ここまで来たんだから現状把握したのちに状況を伝えたほうが分かりやすいだろう」

「そうだね」と言って丁はレイゼンをポケットに仕舞った。

302号室は冷え切っていた。電気を点ける。

中は以前と変わっていないかった。ドアを開けたら悪魔がいたということもない。床に書いてある5という数もそのままだ。

「パンは既に復活した後なんだろうか……」。

「終、パンはこの教室で封印されたのか？」

「ウィキペディアによると、彼は『メルのパネル』に封印されたそうよ」

「それはどこにある？」

「グーグル(yuim)によると、メルのパネルは現在の西5号館にあったそうだね。そもそもメルのパネルというのはアッシュのセレンがメルとのデートの際に待ち合わせに使った場所の総称で、アルバザードの各地にあるらしいわ」

「あれ？」首を傾げる。「セレンって第1使徒のリディアと子供を残してなかったっけ？メルとデートってどういうことだ」

「だから……」霞はチラと丁を見る。「……そういうことでしょう」冷ややかな声だ。

「ああ……そういうことなのか」

「ここにあるメルのパネルは西5号館ができたとき、支柱の一本として利用されたらしいわ。悪魔パンを封印していたオブジェクトだから破壊するわけにはいかなかったということね」

丁は首を傾げる。「元が待ち合わせ場所だったらこんな3階の教室を使うってことは考えにくいよね？」

「恐らく」霞はしゃがんで床に手をついた。「メルのパネルはこの刻印の直下」

「この直下……には何がある？」

ドアをバンと開けて廊下に出る。館内の見取り図を探して各階の構造を見比べる。そして302号室の真下が何であるか気付いた神楽は目を丸くした。

「14組……」なぜパンは自分を選んだか。なぜ忌みは自分の周りに集中していたのか。その謎が解けた瞬間だった。「……僕のクラスじゃないか」

14組のドアを開けると中は既に無人で、ひんやりとした空気が漂っていた。電気を点けると、神楽は習慣でなんとなく自分の席に着く。

「特に変わった様子はないな」神楽は眉をひそめる。「しかしまさか自分の教室に悪魔が封印されているなんて夢にも思わなかったよ」

丁も「そうね」と首肯する。

パンの封印は既に解けてしまったのだろうか。この教室のどの柱がメルの柱なのだろうか。

「南君には何も見えないの？」

「ああ。影も何も見えない」

霞も適当な席に着く。

「そうだ、雨宮。レイン先輩に電話」

「あ、そうだね」丁はレイゼンを取り出す。そのとき霞がふと思い出したように呟いた。

「それにしてもパンはタイミングよくインヴェムを発動させたものね」

「え？」丁が指を止めて霞を見やる。「タイミングって？」

霞は正面を見据えたまま静かに呟く。「誰もいないビルの屋上に入ってから私は忌みに襲われた。フェンゼル=セレンにはとっくに入っていたのにね。まるで人目のあるところで発症したらパンにとって不都合だったかのようなタイミングよね」

「どういうことだ、柊？」

「パンは封印を出たがっている。でも事が大きくなれば召喚省が動いて計画を阻止されるかもしれない。だから人目を避けて発症させた。——私にはそういう風に見えたのだけだ」

「人目を避けた……意図的に」

「お父さんのときもそうだったわ。家の中という密室で密かに発症した。南君の妹さんのときも舞台上で悲鳴を上げたものの、症状がひどくなったのは楽屋ででしょう？ 加えて図書委員の男子も302号室という狭い部屋で発作を起こしている。忌みが本格的に発症するのはどれも大勢の人の前でないところで、というのが共通点のように見える」

それについては特に反論するところがない。

「飛び降りた看護師は自殺として処理され、私たちが知らない番号の忌みについても大きなニュースになっていない」

「確かにそうだな。大事になっていけば自然とニュースになるもんな。看護師の件はニュースにはなったものの、小さな記事だったし、そもそも事故や自殺として処理された」

「……思うに」霞は指を顎に当てる。「パンは目立ちたくなかったんじゃないかしら」

「召喚省に目を付けられないように、か？」

霞が頷いた瞬間、丁が「それは違うと思う」と率直に述べた。霞が反論をする前に丁はレイゼンを差し出してくる。丁の机に寄る二人。そこにはティーテル＝セレン通りで起きた通り魔殺人と、現場の地面に残された謎の11という数字について書かれてあった。

「こんな事件が相次げば、召喚省もおかしいと思うんじゃないかしら」

「でも実際に召喚省は動いていない。パンは極力なりを潜めているように感じられる」

女の子たちが論戦を始めようとしたとき、神楽はふと気付いて間に割って入った。

「なあ、僕にはお前たち両方が正しいことを言っているように思えるんだが」

「どうということ？」と二人が顔を向けてくる。

「パンは……なんというか、僕が関与した事件については少なくともなるべく目立たないように工作していた気がする。それ以外の事件については事件の成り行きに任せているように感じられる」

「……確かに分析するかぎりはそうね」霞は不思議そうな顔をして考えこむ。しばし逡巡した後、すっと目を細める。

そのままじっと神楽を見つめたかと思うと、今度は無視するように後ろ側に回り込んだ。

「ねえ……南君はどうして南君って言うんだっけ？」

「はあ？ ああ、僕の trikol 姓の語源か。だから前にも話したとおり、ルティア語の triko（背中）が由来なんだってば。それと柊、いい加減南君っていうの止めてくれよ」

「ふむ……」口元に手を置く。「雨宮さん。もしかして忌みや悪魔といった怪奇現象は、案外私たちが思っている以上に言葉を尊重するものなのかもしれないわね」

「そうね。言葉は魔法、魔法は言葉だから。言葉には魔力が宿っているのよ」

小さく頷くと、神楽を見直す。

「ねえ南君」

「はい、もう南でいいです」

「貴方、忌みが見えるのよね？」

「え？ ああ……不本意ながらな」

「自分が感染している可能性については考えなかった？」

「考えたに決まってるだろ。だけど自分には影が憑いていなかったんだよ」

「どうやって確認したの？」

「どうやっても何も、見りゃ分かるじゃないか」

「顔に憑いていたらどう確認するの？」

呆れたように神楽は手を振る。

「飛び降りがあった日に鏡を見ている。その後も何度も鏡を見ている」

霞は静かに「南君」と呟いた。

「南君。背中が語源の南君。

——貴方は鏡を使ったら自分の背中も見えるの？」

え……？

霞はゆっくりポケットからコンパクトを取り出した。

「雨宮さん、貴方も女子なら鏡くらい持っているでしょう。一枚貸してくだらない？」

言われるままにコンパクトを渡す丁。霞はしかし首を振ると、「それは南君に」と言う。

「なあ……終」事情が読めてきた神楽の声が震える。しかし霞は彼の言葉を無視して続ける。

「南君、少し横にずらして鏡を顔の前に置いて」

神楽は言われるままにした。震える指で。

すると服の下で冷や汗をびっしょりかいている自分の背中が、霞の持った合わせ鏡の向こうに映った。

そこには背中があった。

——黒い影とともに。

全身が総毛立った。

霞の言葉が脳内で再生される。

悪魔パンは神楽がいるところではできるだけ事件を目立たないように工作していたのではないか。

ではなぜそれができたのか？

答えは簡単。見ていたからだ——神楽と一緒に。いつも一緒にいたからだ。自分の背中に寄り憑いて……。

言葉は魔法。

忌みは南神楽の triko に憑いていた。

視界に黒い影が入った瞬間、影が邪悪な笑いを発した気がした。

それと同時に影は煙のように立ち上り、教室の柱に吸い込まれるようになっていった。

「柎、雨宮……。アタリだ……。僕は影に憑かれていた。忌みに憑かれていた！

影は——悪魔パンの忌みはその柱に入ってしまった！」

神楽が柱を指さした瞬間、柱に亀裂が入り、バシユッと白い光が起こった。

閃光に目がやられ、思わずまぶたを閉じる。

どうにか目を開けると、そこには黒焦げの真っ黒な裸の悪魔がいた。

異様に身体が細く、肌はゴキブリのように黒光りしており、頭には尖った耳と2本のツノが生えていた。口は頬まで裂けており、鼻は細く曲がっている。目は切れ長で、つり上がっている。

「キキキ……」

嫌に高い笑い声が教室に響く。

「お前が悪魔……パン」

「南神楽とか言ったな」長い爪のついた細い指を向けてくる。「荷馬車の役目、ごくろう。なかなか憑り心地のいい背中だったぞ」

「……僕はまんまとお前の計画に乗せられていたってわけか」

「キキ……まあそう悔しがらな。人間風情が悪魔の智慧に勝とうなんていうのがそもそもおこがましいのさ」

「あら？」髪をふぁさつとなびかせる霞。「400年も眠っていると悪魔も寝ぼけるものなのかしら。メルとかいう人間の少女にしてやられたのはどこのどなた？」

こいつの毒舌は悪魔にも容赦ないのか……。

「メル＝ケートィア……」憎々しげに吐き捨てる。「あの小便臭い小娘め……。悪魔よりよほど悪魔然としていやがった」

「ご愁傷様」

「終霞とかいったな、小娘。最近の人間は歴史を忘れてしまったのか？メルは悪魔メルティアの娘だ。人間じゃないんだよ」

「だとしても、小娘風情に情けなく封印された事実は変わらないわね。カッコ笑い」

お前は2ちゃんねる(yumikl)の荒らしか。ああ言えばこう言うだな。

「ふん。それで、吾輩が400年眠っている間に少しは人類は進歩したのかね？街並みはずいぶん発展していたようだったが。数学ガールよ、よもやフェルマーの定理(dyuhaf)くらいは解けたんであろうな？」

「おかげさまで悪魔の智慧を借りることなく、数十年前にね」

「キキ……あんな簡単な問題を解くのに300年以上かかったというのか。愚かだなあ、人間どもは。まんまと吾輩を解放してしまうあたり、なお愚かだ」そして神楽に指を向ける。

「一番愚かなのはお前だかな。」

吾輩を最後まで封印していたのはあの忌々しいお守りだったんだよ。

本来はアリカとかいう看護師に飛び降りをさせ、お前にぶつかる気でいた。だが予定が狂い、あのお守りのせいでお前は守られた。だから急遽計画を変更し、お前の背中に憑り移ったのさ。

ところがそしたら今度もまたそのお守りのせいで吾輩の行動は制限された。仕方なしにお前の背中から事件が目立たぬよう、忌み発症のタイミングを操作していたのさ」

笑う悪魔。裂けた口から真っ赤な頬肉が覗く。

「だが結果オーライだ。お前らのおかげで召喚省に気付かれることなく復活することができた。感謝するぞ」

「——で、お前は どうするつもりだ。人類を滅ぼすつもりか？」

それを聞いたパンは目を丸くすると、「ギャーギャギャ」と金切り声で雄叫びをあげた。しかしそれは単なる笑い声だったようだ。ひとしきり抱腹絶倒を終えたパンは愉快そうに言葉を発した。

「人類を滅ぼす？ 吾輩は400年前でさえそんなこと露ほども思っていなかったぞ。吾輩が興味を持つのは数学のみだ。人間と悪魔の戦いなど知ったことか。ただ吾輩は人間を使って悪さをするのがたびたびあったからな。こちらからすればお遊びでしかなかったが、どうやらアシェットのリディアの機嫌を損ねたらしく、メルに討伐命令が下ったのさ」

「……お前、終と気が合いそうだな」

「そんな気がするわね」 飄々と受け流す霞。

「吾輩がお前たちを襲うとでも思ったのか？ 死にたいのならそうしてやってもいいが、吾輩は戦闘が趣味ではない。人間の子供を縊り殺すことくらい非戦闘タイプの吾輩でも容易だが、そもそもそんな血なまぐさいことには興味がないのだ。数学の知恵比べをして命を奪うことはあっても、な」

キキと笑う。

パンが指を窓に向けると、ガシャンとやって窓が割れた。そのままスーツと窓の外へ飛んでいく悪魔。

「今宵の事は他言無用だ、人間の子らよ。どうせ復活した吾輩を再び封印するのは今の腑抜けた召喚省には無理だし、封印を解いたお前らが責められるだけだ」

「く……」

確かに奴の言うとおりのことだ。神楽は拳に力を籠める。

「さらばだ、人間の子らよ」

「ちよっと待て、パン！ 最後にひとつ聞かせろ！ 僕の目はどうなる！？」

「キキ……せめてもの札に教えておいてやろう。忌みが見える能力は吾輩のものだ。お前は吾輩の力を通して影を見ていたにすぎん。もうお前は普通の人間だよ」

そう言うと悪魔は暗くなった夜の闇に向かって飛んでいった。

教室には静寂が戻った。

「一件落着……なのかな」

丁は後味悪そうに呟いた。神楽は頷くしかなかった。

「もう不用意に忌みが発生することもないだろう。僕の日も戻った。そういう意味では一件落着かもしれない」

「で——」霞が努めて冷静に振り向く。「召喚省に事の次第を通告するの？」

「それは……」

確かにパンの言うとおりに黙っておくほうが無難だろう。そもそも信じてくれるかすら分からない。二人も同じことを考えているような顔つきをしている。

結局今回の事件については三人の胸の内に仕舞っておくということで合意を得た。

ファーヴァの月クミールの日

「——付き合しましょう」

アルバザード国の催日である「本の日」。この日は電子書籍のDLが税金フリーになり、街の書店が値下げを行う。図書委員会は処分品となった書籍を安価で販売するというキャンペーンを行っていた。

曜日的に本来今日は休日なのだが、そんな事情もあって神楽たち図書委員は学校に来ていた。図書館を一時的に一般開放し、処分品を売りさばく。とはいえそんなに多くの人が訪れるわけではない。むしろ若干閑散としているといってもよい。

手持ち無沙汰でいた神楽は長椅子に座ってぼっと図書館の入り口を眺めていた。丁は委員長の仕事だとかで席を外している。店員役は委員がローテーションを組んでやっているが、今ちょうど神楽は霞と二人で店番をしていた。

中にいた客が外に出て、図書館に静けさが訪れる。誰もいなくなっちゃったなど思ったところで、霞がすっと横に腰掛けてきた。そして突如投げかけてきたのが冒頭の台詞だった。

「……何が？」拍子抜けした声で応じる。

霞は図書館の入り口を見たまま、もう一度告げた。

「付き合しましょう、私たち」

「……それはどういう意味においてだ？」

「恋人ないしそれに準ずる関係において、よ」まるで数式の説明をするかのような無色透明な告白。

「柊……」額を手で押さえる。「それは恋の告白と受け取っていいのか？」

「それ以外にどう受け止めることができるというのかしら？」

「だったらせめてそういう雰囲気と言えよな」と呆れ顔。「まったく、お前は本当に何を考えているのか分からないよ」

「分からないから一緒にいて楽しいでしょう？」

「お前といると刺激に飢えないし面白いことは認める。だがいくらなんでも急すぎるだろ。つい先日話すようになったばかりじゃないか」

「経過日数は数週間に満たないけれど、私たちは普通の人間にとっての数年分に相当する濃さのイベントを経験してきたわ。その中で私は南君に助けられ、貴方の人間性に触れてきた」霞は神楽に目を向ける。「先に言っておくけど、助けられたから感謝して付き合いあげると言っているわけではないのよ」

「そうなのか？」

珍しく殊勝だな。あくまで上から目線だが。

「そうよ」静かに頷く。「レンズ・リーファの雪の華は、初めて男の子に恋をしたらしいの。数学だけが恋人だったのだけれど」

霞の言い方は水のように透明で色が無いが、その言葉の内容は非常に色彩に富んでいた。

「選択権は貴方にあるわ」

「僕に？」

「そう。南君がうんと言えば南君に彼女ができる。言わなければ隣の席で本を売るだけの同級生ができる」

「一応僕の気持ちも考えてくれてるんだな。終にしては珍しい」

「ちなみに隣の席で本を売るだけの同級生は本を売る前に、喉に穴の開いた同級生の身体をどこかに隠さなければならないのだけれど」

「それ、断ったら僕は死ぬってシナリオだろ！」

選択肢などなかった。流石悪魔パンに毒舌をかますだけのことはある。

「南君もヘンな女に目を付けられたものね。おかわいそうに」くすつと笑う。

「自分で言うか。……ったく、お前はいつもそうだな。感情が見えるようで見えない。どこまでが毒舌でどこまでが本音かも分からない」

「あら」ちょっと驚いた顔をする。「すっかりそういう女が好きだとばかり」

「なわけないだろうが！」

「ともあれ、断ったら死ぬ件については正鵠を射ているわね」

「あのなあ……」

「確かに南君はそういう女が好きじゃない。でも——」ふつと笑う。見透かしたように。

「——嫌いじゃないんでしょう？」

「うっ……」と呻いた後、「……否定はしない」と呟いた。

「なら答えは出ているわね」

「でもいいのか？ お父さんに『家を出ていかない』って言ってたじゃないか」

「お父さんは大切よ。裏切ったりはしない」霞は無表情のままくすくすと笑った。ある意味悪魔より不気味だった。「南君たら、そんな未来のこと考えてたのね」

「だって、付き合うっていったらいずれはそういう問題が出てくるだろう」

「真面目なのね、南君は」ふっと笑う。「そうね、養子に來ればいいんじゃないかしら」

「……それは将来考えることにするよ。てゆうか、付き合っても僕は南君のままなのか？」

霞は不敵な笑みを浮かべて肯った。

「背中に影がついてなくても、ね」

「勝手にしろ」

「じゃあ……」すつと白い右手を差し出す。「この手を取る、南君？」

「僕といたってお前の毒舌のツッコミ役くらいしかしてやれないぞ」

「馬鹿ね……」霞は自ら神楽の手を引き寄せた。「私、それがずっと愉しかったのよ」

「……そっか」

ならそれも悪くないと思った。

だから神楽は白い手をぎゅっと握った。

「……僕も終って呼び続けるからな」

「どうぞ。愛しの南君」

二人の声が静かにこだまする。

そんな誰もいない学校の図書館。

霞の白い頬を紅く染めたのは窓から差し込む夕日だったか、あるいは神楽だったか。

それは悪魔も知らない、彼女の秘密。

——終